

蔵廻り遺跡
榎坂窯跡

2019年9月

国土交通省浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

くらまわ
蔵廻り遺跡
えのきざか
榎坂窯跡

2019年9月

国土交通省浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

序

一般国道9号の浜田市三隅町～益田市遠田町間については、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、中国地方整備局浜田河川国道事務所では山陰自動車道の一部である三隅・益田道路を事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成28～30年度に実施した益田市西平原町地内に所在する蔵廻り遺跡、益田市土田町地内に所在する榎坂窯跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

蔵廻り遺跡は中世の河道跡及び近世の水田跡、榎坂窯跡は近代の窯跡を確認し、当時の益田地域に居住した人々の生活と、物作りの歴史を解明する資料が得られました。本報告書がこの地域の歴史を解明する基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

令和元年9月

国土交通省中国地方整備局

浜田河川国道事務所長 安野 聡

序

本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成28～30年度に実施した一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

発掘調査を行なった蔵廻り遺跡では、中世の河道および近世の水田跡が確認されました。また、榎坂窯跡では大正時代～昭和時代初期の瓦窯が発見され、石見地方西部における瓦産業の歴史を解明する上で貴重な成果を得ました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

遺跡の調査や報告書作成にあたっては、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめとする諸機関、多くの地元の方々に御協力をいただきました。関係の皆様には厚くお礼を申し上げます。

令和元年9月

島根県教育委員会

教育長 新田 英夫

例言

1. 本書は島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局から委託を受けて、平成28～30年度に実施した一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

蔵廻り遺跡（島根県益田市西平原町562-2） 3,100㎡

榎坂窯跡（島根県益田市土田町838-3） 1,800㎡

3. 調査組織

平成28年度現地調査

〔事務局〕 萩 雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、波部宏之（総務課長）、池淵俊一（管理課長）

〔調査担当者〕 林 健亮（調査第3課長）、久保田一郎（企画員）、松山智弘（嘱託職員）、世良 啓（調査補助員）

平成29年度現地調査

〔事務局〕 萩 雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聡（総務課長）、池淵俊一（管理課長）

〔調査担当者〕 間野大丞（調査第3課長）、久保田一郎（企画員）、川崎英司（調査補助員）、世良 啓（調査補助員）

平成30年度報告書作成

〔事務局〕 椿 真治（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋 聡（総務課長）、守岡正司（管理課長）

〔調査担当者〕 角田徳幸（調査第2課長）、久保田一郎（企画員）、飯塚由起（調査補助員）

4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、島根県教育委員会が大畑建設株式会社へ委託した。

5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（順不同、敬称略、肩書は当時）
田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）、村上勇（益田市文化財保護審議会会長）、阿部志朗（島根県立浜田高校教諭）、榊原博英（浜田市教育委員会文化財係長）、熱田貴保（古代出雲歴史博物館調整監）、木原光（益田市教育委員会文化財課長）、佐伯昌俊（同主任事務）

6. 挿图中的方位北は、測量法に基づく平面直角Ⅲ座標系 X 軸方向を指し、座標系 XY 座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。

7. 本書で使用した第2、4図は国土地理院の1/50,000地図（益田、仙道郷、三隅）、第3図は大日本陸地測量部1/50,000地形図（明治28年作成）を使用して作成したものである。

8. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用し、Adobe社のAdobe InDesign CC、Adobe IllustratorCS5、Adobe PhotoshopCCを用いて作業を行った。

9. 本書の編集・執筆は久保田が行い、掲載した図表は、調査担当者及び遺物整理事業員が作成した。

10. 本書掲載の図面、写真、出土遺物は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

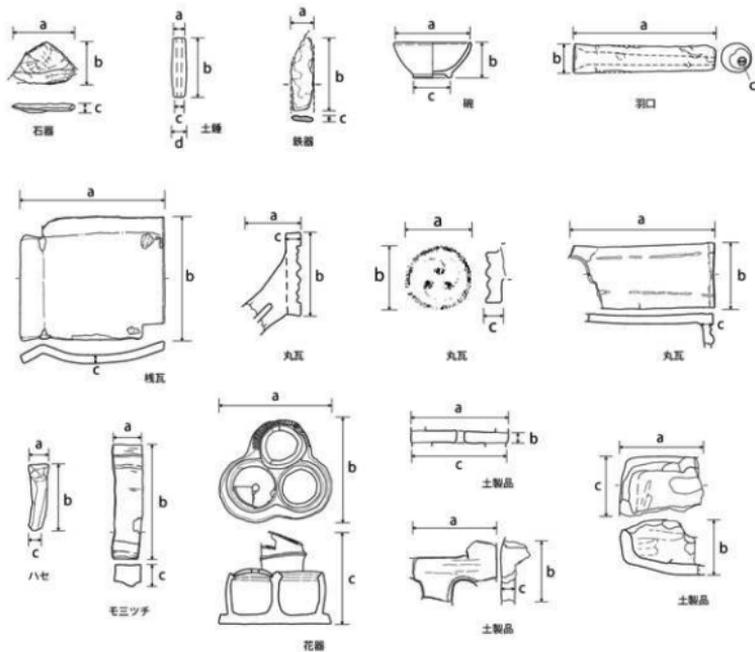
凡例

1. 遺構の略号は下記のとおりである。

SI：竪穴住居 SK：土坑 SD：溝状遺構 SX：性格不明遺構

2. 本文中・挿図中・写真図版中の遺物番号は一致する。

3. 遺物観察表の法量の計測値は、下図における a,b,c,d 各部分の計測値を記したものである。



本文目次

第1章 調査に至る経緯（久保田）	1
第2章 位置と環境（久保田）	3
第3章 葎廻り遺跡の調査（久保田）	9
第1節 位置と環境	9
第2節 発掘調査と整理作業の経過	11
第3節 遺構の概要	14
第4節 中世河道、A・E・F区の調査	14
第5節 D区の調査	44
第6節 B区の調査	47
第7節 小結	55
第4章 榎坂窯跡の調査（久保田）	59
第1節 位置と環境	59
第2節 発掘作業と整理作業の経過	59
第3節 連房式登窯の調査	63
第4節 平坦面1、礎石建物群の調査	70
第5節 粘土採掘坑等の調査	78
第6節 その他の遺構の調査	82
第7節 小結	86
第8節 小結	99
第5章 葎廻り遺跡周辺地域の古植生変遷（文化財調査コンサルタント株式会社 渡邊正巳）	107
遺物観察表	113

挿図目次

第 1 図	遺跡の位置図	1	第 32 図	蔵廻り遺跡河道跡・A・E・F 区出土遺物 (3)	42
第 2 図	事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地 (S=1/10000)	3	第 33 図	蔵廻り遺跡河道跡・A・E・F 区出土遺物 (4)	43
第 3 図	益田市東部旧地形 (S=1/50000)	4	第 34 図	蔵廻り遺跡 D 区遺構配置図 (S=1/200)	45
第 4 図	益田市沿岸東部の遺跡 (S=1/50000)	6	第 35 図	蔵廻り遺跡 D 区土層断面図 (S=1/100)	45
第 5 図	蔵廻り遺跡試掘トレンチ位置図 (S=1/2000)	10	第 36 図	蔵廻り遺跡 D 区遺構図 (S=1/40)	46
第 6 図	蔵廻り遺跡調査配置図 (S=1/1000)	12	第 37 図	蔵廻り遺跡 D 区出土遺物 (S=1/3)	47
第 7 図	蔵廻り遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/60)	13	第 38 図	蔵廻り遺跡 B 区遺構配置図 (S=1/200)	48
第 8 図	蔵廻り遺跡遺構配置図・調査後地形測量図 (S=1/400)	15	第 39 図	蔵廻り遺跡 B 区土層図 (S=1/60)	49
第 9 図	蔵廻り遺跡基本土層図 (1) (S=1/100)	16	第 40 図	蔵廻り遺跡 B 区流路 1 平面図 (S=1/20)	50
第 10 図	蔵廻り遺跡基本土層図 (2) (S=1/80・1/60)	17	第 41 図	蔵廻り遺跡 B 区流路 1 セクション図 (S=1/60)	51
第 11 図	蔵廻り遺跡基本土層図 (3) (S=1/80)	18	第 42 図	蔵廻り遺跡 B 区 SK1 実測図 (S=1/30)	51
第 12 図	蔵廻り遺跡中世河道跡遺構配置 (S=1/300)	19	第 43 図	蔵廻り遺跡 B 区溝状遺構実測図 (1) (S=1/40)	52
第 13 図	蔵廻り遺跡中世河道跡遺物出土位置図 (S=1/250)	20	第 44 図	蔵廻り遺跡 B 区溝状遺構実測図 (2) (S=1/40)	53
第 14 図	蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション図 (1) (S=1/40)	21	第 45 図	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (1) (S=1/3)	54
第 15 図	蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション図 (2) (S=1/40)	22	第 46 図	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (2) (S=1/3)	55
第 16 図	蔵廻り遺跡石垣 4 平面図 (S=1/80)	23	第 47 図	榎坂窯跡調査区の位置と周辺の遺跡 (S=1/2000)	60
第 17 図	蔵廻り遺跡石垣 4・5 実測図 (S=1/60)	24	第 48 図	榎坂窯跡調査区配置図・調査前地形測量図 ・試掘位置図 (S=1/400)	61
第 18 図	蔵廻り遺跡根太列 1 実測図 (S=1/60)	26	第 49 図	榎坂窯跡試掘調査セクション図 (S=1/40)	62
第 19 図	蔵廻り遺跡石垣 4・根太列 4 平面図 (S=1/60)	27	第 50 図	榎坂窯跡調査後地形測量図 (S=1/400)	64
第 20 図	蔵廻り遺跡石垣 8・10・根太列 3 平面図 (S=1/80)	28	第 51 図	榎坂窯跡遺構配置図 (S=1/400)	65
第 21 図	蔵廻り遺跡石垣 7 実測図 (S=1/40)	29	第 52 図	榎坂窯跡連房式登窯 (S=1/80)	66
第 22 図	蔵廻り遺跡石垣 9・6 実測図 (S=1/50)	30	第 53 図	榎坂窯跡連房式登窯側面見通し図 (S=1/60)	67
第 23 図	蔵廻り遺跡平坦面 1 上面の遺構 (S=1/40・1/20)	31	第 54 図	榎坂窯跡連房式登窯側面見通し図 (S=1/60)	68
第 24 図	蔵廻り遺跡根太列 2 平面図 (S=1/40)	33	第 55 図	榎坂窯跡連房式登窯周辺断面図 (S=1/60)	69
第 25 図	蔵廻り遺跡石垣 1・2・3・11 平面図 (S=1/200)	34	第 56 図	榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (S=1/6)	71
第 26 図	蔵廻り遺跡 F 区ビット群・溝状遺構実測図 (S=1/40・1/80)	36	第 57 図	蔵廻り遺跡平坦面 1 土層図 (S=1/60)	72
第 27 図	蔵廻り遺跡 A 区ビット群平面図 (S=1/80)	37	第 58 図	蔵廻り遺跡 SB1・SD1 実測図 (S=1/100)	74
第 28 図	蔵廻り遺跡 A 区ビット群セクション図 (S=1/60)	38	第 59 図	蔵廻り遺跡 SB1 礎石及び根石実測図 (S=1/60)	75
第 29 図	蔵廻り遺跡 A 区 SK2 実測図 (S=1/40)	39	第 60 図	蔵廻り遺跡 SK1 実測図 (S=1/40)	76
第 30 図	蔵廻り遺跡河道跡・A・E・F 区出土遺物 (1) (S=1/3)	40	第 61 図	蔵廻り遺跡 SB1・SD1 出土遺物 (S=1/3・1/4)	77
第 31 図	蔵廻り遺跡河道跡・A・E・F 区出土遺物 (2) (S=1/3)	41	第 62 図	蔵廻り遺跡 SB2・SD2 実測図 (S=1/60)	78
			第 63 図	蔵廻り遺跡 SB2・SD2 出土遺物 (S=1/3・1/1)	79
			第 64 図	蔵廻り遺跡粘土採掘坑跡・SX1・物原実測図 (S=1/120)	80

第 65 図	榎坂窯跡粘土採掘坑跡縦断セクション図 (S=1/60)	81
第 66 図	榎坂窯跡粘土採掘坑跡横断セクション図 (S=1/60)	82
第 67 図	榎坂窯跡 SX1 実測図 (S=1/40)	83
第 68 図	榎坂窯跡物原断面図 (S=1/60)	84
第 69 図	榎坂窯跡トレンチ 7・8 土層図 (S=1/60)	84
第 70 図	榎坂窯跡トレンチ 2 土層図 (S=1/80)	85
第 71 図	榎坂窯跡トレンチ 3 土層図 (S=1/80)	85
第 72 図	榎坂窯跡出土遺物 (1) 陶器その 1 (S=1/3・1/4)	87
第 73 図	榎坂窯跡出土遺物 (2) 陶器その 2 (S=1/3)	88
第 74 図	榎坂窯跡出土遺物 (3) 磁器その 1 (S=1/3)	89
第 75 図	榎坂窯跡出土遺物 (4) 磁器その 2 (S=1/3)	91
第 76 図	榎坂窯跡出土遺物 (5) 瓦その 1 軒丸瓦 (S=1/3)	93
第 77 図	榎坂窯跡出土遺物 (6) 瓦その 2 棧瓦・軒丸瓦・丸瓦・雁振瓦 (S=1/6)	95
第 78 図	榎坂窯跡出土遺物 (7) 瓦その 3 熨斗瓦・鳥伏間・棟止瓦 (S=1/6)	96
第 79 図	榎坂窯跡出土遺物 (8) 竈道具 (S=1/3・1/6)	97
第 80 図	榎坂窯跡出土遺物 (9) 土製品・ガラス製品・竹材 (S=1/3)	98

表目次

第 1 表	事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地一覧	3	第 3 表	蔵廻り遺跡出土遺物観察表	113
第 2 表	益田市沿岸東部の遺跡一覧	6	第 4 表	榎坂窯跡出土遺物観察表	115

写真図版目次

写真図版 1	1	蔵廻り遺跡遠景 (北から)	3	蔵廻り遺跡 F 区 SD25 検出
	2	蔵廻り遺跡遠景 (南から)	4	蔵廻り遺跡 F 区 SD25 完掘
写真図版 2	1	蔵廻り遺跡 E・F 区 調査前	写真図版 15	1 蔵廻り遺跡 E 区近代の水田面
	2	蔵廻り遺跡 A 区調査前	2	蔵廻り遺跡 E 区石垣 1・2
写真図版 3	1	蔵廻り遺跡 F 区北壁土層	3	蔵廻り遺跡 E 区石垣 1
	2	蔵廻り遺跡 E 区北壁土層	写真図版 16	1 蔵廻り遺跡 E 区石垣 2
写真図版 4	1	蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション (F 区東壁)	2	蔵廻り遺跡 E 区石垣 3
	2	蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション (E 区東壁)	3	蔵廻り遺跡 F 区ピット群検出
写真図版 5	1	蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション (E 区南壁)	写真図版 17	1 蔵廻り遺跡 A 区ピット群検出 (南から)
	2	蔵廻り遺跡 E 区河道跡検出 (北から)	2	蔵廻り遺跡 A 区ピット群完掘 (南から)
写真図版 6	1	蔵廻り遺跡 A 区河道跡検出 (南から)	写真図版 18	1 蔵廻り遺跡 D 区調査前 (西から)
	2	蔵廻り遺跡中世河道跡完掘 (東から)	2	蔵廻り遺跡 D 区完掘 (西から)
写真図版 7	1	蔵廻り遺跡中世河道跡完掘 (北西から)	写真図版 19	1 蔵廻り遺跡 B 区調査前 (北西から)
	2	蔵廻り遺跡中世河道跡完掘 (南から)	2	蔵廻り遺跡 B 区完掘 (北西から)
写真図版 8	1	蔵廻り遺跡中世河道跡セクション (第 16 図 C ライン)	写真図版 20	1 蔵廻り遺跡 B 区北壁土層 (1)
	2	蔵廻り遺跡中世河道跡セクション (第 16 図 B ライン)	2	蔵廻り遺跡 B 区北壁土層 (2)
	3	蔵廻り遺跡石垣 4 セクション (第 16 図 A ライン)	3	蔵廻り遺跡 B 区北壁土層 (3)
写真図版 9	1	蔵廻り遺跡石垣 4 セクション	写真図版 21	1 蔵廻り遺跡 B 区西壁土層 (1)
	2	蔵廻り遺跡石垣 4・根太列 4	2	蔵廻り遺跡 B 区西壁土層 (2)
	3	蔵廻り遺跡 E 区石垣 4・5	3	蔵廻り遺跡 B 区西壁土層 (3)
写真図版 10	1	蔵廻り遺跡 E 区石垣 4	写真図版 22	1 蔵廻り遺跡 B 区西壁土層 (4)
	2	蔵廻り遺跡 E 区石垣 5	2	蔵廻り遺跡 B 区 SK1 セクション
	3	蔵廻り遺跡 E 区根太列 1	3	蔵廻り遺跡 B 区 SK1 石出土状況
写真図版 11	1	蔵廻り遺跡 F 区根太列 3	写真図版 23	1 蔵廻り遺跡 B 区 SK1 完掘
	2	蔵廻り遺跡 F 区石垣 10	2	蔵廻り遺跡 B 区流路 1 セクション B (南西から)
	3	蔵廻り遺跡 F 区西部杭列	3	蔵廻り遺跡 B 区流路 1 セクション A (南西から)
	4	蔵廻り遺跡 F 区石垣 9 (北から)	写真図版 24	1 蔵廻り遺跡 B 区流路 1 完掘 (北から)
写真図版 12	1	蔵廻り遺跡 F 区石垣 9 北端	2	蔵廻り遺跡 B 区 SD1 検出 (西から)
	2	蔵廻り遺跡 F 区石垣 7	3	蔵廻り遺跡 B 区 SD1 完掘 (東から)
	3	蔵廻り遺跡 F 区石垣 8	写真図版 25	1 蔵廻り遺跡 A 区出土遺物 (1)
写真図版 13	1	蔵廻り遺跡 F 区石垣 6・根太列 2	2	蔵廻り遺跡 A 区出土遺物 (1)
	2	蔵廻り遺跡 F 区石垣 6	写真図版 26	1 蔵廻り遺跡 E 区出土遺物 (1)
	3	蔵廻り遺跡 F 区根太列 2	2	蔵廻り遺跡 E 区出土遺物 (1)
写真図版 14	1	蔵廻り遺跡 F 区石垣 6 南端	写真図版 27	1 蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (1)
	2	蔵廻り遺跡 F 区 SD24・27 完掘	2	蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (1)
			2	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (2)
			3	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (2)
			4	蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (3)

	5	蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (3)				榎坂窯跡礎石建物群
写真図版 29	1	蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (4)	写真図版 42	1	榎坂窯跡 SB1 (北東から)	
	2	蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (5) ・ A 区出土遺物 (2)		2	榎坂窯跡 SB1・SK1 (北東から)	
	3	蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (5) ・ A 区出土遺物 (2)		3	榎坂窯跡 SB1 (南西から)	
	4	蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (5) ・ A 区出土遺物 (2)	写真図版 43	1	榎坂窯跡 SB2 (南西から)	
写真図版 30	1	蔵廻り遺跡 D 区出土遺物		2	榎坂窯跡 SB1 南辺石列	
	2	蔵廻り遺跡 D 区出土遺物		2	榎坂窯跡平坦面 1 セクション (第 60 図 C ライン)	
	3	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (1)		3	榎坂窯跡 SB1 根石出土状況	
写真図版 31	1	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (2)		4	榎坂窯跡 SK1 完掘	
	2	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (3)	写真図版 44	1	榎坂窯跡粘土採掘坑跡	
写真図版 32	1	蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (4)		2	榎坂窯跡粘土採掘坑跡 縦断セクション (1)	
写真図版 33	1	榎坂窯跡遠景		3	榎坂窯跡粘土採掘坑跡 縦断セクション (2)	
	2	榎坂窯跡遠景 (東から)	写真図版 45	1	榎坂窯跡横断セクション (1)	
	3	榎坂窯跡調査前 (南西から)		2	榎坂窯跡横断セクション (2)	
写真図版 34	1	榎坂窯跡連房式登窯調査前		3	榎坂窯跡 SX1 (1)	
	2	榎坂窯跡平坦面 1 調査前	写真図版 46	1	榎坂窯跡 SX1 (2)	
	3	榎坂窯跡粘土採掘坑跡調査前		2	榎坂窯跡 SX1 (3)	
写真図版 35	1	榎坂窯跡連房式登窯検出		3	榎坂窯跡 SX1 堆積土	
	2	榎坂窯跡連房式登窯トンバリ遺存状況		4	榎坂窯跡平坦面 2 肩部	
	3	榎坂窯跡連房式登窯中央セクション	写真図版 47	1	榎坂窯跡平坦面 2 瓦列	
写真図版 36	1	榎坂窯跡連房式登窯完掘		2	榎坂窯跡トレンチ 7 セクション (1)	
写真図版 37	1	榎坂窯跡連房式登窯上部		3	榎坂窯跡トレンチ 7 セクション (2)	
	2	榎坂窯跡連房式登窯		4	榎坂窯跡トレンチ 8 セクション	
	3	断ち割りセクション (1)	写真図版 48	1	榎坂窯跡物原セクション	
	3	榎坂窯跡連房式登窯		2	榎坂窯跡トレンチ 2 セクション	
	4	断ち割りセクション (2)		3	榎坂窯跡トレンチ 3 セクション	
	4	榎坂窯跡連房式登窯第 3 室	写真図版 49	1	榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (1)	
写真図版 38	1	榎坂窯跡連房式登窯第 5 室		2	榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (1)	
	2	榎坂窯跡連房式登窯煙道部 (1)	写真図版 50	1	榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (2)	
	3	榎坂窯跡連房式登窯煙道部 (2)		2	榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (2)	
	4	榎坂窯跡連房式登窯煙道部 (3)		3	榎坂窯跡 SB1・SD1 出土遺物 (1)	
写真図版 39	1	榎坂窯跡連房式登窯	写真図版 51	1	榎坂窯跡 SB1・SD1 出土遺物 (2)	
	2	第 3・4 室作業テラス		2	榎坂窯跡 SB1・SD1 出土遺物 (2)	
	2	榎坂窯跡連房式登窯第 5 室作業テラス		3	榎坂窯跡 SB2・SD2 出土遺物 (2)	
	3	榎坂窯跡連房式登窯作業テラス		4	榎坂窯跡 SB2・SD2 出土遺物 (2)	
	4	断ち割りセクション		5	榎坂窯跡 SB2・SD2 出土遺物 (2)	
	4	榎坂窯跡連房式登窯排水溝		6	榎坂窯跡 SB2・SD2 出土遺物 (2)	
写真図版 40	1	榎坂窯跡連房式登窯		7	榎坂窯跡出土遺物 (1)	
	2	排水溝切り合い		8	榎坂窯跡出土遺物 (1)	
	2	榎坂窯跡連房式登窯	写真図版 52	1	榎坂窯跡出土遺物 (2)	
	3	排水溝セクション		2	榎坂窯跡出土遺物 (2)	
	3	榎坂窯跡連房式登窯		3	榎坂窯跡出土遺物 (2)	
	4	排水溝内モミツチ出土状況		4	榎坂窯跡出土遺物 (2)	
写真図版 41	1	榎坂窯跡連房式登窯煙道下部構造		5	榎坂窯跡出土遺物 (2)	
	2	榎坂窯跡連房式登窯 SK1 セクション				

写真図版 53	1	榎坂窯跡出土遺物 (3)	4	榎坂窯跡出土遺物 (11)	
	2	榎坂窯跡出土遺物 (3)	5	榎坂窯跡出土遺物 (11)	
写真図版 54	1	榎坂窯跡出土遺物 (4)	6	榎坂窯跡出土遺物 (11)	
	2	榎坂窯跡出土遺物 (4)	7	榎坂窯跡出土遺物 (11)	
	3	榎坂窯跡出土遺物 (4)	8	榎坂窯跡出土遺物 (11)	
	4	榎坂窯跡出土遺物 (4)	写真図版 62	1	榎坂窯跡出土遺物 (12)
	5	榎坂窯跡出土遺物 (4)	2	榎坂窯跡出土遺物 (12)	
	6	榎坂窯跡出土遺物 (4)	3	榎坂窯跡出土遺物 (12)	
	7	榎坂窯跡出土遺物 (4)	4	榎坂窯跡出土遺物 (12)	
	8	榎坂窯跡出土遺物 (4)	5	榎坂窯跡出土遺物 (12)	
写真図版 55	1	榎坂窯跡出土遺物 (5)	6	榎坂窯跡出土遺物 (12)	
	2	榎坂窯跡出土遺物 (5)	写真図版 63	1	榎坂窯跡出土遺物 (13)
	3	榎坂窯跡出土遺物 (5)	2	榎坂窯跡出土遺物 (13)	
	4	榎坂窯跡出土遺物 (5)	3	榎坂窯跡出土遺物 (13)	
	5	榎坂窯跡出土遺物 (5)	4	榎坂窯跡出土遺物 (13)	
	6	榎坂窯跡出土遺物 (5)	5	榎坂窯跡出土遺物 (13)	
	7	榎坂窯跡出土遺物 (5)	6	榎坂窯跡出土遺物 (13)	
	8	榎坂窯跡出土遺物 (5)	写真図版 64	1	榎坂窯跡出土遺物 (14) 写真のみ掲載
写真図版 56	1	榎坂窯跡出土遺物 (6)	2	榎坂窯跡出土遺物 (14) 写真のみ掲載	
	2	榎坂窯跡出土遺物 (6)			
写真図版 57	1	榎坂窯跡出土遺物 (7)			
	2	榎坂窯跡出土遺物 (7)			
写真図版 58	1	榎坂窯跡出土遺物 (8)			
	2	榎坂窯跡出土遺物 (8)			
	3	榎坂窯跡出土遺物 (8)			
	4	榎坂窯跡出土遺物 (8)			
	5	榎坂窯跡出土遺物 (8)			
	6	榎坂窯跡出土遺物 (8)			
	7	榎坂窯跡出土遺物 (8)			
写真図版 59	1	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
	2	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
	3	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
	4	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
	5	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
	6	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
	7	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
	8	榎坂窯跡出土遺物 (9)			
写真図版 60	1	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
	2	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
	3	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
	4	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
	5	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
	6	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
	7	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
	8	榎坂窯跡出土遺物 (10)			
写真図版 61	1	榎坂窯跡出土遺物 (11)			
	2	榎坂窯跡出土遺物 (11)			
	3	榎坂窯跡出土遺物 (11)			

第1章 調査に至る経緯

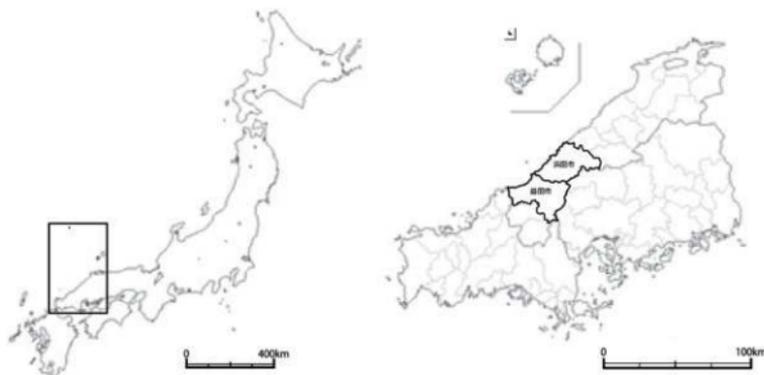
第1節 事業計画の概要

一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離755kmの、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となっており、島根県下でも例外ではない。海岸沿いを通る浜田市や益田市では急勾配でカーブが連続する区間が多く、交通渋滞や交通事故などが発生している。また緊急時の代替道路の確保が難しいのが現状である。

こうした状況を改善するため、国土交通省により三隅益田道路の事業化が図られ、平成23年10月30日に三隅益田道路として都市計画決定された。三隅益田道路は、浜田市三隅町森溝上の石見三隅インターチェンジを起点として、益田市遠田町の遠田インターチェンジまでを結ぶ延長15.2kmの自動車専用道路として、平成24年度に事業化され、平成27年度に工事着手している。

第2節 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

この計画・事業化にあたり、国土交通省から島根県教育委員会に対して、三隅益田道路建設予定地内遺跡の有無について照会があった。これを受けて島根県教育委員会では、浜田市と益田市の両教育委員会の協力のもと、平成25年2月と平成26年2月～3月に分布調査を実施した。その結果、周知の遺跡に加え、試掘調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘調査が必要な旨を平成26年5月13日付け島教文財第161号で回答した。その後も工専用道路等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。



第1図 遺跡の位置図

島根県教育委員会と国土交通省は地元教育委員会も含めて協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成26年度から国庫補助事業により実施した。本報告で扱う蔵廻り遺跡・榎坂窯跡については平成27年4月～6月に試掘確認調査を実施した。

第3節 法的手続き

上記遺跡は平成27年9月8日付け国中整浜調設第87号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長あて提出された。それに対して島根県教育委員会は、平成27年9月8日付け島教文財第120号の40で記録作成のための発掘調査の実施を勧告している。調査は埋蔵文化財調査センターが行うこととなり、国土交通省と工程上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第99条第1項の規定による通知は下記のとおりで、埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出している。

文化財保護法第99条第1項の規定による通知

- | | |
|----------|---------------------|
| 1. 榎坂窯跡 | 平成28年4月19日付け島教埋第21号 |
| 2. 蔵廻り遺跡 | 平成29年9月5日付け島教埋第255号 |
| | 平成30年4月25日付け島教埋第69号 |

第4節 発掘作業と整理作業

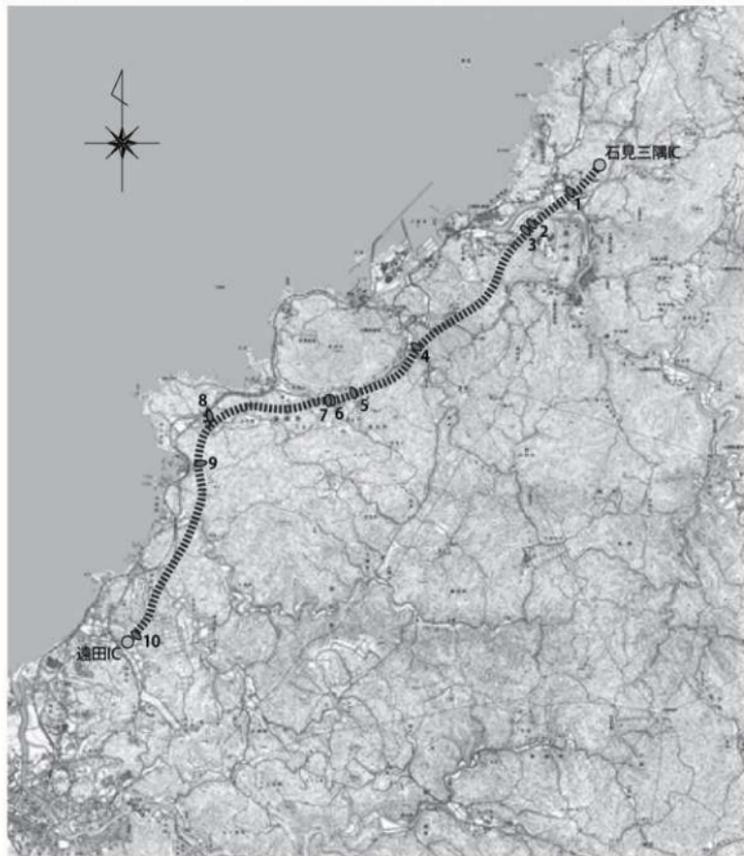
榎坂窯跡の調査は平成28年度、調査員1名、嘱託職員1名、調査補助員1名の1班で調査を実施し、11月15日に現地調査を完了した。

蔵廻り遺跡は平成29年度、調査員1名、調査補助員2名の1班で調査を実施した。A区、B区、D区の調査を平成29年12月21日に終えたが、事業の進捗の関係により遺跡全体の調査を行うことができなかったため平成30年度にも発掘調査を実施することとなった。平成30年度は調査員2名、調査補助員1名の1班で調査を実施した。E区、F区の調査を9月20日に終えている。

報告書作成については、平成28年度～30年度に調査を行った遺跡のうち2遺跡について、平成30年度後半期に調査員1名、調査補助員1名の1班で報告書の作成を実施した。遺物の実測は調査補助員を中心に行った。

第2章 位置と環境

平成13年度から平成21年度にかけて行われた益田道路地内の調査により、益田市東部の丘陵地帯で旧石器～縄文時代の状況が明らかになった。久城西Ⅱ遺跡・堂ノ上遺跡では旧石器時代末～縄文時代草創期の尖頭器が出土している。この地域では遺跡の初見が1万年以上前まで遡ることが知られる。若葉台遺跡では縄文時代中期の落とし穴が確認されている。鎌手公民館所蔵の考古資

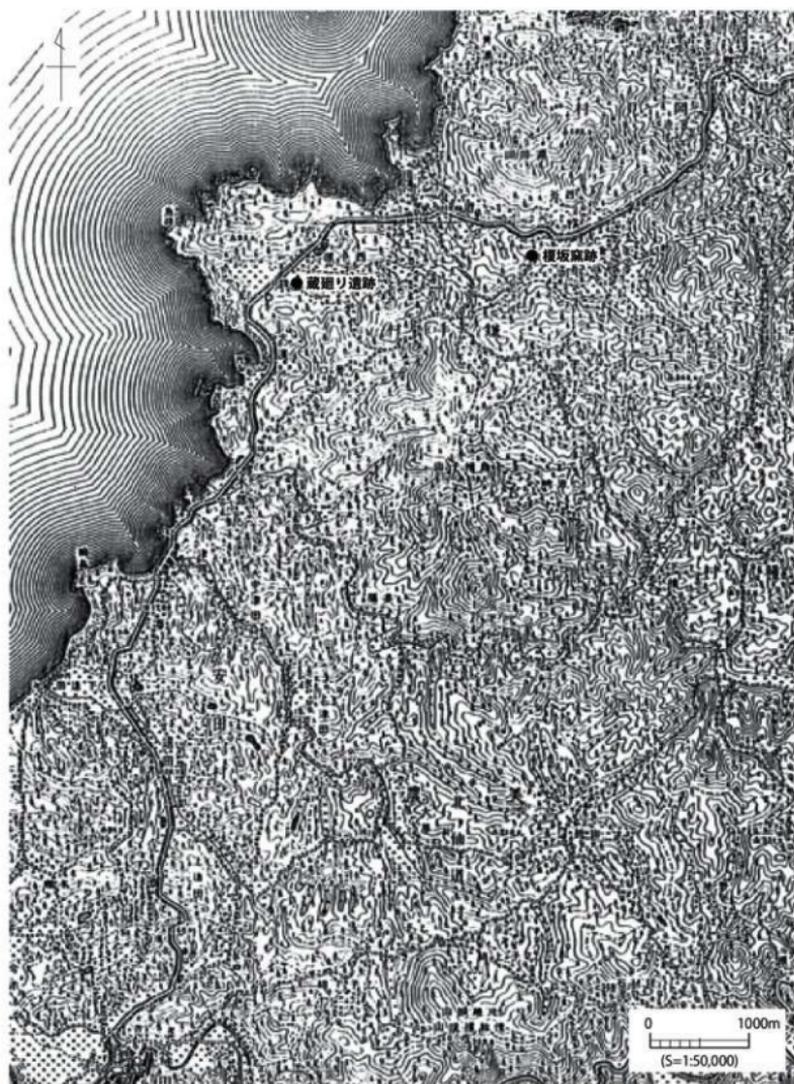


第2図 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地 (S=1 / 100000)



第1表 事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地一覧

1	海石西遺跡	2	峰口古墓	3	上古市遺跡	4	普源田野跡	5	廻り田遺跡	6	近世山陰道跡(馬橋地区)
7	榎坂窯跡	8	蔵廻り遺跡	9	国ヶ峠遺跡	10	神出西遺跡				



第3図 益田市東部旧地形 (S=1/50000)

料の中に縄文土器が含まれており、鎌手地域でも縄文時代から人間の活動が確認できる。

益田平野北部では、縄文後期から遺跡が確認されるようになる。沖手遺跡で縄文時代後期～晩期の丸木舟が出土し、益田平野南部でも三宅御土居跡・土井後遺跡で縄文時代後期～晩期の遺物が出土している。この時期に「古益田湖」が埋没し、縄文人の活動範囲が平野部に広がっていたことがうかがわれる。

弥生時代には、益田平野北部の沖手遺跡で弥生時代中期の水路とみられる溝状遺構が確認されており、陸化した沖積地でしだいに水田開発が進む様子が明らかとなっている。弥生時代後期には、益田道路地内の調査で集落跡が多数確認されており（原浜遺跡、久城西1遺跡、久城東遺跡、堂ノ上遺跡）、益田市東部の丘陵地帯が生活の場となったことが知られる。

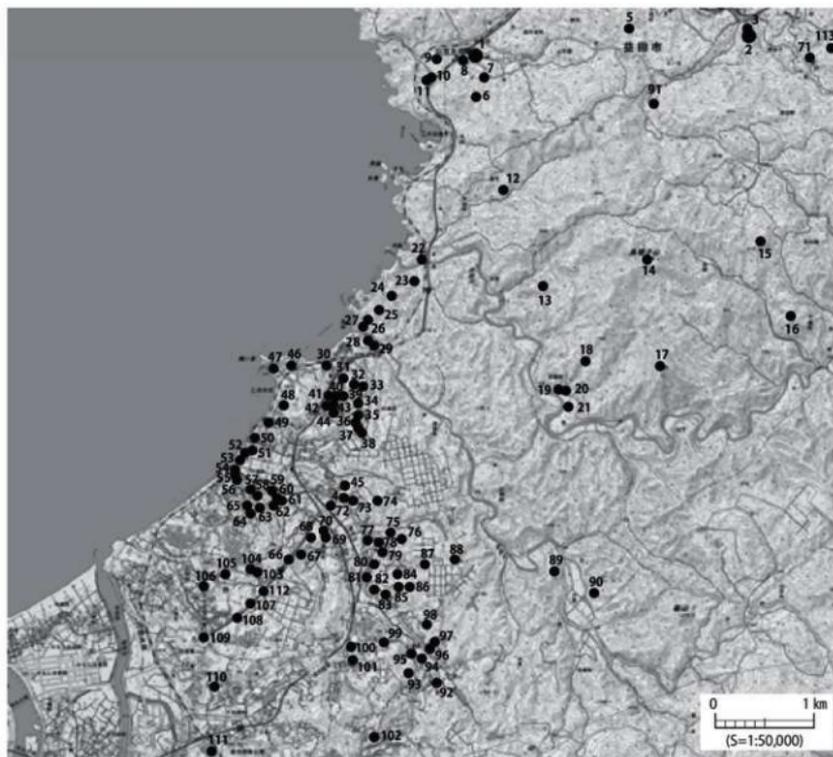
古墳時代の遺跡では、益田市東部の丘陵部に大元1号墳、スクモ塚古墳、小丸山古墳等、首長墓とみられる大規模古墳が構築される。大元古墳群（前期）は比較的小規模な遠田川沿いの平野を視野に入れる位置にある。周囲には柳ヶ嶺古墳群が分布し、小規模な古墳を築く有力者層の成長をうかがわせる。四ツ塚古墳群（前期）、スクモ塚古墳（中期）、小丸山古墳（後期）は大元古墳よりも西に位置し、益田平野全体を視野に入れる丘陵上にある。古墳時代後期には、益田平野に面した丘陵部に片山横穴墓群、三井裏横穴墓群、南長迫横穴墓群、北長迫横穴墓群が形成されるなど、益田平野を取り巻く地域で古墳の分布が密になっている。古墳時代後期には、益田市東部の津田町にも鶴ノ鼻古墳群が出現し、豊富な副葬品が出土している。さらに、蔵廻り遺跡と榎坂窯跡の中間に位置する土田町中心部にも鎌手丸山古墳が存在し、小規模な首長が成長しつつあったことがわかる。

益田市東部では古墳時代から奈良時代にかけての須恵器窯の分布が顕著である。鎌手地区では芝窯跡、中塚窯跡が知られている。西方の津田町で杉迫窯跡・栄ヶ迫窯跡、遠田町で本片子窯跡が確認されている。良質の粘土が分布していたことによるであろうが、須恵器の供給地となっていたことが想定される。

古代の集落は、益田市西部の丘陵上に大嶺遺跡、益田市東部の丘陵上に久城東遺跡が確認されている。平野南西部に位置する中小路遺跡では、径60～80cmの柱穴をもつ掘立柱建物が発見されており、奈良～平安時代の官衙跡と推定されている。また、内陸部の美都町に所在する酒屋原遺跡では、古代の円面硯が出土しており、奈良時代～平安時代の官衙跡と推定されている。

平安時代には益田荘、長野荘といった荘園が成立する。鎌倉時代以後は益田市の拠点として発展しており、益田氏関連の遺跡が分布する。七尾城は益田氏が拠点とした山城で、益田平野東部の丘陵上に位置する。山麓には、益田氏が拠点とした居館である三宅御土居跡があり、川や堀、土塁によって周囲の防御を固めている。中国、朝鮮を相手とする貿易は、益田氏の主要な経済基盤の一つとなっているが、これに関連した港湾関連遺跡も高い密度で分布する。益田市街の北部に位置する中島町・中吉田町付近には大きく湾が入り込んでおり、海岸に突出する形で形成された砂丘の中須地区が船着き場となった。中須東原遺跡、中須西原遺跡はこの砂丘部に位置し、輸入された大量の輸入陶磁器が出土している。市街地中心部でも今市船着場跡が知られている。

蔵廻り遺跡や榎坂窯跡が所在する益田市東部から三隅町西部にかけては、「岡見郷」及び「納田郷」であり、益田氏と三隅氏の境界領域に位置している。16世紀前半段階では三隅氏の所領であったが、天文20～24（1551～1555）年に益田氏が攻略している。しかし、吉川氏との関係で知行でき



第4図 益田市沿岸東部の遺跡 (S=1/50000)

第2表 益田市沿岸東部の遺跡一覧

1	蔵廻り遺跡	24	城ヶ浦城跡	47	竊ノ鼻古墳群	70	大山遺跡	93	吉ヶ益古墳
2	榎坂塚跡	25	上の神古墳	48	高芝遺跡	71	金山下跡跡	94	三反田遺跡
3	近世山階道跡 (馬橋地区)	26	峠山遺跡	49	佐々木塚跡	72	神出遺跡	95	三百田遺跡
4	神出西遺跡	27	寺ノ前古墳	50	前浜遺跡	73	宝珠庵益遺跡	96	森ヶ内古墳
5	鎌手丸山古墳	28	水雲島古墳	51	前浜古墳	74	獄城跡	97	石仏古墳
6	園ヶ神遺跡	29	水雲島遺跡	52	ウエ古墳	75	北ノ平塚塚	98	原ヶ益遺跡
7	神納古墳	30	大道古墳群	53	スケ入道遺跡	76	木原古墳	99	辻遺跡
8	佐々木塚跡	31	片子遺跡	54	原塚跡	77	北ヶ泊遺跡	100	地下田南遺跡
9	平原遺跡	32	片子東遺跡	55	木屋ヶ森古墳	78	神明北遺跡	101	地下田北遺跡
10	芝塚跡群	33	日々遺跡	56	進徳遺跡	79	神明古墳	102	谷上古墳
11	中塚塚跡群	34	杉道塚跡	57	前原遺跡	80	神明遺跡	103	尾堤古墳群
12	大石鈔跡	35	本片子東遺跡	58	原遺跡	81	平遺跡	104	吉ヶ益古墳
13	滝の上鈔跡	36	本片子塚跡	59	森ノ上北遺跡	82	柳ヶ益古墳	105	第2工場跡
14	烏帽子山城跡	37	袋ヶ泊塚跡	60	森ノ上東遺跡	83	貝崎古墳	106	スクモ塚古墳
15	宇治城跡	38	本片子南遺跡	61	寺田遺跡	84	蔵ノ段遺跡	107	久城西1遺跡
16	高倉山城跡	39	本片子北遺跡	62	森ノ上西遺跡	85	燈籠ノ辻遺跡	108	若葉台遺跡
17	平塚ヶ塚城跡	40	岩ヶ本遺跡	63	原南遺跡	86	大元古墳群	109	久城東遺跡
18	かんば鈔跡	41	西片子遺跡	64	原口東遺跡	87	木原益美遺跡	110	聖塚古墳
19	榎屋敷鈔跡	42	袋ヶ泊西遺跡	65	原口西遺跡	88	金堀古墳群	111	四ツ塚古墳群
20	赤福土居跡	43	寺町遺跡	66	原浜遺跡	89	大草城跡	112	久城西11遺跡
21	天道山城跡	44	袋ヶ泊東遺跡	67	流松南遺跡	90	大草古墳	113	大内新介弘直墓
22	木部郷古墳群	45	山城畑遺跡	68	流松遺跡	91	上の谷鈔跡		
23	井元遺跡	46	竊ノ鼻遺跡	69	高内古墳	92	杜山古墳		

ない状態であり（永禄13（1570）年2月9日付益田藤兼謙渡所領注文）、領有関係が複雑な地域であった。文禄・慶長の朝鮮侵攻に際し、益田氏の部下として輸送に参加した武士には遠田村、津田村、種村、木部村の武士が含まれており、本遺跡の周辺地域で小規模な武士層が分布していた状況が知られる。

当地域の陸上交通路は、岡見の普源田砦跡から南の種方面へ向かう河谷と、源田山の南麓の土田～岡見間の地峡を経て西へ進む近世山陰道があった。

一方で、当地では海上交通も活発であった。三隅を拠点とし、三隅氏や大内氏の下で所領や自由通行権を保障されつつ経済活動や、軍事行動に従事した大賀氏・三井氏などの海浜領主が知られている。益田市東部～浜田市西部の海浜部には、源田山城や城ヶ浦城（益田市津田町）等があり、海辺に位置する城館の分布密度が高く、海上交通の活発さを反映している可能性がある。

江戸時代以降は、高津川を境に東部は浜田藩領、西部は津和野藩領となった。益田地区は、窯業に適した粘土を産する「都野津層」の分布圏に含まれており、この粘土を生かした窯業が発達した。益田市西部に建設された萩・石見空港の建設予定地内で調査された仁右エ門山遺跡では、江戸時代後期に属する窯場が確認された。施釉赤瓦を主に生産しており、鬼瓦や鳥伏間、各種の屋根飾りを生産していた。調査したのは物原部分であり、連房式登窯は現地保存されている。同じく石見空港予定地内の相生遺跡では、江戸時代後期に属する連房式登窯、及び工房跡と推定される礎石建物、水澁槽等、窯業関連の一連の遺構が確認されている。

第3図は明治時代中期の地形を示している。蔵廻り遺跡の東方に、鎌手地域の主要な用水源であった通称「大堤」が確認できる。海岸に近い位置に国道が敷設され、現在の国道のルートとほぼ同じであるが、榎坂窯跡付近から南西へ直進する近世山陰道も存続し、地域の主要な交通路であり続けた。岡見から南進して内陸の種村へ向かう交通路も明瞭に確認できる。鎌手周辺はこの時代には依然として水田地帯で、街区の形成は見られない、鉄道開通前の状況を示している。

【参考文献】

矢富熊一郎『石西国道史』浜田国道工事事務所、1964年

矢富熊一郎『鎌手郷土史』島根県郷土史会、1966年

島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』1992年。

益田市教育委員会『中世今市船着場跡文化財調査報告書』2000年

島根県教育委員会『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』2002年

島根県教育委員会『沖手遺跡 - 1区の調査 -』2007年

益田市教育委員会『古代の益田を歩いてみよう』2009年

益田市教育委員会『中世の益田を歩いてみよう』2009年

島根県教育委員会『久城東遺跡・若葉台遺跡・久城西Ⅰ遺跡・久城西Ⅱ遺跡・原浜遺跡』2010年

瀬戸浩二・渡辺正巳「第4節「古益田湖」の諸相」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の研究』

島根県古代文化センター研究論集第15集 島根県古代文化センター、2015年。

本多博之「中近世移行期西日本地域の流通と海辺領主」『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』島根県古代文化センター、2018年。

島根県立石見美術館、『企画展石見の戦国武将—戦乱と交易の中世—』2017年

島根県教育委員会『海石西遺跡 角落し遺跡 廻り田遺跡 近世山陰道跡（馬橋地区） 神出西遺跡』2018年

第3章 蔵廻り遺跡の調査

第1節 位置と環境

蔵廻り遺跡は益田市西平原町の平野部に位置する。調査地は現国道9号と県道鎌手停車場線の交差するT字路から三隅益田道路本線へ進入するインター線の予定地内のうち、最も県道寄りの部分である。調査前は宅地と水田（休耕田）、畑であった。

遺跡東方には、比較的広い平野・緩斜面がある。居住、耕作に適した地形とみられることから、分布調査の段階で要注意箇所とした。平野部の南から東にかけて緩斜面が続き、丘陵部につながっているが、山裾近くまで開発が及び、山へ入り込んだ谷地形（「サコ」）ごとに棚田が作られている。試掘調査では18世紀の陶磁器が出土しており、開発は江戸時代後期にさかのぼると考えられた。平原川上流部には大規模な堤が築かれており、当地域の主要な水源である。

遺跡の北方は緩やかに上り傾斜して、土田町との境界をなす小さな分水嶺に至る。比高が高く平原川の影響を受けない安定した地形のため、駅、公民館、小学校、中学校、寺院等地域の中心となる諸施設が集中する。現鎌手中学校のグラウンドは、かつては「大堤」と呼ばれた池で、前述の平原川の堤とともに地域の主要な水源であった。

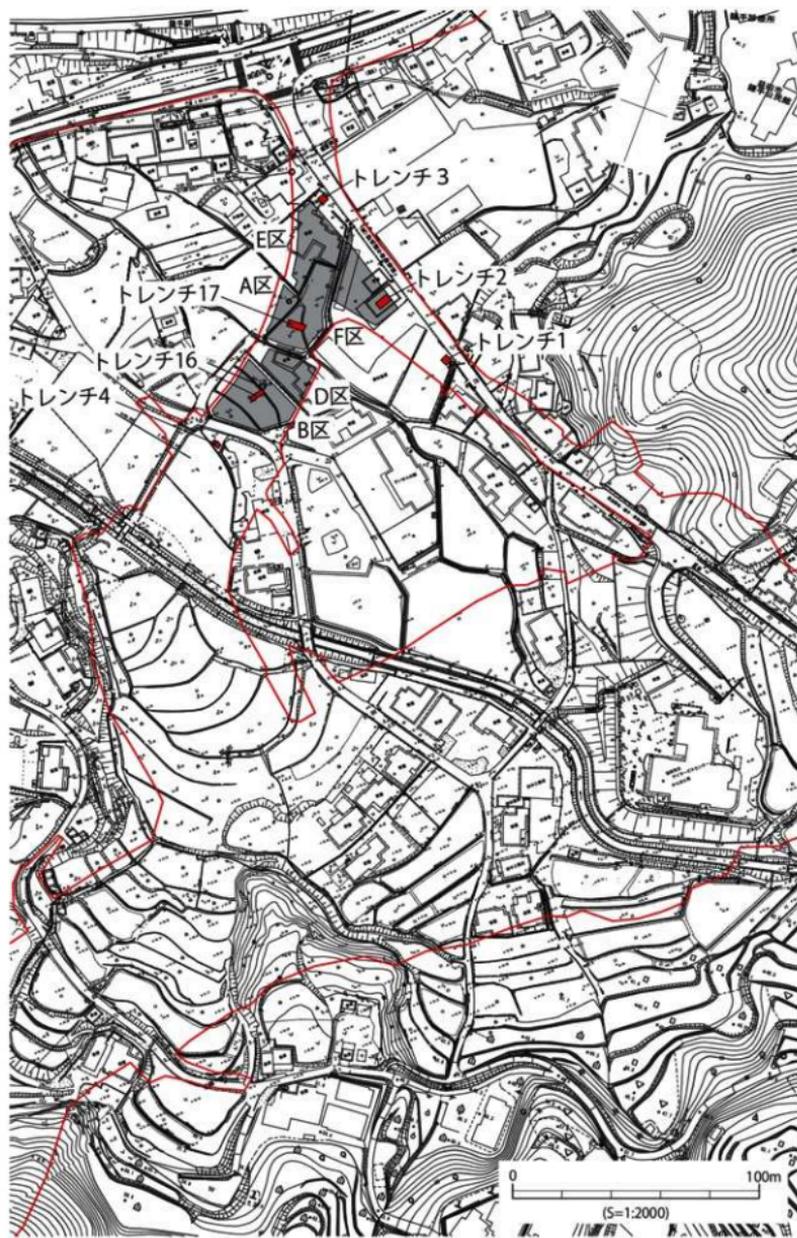
遺跡の西方は平原川沿いに谷が開け、水田地帯となっている。水源である「大堤」からは遠いため、水門を早朝に開けても、水が田に到達するのが午後3時ごろだったという¹⁸¹⁾。谷は日本海へ続いているが、海岸近くの地形は山がちとなり、谷は河口付近で幅を狭める。JR線が横断するため景観は分断されて見える。

当地域で人間の活動が確認されるのは縄文時代からである。鎌手公民館所蔵の考古資料の中には、縄文土器や、町内の、芝窯跡で採取された須恵器が含まれている¹⁸²⁾。

益田市東部から三隅町西部にかけて、中世は「納田郷」の範囲であり、益田・三隅両氏の係争地であった。源田山南部に築かれた碓石城はこの係争地域に位置し、岡見～土田間の地峡を見下ろす位置にある。同地峡が主要な交通路であったことをうかがわせる。源田山山塊の北部には源田山城があり、日本海を視野に入れている。益田市東部～浜田市西部の海浜部には、このほかにも城ヶ浦城（益田市津田町）等があり、海辺に位置する城館の密度が高い。当地では、大内氏や三隅氏から津々浦々の通行料を免除された大賀氏・三井氏の活動が知られており¹⁸³⁾、海上交通が活発であった。こうした城館の分布も、海上交通の活発さを反映していると考えられる。

江戸時代における当地域の主要な交通路は近世山陰道で、碓石城南麓の地峡から西進して土田町から内陸に入り、低平な丘陵地帯を通る直線コースで木部へ通じていた。鎌手はこの主要ルートからは外れているが、近世山陰道から枝分かれする道（現在の県道鎌手停車場線）や、国ヶ峠遺跡を通る峠道等で村外につながっていた。

鎌手が主要交通ルート上に位置するようになるのは、明治22年の国道開通と、大正期の鉄道開通以後である。輸送の便を得たことにより産業の発達が刺激された¹⁸⁴⁾。



第5図 蔵廻り道跡試掘トレンチ位置図 (S=1 / 2000)

中でも発達が顕著であった産業の一つが窯業で、町内には2軒の瓦窯が営まれた。古墳時代の須恵器窯と同じ丘陵が選ばれているのは、良好な粘土が得られるからであろう。西平原町内では、田中義昭氏の祖父が経営したJR線沿いに位置する窯、及び東方の丘陵部に位置する佐々木窯跡が知られ、後者は周知の遺跡として登録されている。蔵廻り遺跡でも窯道具が1点採集されており、瓦産業の繁栄がうかがわれる。鉄道、鎌手駅という、瓦の出荷に適した環境が整ったことで生産が刺激されたと考えられる⁽¹⁸⁹⁾。

瓦産業以外では、聞き取りで判明した範囲で、駅前には雑穀工場と製材工場があり、宿屋2軒、床屋、酒屋等の店舗、郵便局、劇場が建ち並んでいた。大正時代の新聞広告等からも、山羊乳、牛乳の生産等が知られ、諸産業の発達が刺激されたことがうかがわれる。鎌手駅には、荷物を扱うための日通の支店も併設されていた。

蔵廻り遺跡周辺では、北東の山裾に役場があり、町の中心部であった。調査区にあたる部分は雑穀工場や水田となっていた。この中には鎌手中学校所有の水田が含まれ、「中学時代にこの場所で田植えをした」という証言が複数人から得られている。工場や店舗が建ち並び、周囲に水田を交える現在の景観は、明治～大正期に形成されたものである⁽¹⁹⁰⁾。

第2節 発掘調査と整理作業の経過

【平成27年度試掘調査】

調査区は、第6図に示す鎌手インターチェンジ予定範囲の、鎌手市街側入口部分に当たる。平成27年度4月～6月に実施した試掘調査で、トレンチ17では地山面でビット群の一部を検出した。トレンチ16からは中世陶磁器を含む遺物が出土したことから、トレンチ16、17を中心とするインター線の範囲を本調査範囲とした。

調査区は、県道に沿う最北の調査区をE区とし、南へ向かって順にA区、D区、B区とした。E区に東接する部分はF区とした。調査区の境界は調査前の土地区画に従ったものである。市道の南方については、平成29年10月に試掘調査を行った結果、遺物が1点出土したのみで遺構は確認されなかった。市道以南は平原川の河道に近いので、湧水が多く環境が不安定となり、遺構・遺物の確認は望めないため調査範囲から除いた。B区は市道の北側で調査前は休耕田であった。D区は宅地跡であり、南は高さ1mの家屋基礎となる擁壁を経てB区に接する。D区の北に接するA区は耕作地跡であり、D区とA区の間は里道が走る。里道の下には上水道も埋設されている。この里道は北へのびて県道へ至っており、里道の西側をE区、東側をF区とした。

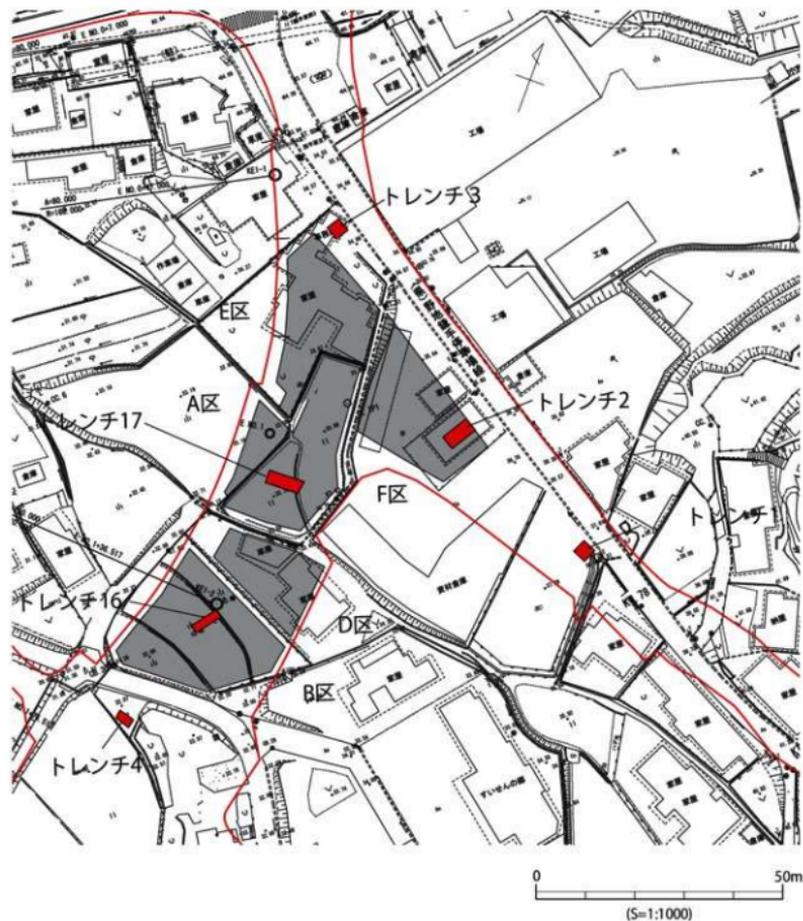
【平成29年度調査】

平成29年10月から12月にかけて、これらのうち地権者の移転が完了したA区、B区、D区の本調査を実施した。本調査の測量、図化は遺跡調査システム「遺構くん」を使用した。

B区では河道1条のほか、調査前までの水田の耕作に伴う溝状遺構等を検出した。遺物は戦国時代の輸入陶磁器、茶道具である風炉等が出土している。

D区は家屋跡地で、基礎工事に伴うかく乱、盛土が地山面まで及んでいた。

A区の調査は、当初基盤層となる明黄褐色粘質土の面まで20cm程度の掘り下げを予定していた。しかし、調査区北部を斜行するように大規模な変色部分が検出され、サブトレンチによる確認

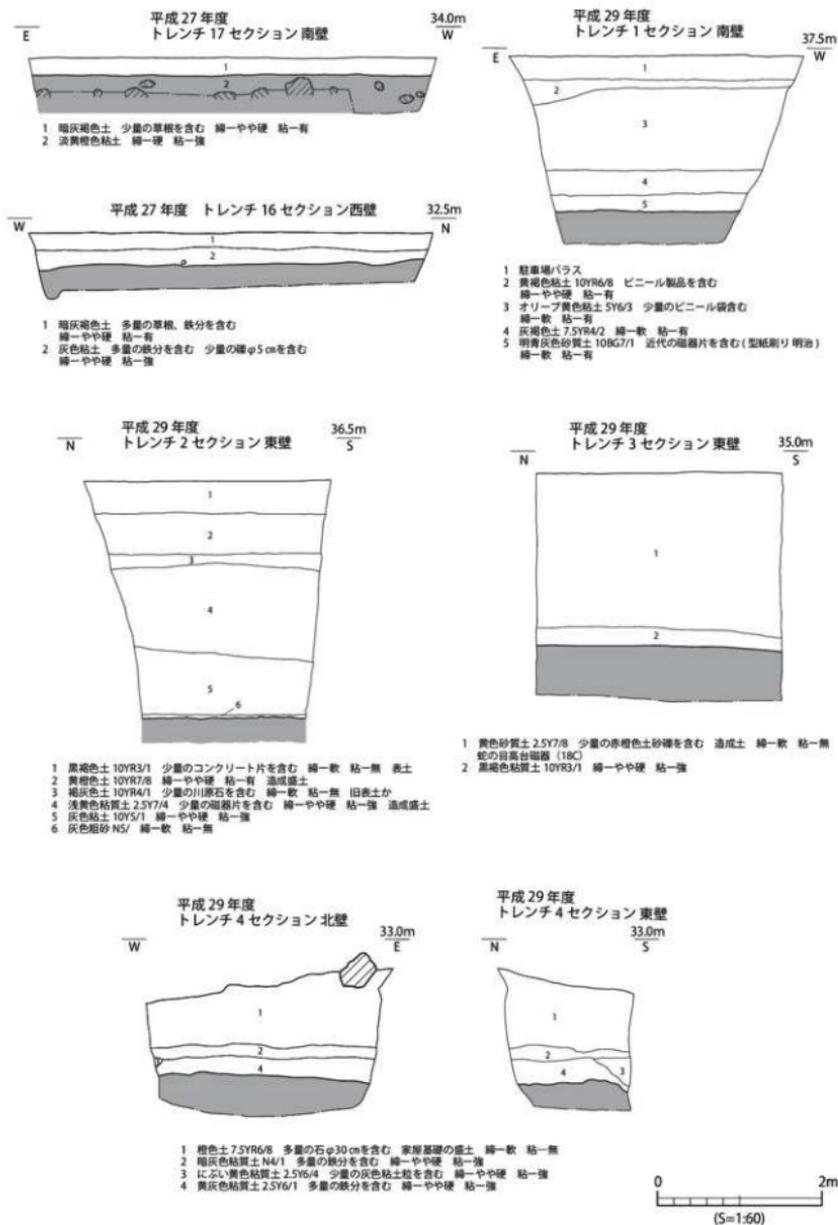


第6図 蔵廻り遺跡調査区配置図 (S=1/1000)

の結果、検出面から深さ約1.6mの大規模な帯状の落ち込みであることが判明した。ただし、平成29年度調査の時点で確認できたのは南辺の輪郭のみであったため、この落ち込みについて溝状の遺構であるか池状の遺構であるかすら確定できない状態であり、落ち込みの性格と規模の確定が平成30年度のE・F区調査の課題となった。

【平成30年度調査】

北側のE区、F区については、該当部分の家屋移転が平成29年度調査終了直後に完了し、平成30年2月に試掘調査(トレンチ1、2、3)を行って堆積状況を確認したうえで、平成30年5月からE区、F区の本調査を実施した。A区で確認できた落ち込みの走向から、延長線がE区、F区方面へ続いていることが予想され、遺構全体を一続きで調査するのが望ましかった。しかしながら、



第7図 蔵廻り遺跡試掘確認調査トレンチ土層実測図 (S=1/60)

里道下の水道管の移設手続きに長期間が必要で、調査開始までにこれを撤去・移設することが不可能であったため、両調査区の間水道管を残したままで、別の調査区として調査を行った。完備した落ち込みは、底面の傾斜が緩いこと等から自然河道と判断するに至った。

整理作業のうち、遺物の水洗、注記、接合を現地調査と並行して行った。遺物の実測、図化、写真撮影および遺構図面の整理、浄書は他の遺跡と併せ、平成30年度に行った。画像処理・図版作成・編集等には Adobe 社のソフトを使用した。

第3節 遺構の概要

蔵廻り遺跡で確認された遺構を第8図に示す。F区からE区にかけては、中世の河道跡が曲折しながら流れる(図中網掛け部分)。南岸のラインは北西→南西→北西へと屈折を繰り返している。E区、F区の境界で河道幅が最も狭くなり、下流に向かって再び広がる。戦国時代までは水が流れていたが、江戸時代初期に水流が止まり、埋没が始まった。埋没した後、河道跡は水田化が進み、水田に伴う石垣3～11や根太が列状に設置された。根太列の機能は、石垣の荷重を受けて沈下を防ぐもので、本来は石垣を伴っていたと考えられる。石垣は、河道跡を横切る方向で設置されるもの(石垣4、6、9等)や、岸の下端ラインに沿って設置されるもの(石垣5、根太列1、4等)がみられる。層位的には、江戸時代中期に投入された水田床土の上位にある遺構と下位の遺構に大別が可能である。E区で検出された石垣4、石垣5、根太列1、根太列3、根太列4、及びF区の石垣10は水田床土下位で検出されており、伴出する陶磁器から推定される年代は江戸時代初頭と推定される。F区の石垣6、石垣7、石垣8、根太列2は水田床土上層に構築されており、年代は江戸時代中期以降である。E区の北部でも石垣1・2が確認されており、北西へ向かって棚田状に下っていく。

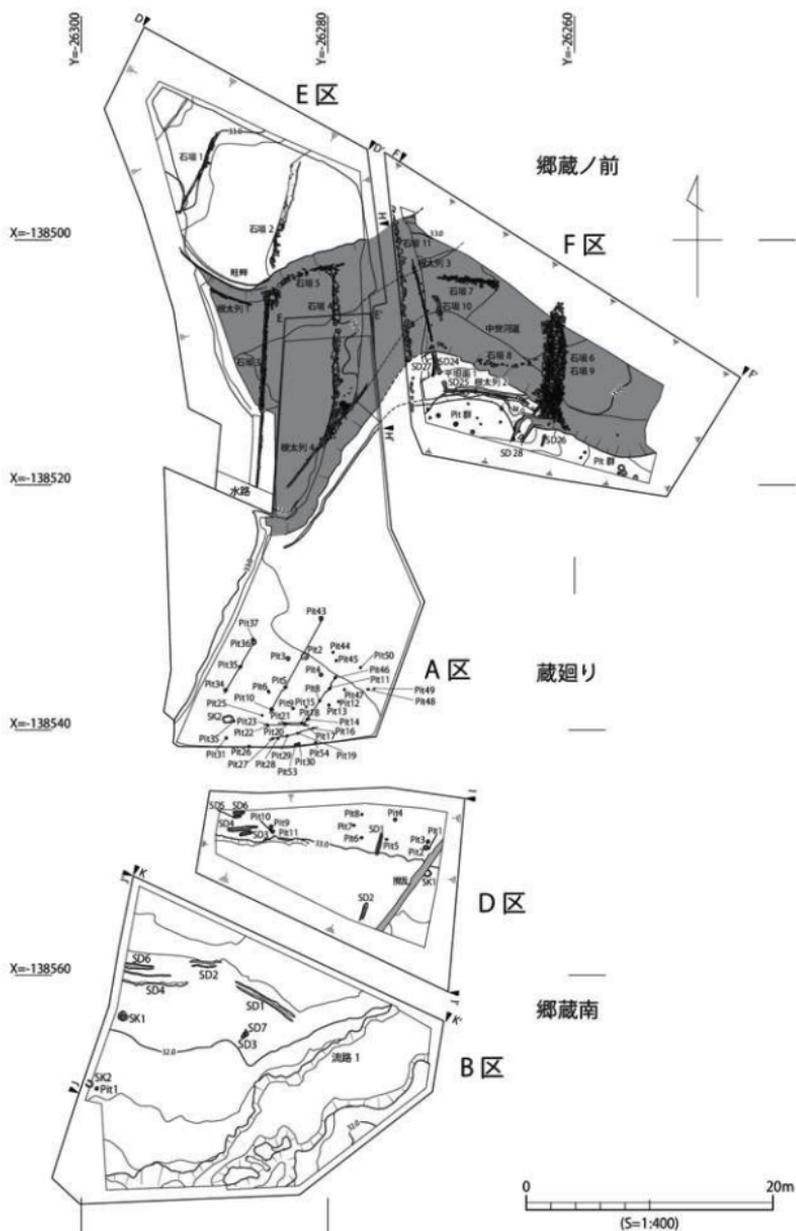
河道の南岸ではピット群や溝状遺構が検出された。一つはF区の河道跡南岸にまとも検出されている遺構群で、調査区の限られた範囲内であるが、ピット16穴、溝状遺構5条を確認している。A区南部にも遺構群がみられ、ピット約50穴、土坑1基を検出している。ピットの一部は列状に並ぶが、掘立柱建物を構成するものは確認できていない。ほとんどは時期不明だが、このうちPit25は12世紀、SK2は14世紀の遺物が出土している。ピット群の一部は中世に遡る可能性がある。A区とB区の中間では遺構が全く検出されない。この地点には東から丘陵が張り出していたという聞き取り結果があり、水田造成に伴う削平によって遺構が失われたと推定される。ピット群はD区北半エリアまで確認できるが、D区以南は平原川へ向かって下り傾斜が続き、ピット等は確認されなくなる。

最南部のB区では浅い溝状遺構が複数確認されているが、近代～現代の水田耕作に伴う溝とみられる。B区南辺を流れる浅い流路も検出された。平原川の一支流と考えられる。

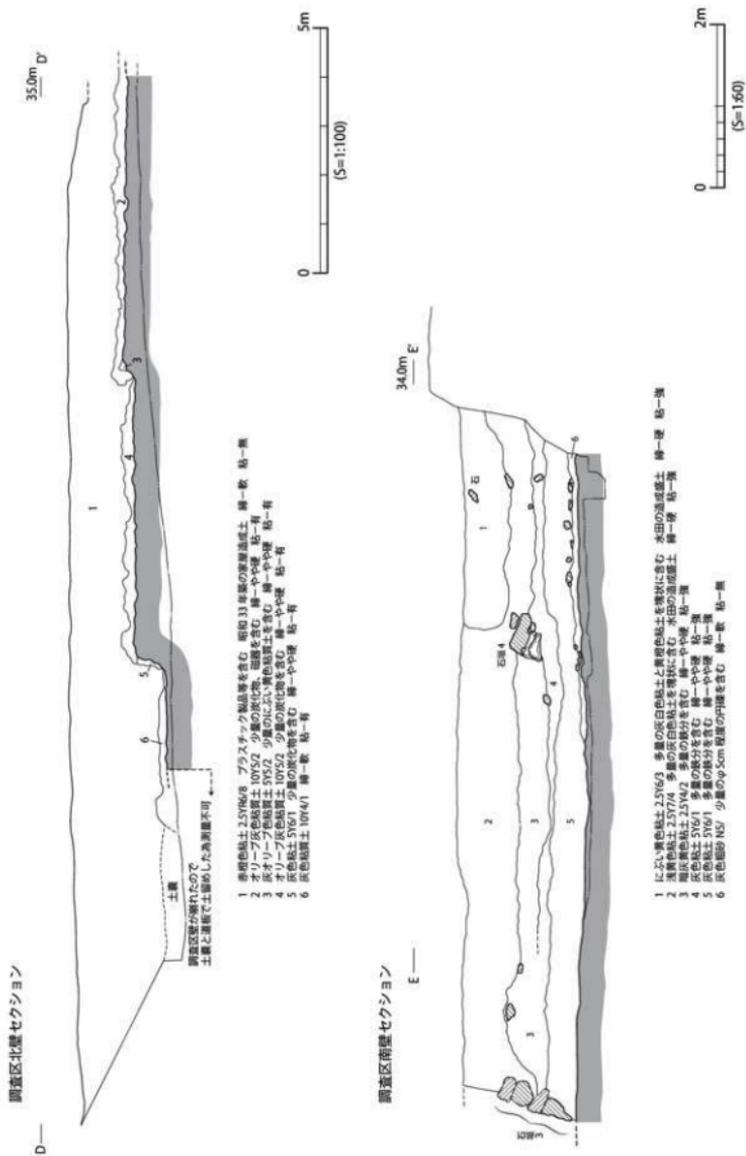
第4節 中世河道、A・E・F区の調査

(1) 基本土層

調査区の大部分を占めている河道跡は、F区、E区、A区を貫いて西へ流れる。最下層には砂礫が5～6cmの厚さで堆積しており、かつては一定量的水流があったことを示している。洪水で流されてきたと考えられる円礫も、特定の地点に偏って多数たまっていた。砂礫層の上は厚さ60cm



第8図 蔵廻り遺跡遺構配置・調査後地形測量図 (S=1/400)

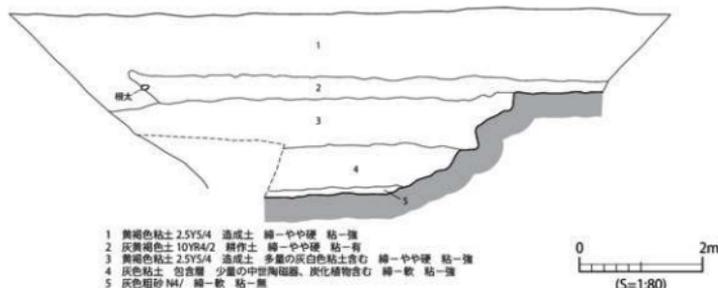


第9図 蔵廻り遺跡基本土層図 (1) (S=1/100)



第10図 威廻り遺跡基本土層図(2) (S=1/80・1/160)

G—

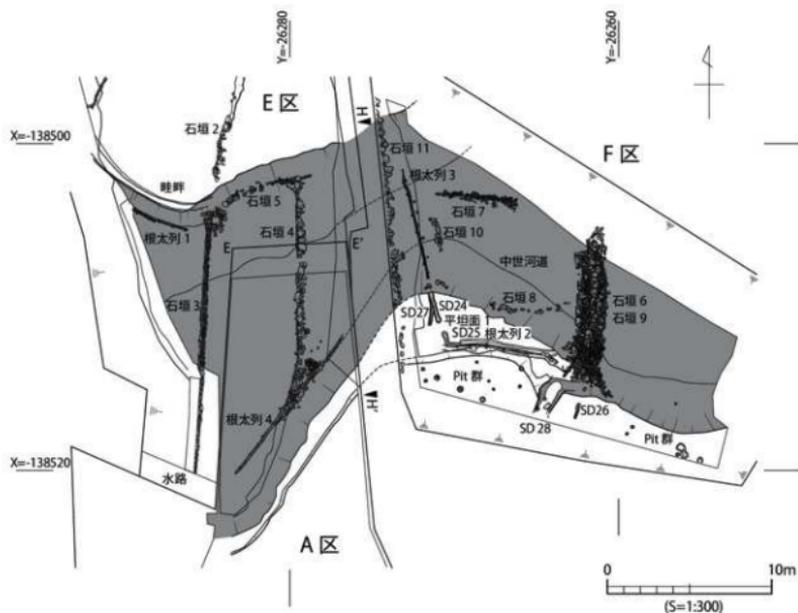


第11図 蔵廻り遺跡基本土層図(3) (S=1/80)

前後の灰色粘土層が堆積する。灰色粘土層の出土遺物は主に15～16世紀の輸入陶磁器、17世紀初頭の肥前系陶磁器である。水流が止まり、粘土の堆積が始まった時期を示すものである。この間、南岸側は複数回崩落を起こしており、もとは崩落を繰り返す不安定な地形だったと考えられる。河道の狭窄部付近では砂礫層の上に崩落土、灰色粘土の順に堆積し(第10図Hセクションライン)、A区中央部(第15図Bセクションライン)では崩落土、灰色粘土の順であった。崩落土と灰色粘土から出土した青磁皿(第30図7)が接合していることから、青磁を使用していた施設の廃絶後に灰色粘土の堆積が始まったと考えられる。

水流が止まり河道が埋没した後、河道跡の窪地は自然堆積や人為的な埋め立てによって、水田化が進められた。水田化に伴い、河岸の一部は拡幅のため切削され、崖状の地形となった。水田関連遺構のうち最も古いものは、灰色粘土層の上面に構築されている。灰色粘土層の上層には、厚さ60cmの水田床土が確認された。周囲の地山に由来する明黄褐色系統の土を多量に含んでおり、周辺の地山を削り出して河道跡の窪地を埋め立てていった過程を示す。盛土が行われた時期は、出土遺物から17世紀と推定される。

この時の床土は石垣9以西、石垣4以東の範囲内のみ分布しており(第10図Fセクションライン3層)、埋め立ては河道跡のうち限られた範囲に対して行われたものであった。この盛土の厚さは60cmであるが、遺構検出面ではまだ80cm以上の比高差があった。近代に入り、さらなる地形改変が行われる。E区側では、周囲の地山を削平して河道部を埋め立てし(第9図Eセクションライン1層)、河道部と周囲の比高差は解消され、全体が一続きの広い水田として使えるようになった。河道北岸側に位置するE区が水田化されたのはこのときの造成と同時期であろう。南岸側にあたるA区も一旦水田化されているが、その後畑地に転換したためほとんど水田床土が残らない。F区側の河道跡も、近代に入って90cm～1mの盛り土が行われ、結果的にE区～A区側よりも標高が高い土地が造成された。F区の南寄りでは造成土は上下に分かれ、間に灰黄褐色土をはさんでいることから、造成は2時期にわたり、造成→耕地化→造成という経過をたどったようである(第11図)。F区の北側では上記の灰黄褐色土は確認できない。平成29年度に行った試掘調査では造成土下位(第7図トレンチ2セクションにおける3層、第11図)より型紙刷装飾の磁器片が出土



第12図 蔵廻り遺跡中世河道跡遺構配置図 (S=1/300)

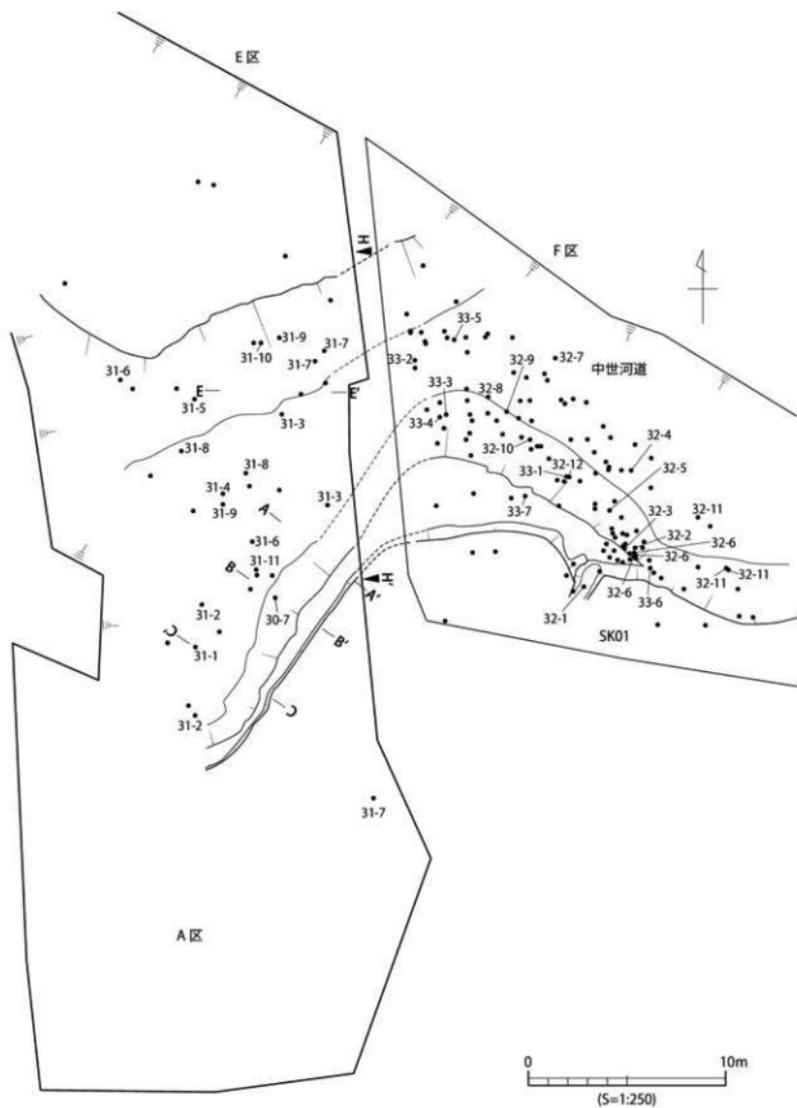
していることから、近代最初の埋め立て時期は19世紀第4半期以後と推定される。造成土上位からはガラス瓶を含む遺物が出土しており、さらに時期が下る可能性が高い。埋め立て後、F区側は工場用地に転換し、地元在住者からの聞き取りによれば戦前は雑穀工場が建っていた。E区からA区にかけての水田は、鎌手中学校所有の水田となった。中学時代に田植えに通ったという複数の聞き取りが得られている⁽¹⁸⁷⁾が、いずれも近代の盛り土の後にできた水田を指すと考えられる。

なお、石垣3以西の部分は江戸時代も、近代の造成の時も、いずれも埋め立てが行われず、窪地として残されていた。残された窪地を含め、E区側の広い部分が宅地に転換したのは昭和33年になってからである⁽¹⁸⁸⁾。このときの家屋造成に際し、窪地から水田部にかけて、1m～3mの厚さで広く赤褐色土を盛ってE区全体を嵩上げし、家屋の基礎部分の造成が行われた。

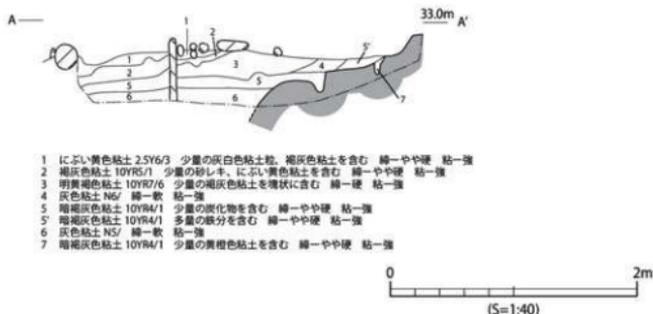
河道跡が現状のような平坦な地形となるまでに、大規模な地形改変を重ねてきた過程を解明する調査となった。

(2) 中世河道 (第13～16図)

県道に近いA区北半からE区、F区にかけて大規模な河道跡を検出した。河道は東から西へ流れ、E区・F区の境界付近で川幅が狭くなって南へ、さらに西へ蛇行しながら川幅を広げる。なお、A区ピット群(第8図)の西側では河道は検出されていない。南へ流れた後、さらに急角度で西へ折れるとみられる。狭窄部での川幅は16mを測る。E区の北岸は近代水田の面から急崖状におちこんでおり、人為的に掘り下げられたように見える。急崖の直下には根太列2や石垣5が河道の



第13図 蔵廻り遺跡中世河道跡遺物出土位置図 (S=1/250)



第14図 蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション図(1) (S=1/40)

ラインに沿う方向に設置されている。石垣の間から出土した近世陶磁器の年代から、これらの根太・石垣は江戸時代初期に設置されたものであろう。河道跡を開発、水田化する際にこれらの石垣や根太が設置され、同時に平坦部の面積を広げるため川岸の一部を切削したため崖状になったと考えられる。

石垣5から河道中心部にかけては緩傾斜で下っており、この部分の傾斜は河道底の本来の形状を残していると思われる。川底の中心部約4mはほぼ水平であり、水平部分を中心に径5cm内外の礫が堆積していた。これらは洪水で運ばれ、堆積したものとみられる。

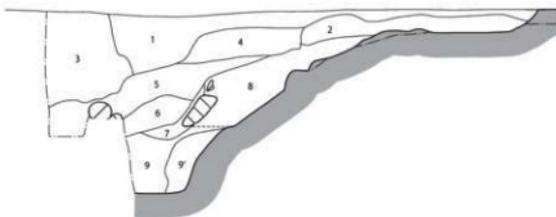
一方南岸の形状は段掘りとなっている。地山面から約20cmの低い段差を経て面が1枚あり(便宜上「平坦面1」とする。第23図)、川の流向に沿うように帯状にのびる。段差に沿って水田に伴う根太が設置されていることから、この面は水田化に際して河岸を切削し、拡幅したことによって生じた地形であり、川の原地形ではないと考えられる。この面の内側から北へ向かって下る傾斜面が本来の川底であろう。

川底には砂礫層が5～6cmの厚さで堆積しており、砂礫層の上は灰色粘土が60cm程度堆積する。この堆積状況から、ある時期まで河道には水が流れていたが、水流が止まって粘土が堆積し、低湿地化していったと推定される。地山面、および灰色粘土下層からは戦国時代の輸入陶磁器が出土している(第31図3など)ことから、戦国時代には水流が止まって河道跡の埋没が始まっていたと考えられる。埋没の開始から間もない江戸時代初期には、根太や石垣を設置して水田化が始まり、それに伴い川岸の一部は切削されて崖状の形態になったと思われる。

(3) 石垣4 (第16・17図)・根太列4 (第19図)

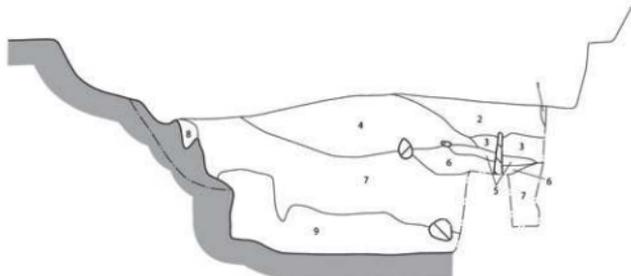
石垣4は河道を横断して南北正方位に構築された石垣である。北岸に対しては直交、南岸に対しては斜行する。径30～50cmの石を二段積みし、間に10cm以下の石を充填して、高さ50cmの石垣を構築している。石垣基底部のレベルは32.5mで川底から40cmの高さがあり、この間に灰色粘土が堆積している。水流が止まって灰色粘土が堆積した後水田化と石垣の構築が始まった過程を示している。石垣4の検出は北のE区側から南のA区側に跨っており、全長約11mを測る。南岸との交差部で石垣は二股になり、真北へ延びるもの(石垣4)と、河道ラインに沿って北東へ延びるもの(石垣4'とする)に分岐する。分岐点付近の石は、径20～40cmの石が並ぶ部分と、

B— 34.0m B'

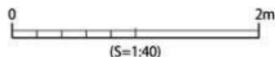


- 1 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 少量のマンガング粒、多量の鉄分を含み、表面酸化して黄褐色となる 締一やや硬 粘一有
- 2 黄灰色粘質土 2.5Y5/1 多量のマンガング粒を含む 締一やや硬 粘一有
- 3 明黄褐色粘質土 2.5Y6/8 多量の灰白色粘土、褐色粘土をアロク状に含む 締一硬 粘一強 造成盛り土
- 4 明黄褐色粘質土 10YR6/8 多量の黄灰色粘土を含む 締一硬 粘一強
- 5 灰色粘土 5Y5/1 少量の明黄褐色粘質土を含む 締一やや硬 粘一強
- 6 浅黄色粘土 5Y7/4 多量の明黄褐色粘土、灰色粘土を含む 締一やや硬 粘一強
- 7 黄灰色粘土 5B5/1 少量の石を含む 締一軟 粘一強
- 8 褐色粘土 10YR5/1 少量の青磁、明黄褐色粘土を粒状に含む 締一やや硬 粘一強
- 9 灰色粘土 N5/ 少量の陶磁器を含む 締一やや硬 粘一強
- 9' 灰色粘土 N5/ 少量の明黄褐色粘質土、砕レシを含む 締一やや硬 粘一強

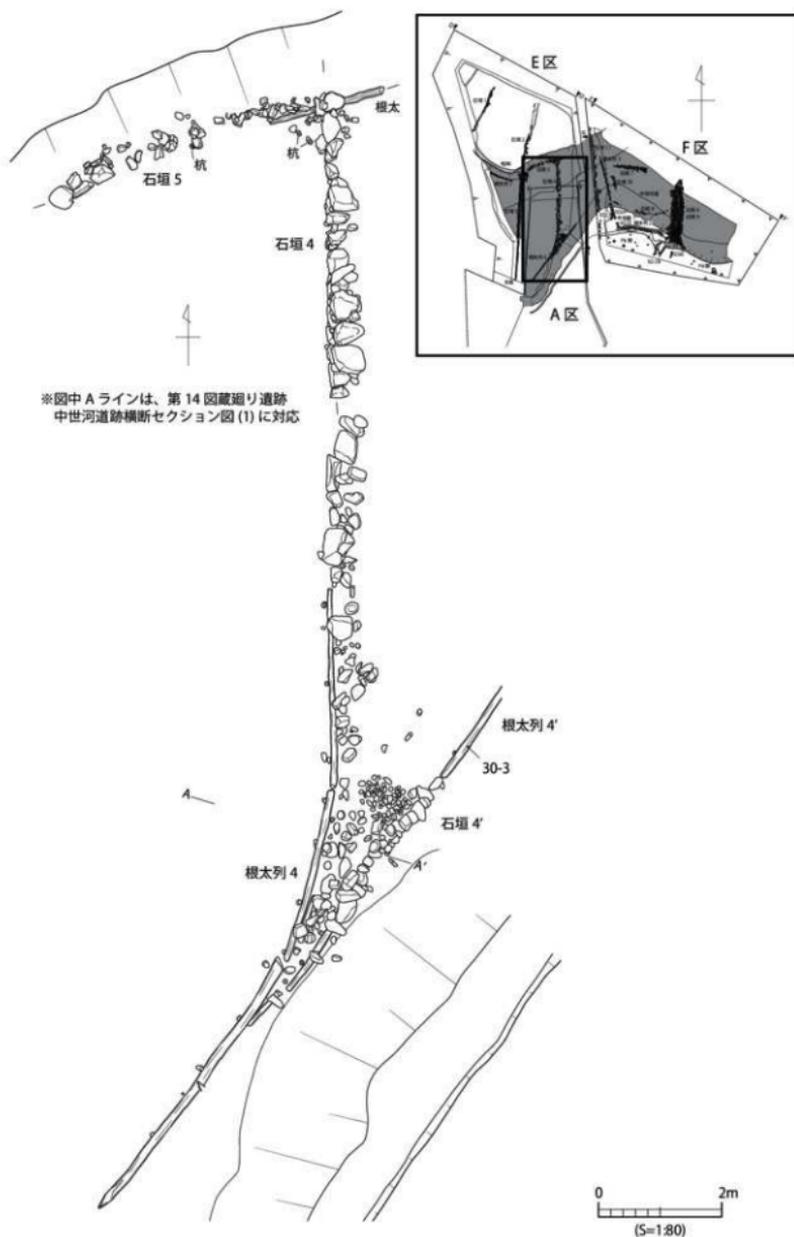
C— 34.0m C'



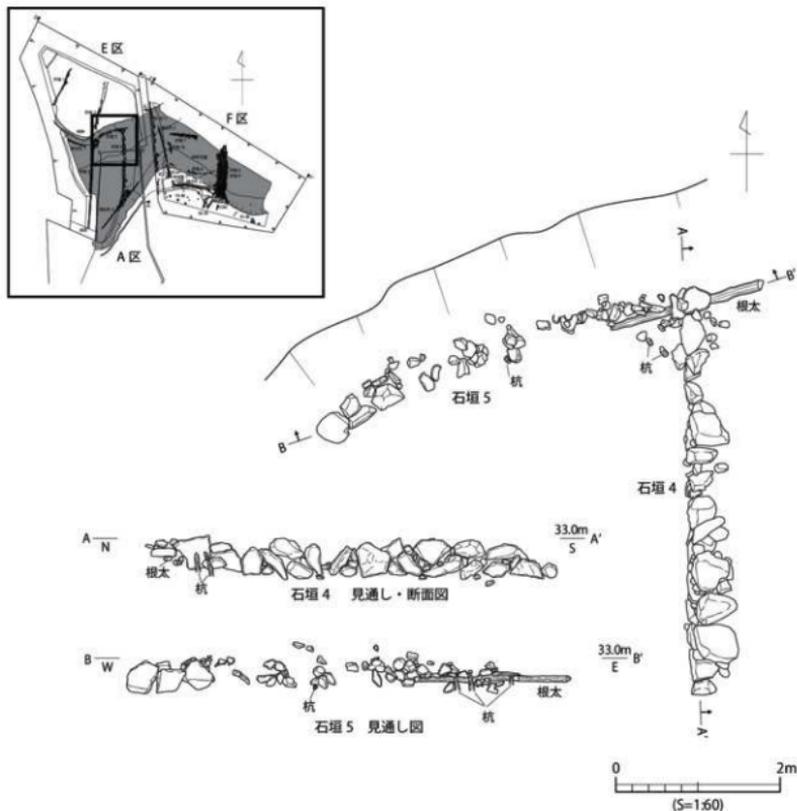
- 1 褐色粘質土 10YR4/1 少量の鉄分を含む 締一やや硬 粘一強
- 2 黄灰色粘土 2.5Y6/1 多量の黄褐色粘土を含む 締一やや硬 粘一強 造成土直下
- 3 暗黄灰色粘土 2.5Y4/1 少量の鉄分を含む 締一やや硬 粘一強
- 4 黄灰色粘土 2.5Y6/1 少量のマンガング粒を含む 締一やや硬 粘一強
- 5 浅黄色粘土 2.5Y7/4 少量の灰色粘土を含む 締一やや硬 粘一強 丸太設置直前の埋め土
- 6 灰色粘土 N5/ 締一やや硬 粘一強
- 7 褐色粘土 10YR4/1 少量の黄褐色粘土、鉄分を含む 締一やや硬 粘一強 少量の中世陶磁器を含む
- 8 褐色粘土 10YR4/1 多量の黄褐色粘土を含む 締一やや硬 粘一強 地山の崩落土を含むか
- 9 浅黄色粘土 2.5Y7/3 少量の褐色粘土を含む 締一やや硬 粘一強



第15図 蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション図(2) (S=1/40)



第 16 図 蔵廻り遺跡石垣 4 平面図 (S=1 / 80)



第17図 蔵廻り遺跡石垣4・5実測図 (S=1/60)

径5cm程度の円礫を敷き詰めた部分とが認められ、前者は石垣の残存部、後者はあぜ道または水口等の機能を有する構築物であった可能性がある。

石垣に沿って根太が設置されており、石垣4に沿うものを根太列4、石垣4'に沿うものを根太列4'とする。根太列4の裏込め土(第14図Aセクションライン1、2層)が根太列4'の裏込め土(同3層)を切っていることから、根太列4'が古く、根太列4が新しい。従って、根太列4'から根太列4への作り替えがあったと推定される。

根太列4の根太は、河道南岸に沿った方向に並べられるが、徐々に向きを北に変え、石垣4と同じくほぼ真北へのびる。使われている木材は、中央のもので径10cm、長さ3.2m、西端のもので径20cm、長さ5mを測る。これらの根太を3本水平に並べ、下流側に60~80cm間隔で杭を打ち込み固定する。西端の大型材の北端近くから、わずかに方向を異にして小型の根太が2本並べられているのが確認でき、ここからもう一列の根太列4'が分岐する。途中セクションラインA

付近の石列を含みながら、河道の南岸ラインに沿って北東方向へのび、調査区内の6.2m分が確認でき、その先は調査区外へのびる。

これらの根太列の設置に先立って投入された黄褐色系統の盛り土（水田床土）から、近世陶磁器が出土している。石垣4'周辺からは呉器手の碗（第30図3）など18世紀初頭の遺物が出土しており、石垣4および4'の構築年代は18世紀初頭と推定される。

(4) 石垣5（第17図）

石垣5は、石垣4の北端に接して、川岸に沿うように構築された石垣である。石垣4に比較して遺存状況は不良であるが、石が検出される範囲は長さ4.7mにわたっており、東寄りには長さ2m、径10cmの根太が設置されていた。石の重みを支え、沈下を防ぐための根太と考えられる。

(5) 根太列1（第18図）

石垣5の北方で河道幅は拡がり、北岸のラインは南西方向から北西方向へ折れる。石垣5・根太列4と同様、この位置でも、切削されて崖状となった河岸の裾部に根太が設置されていた。径10cm、長さ2mを測る根太が南北に連なって2本設置され、根太の両側に径5cmの細い杭を打ち込んで固定している。根太から約1m南の川底から17世紀初頭の陶器皿（第31図6）が出土していることから、この根太が設置されたのは江戸時代初頭と考えられる。石垣4、石垣5、根太列1はいずれも江戸時代前期に河道跡を水田化する過程で構築され、それに伴い河道北岸の一部が切削されて現在みるような崖状になったと考えられる。

(6) 石垣10・根太列3（第20図）

F区の西端では根太列3を確認した。根太列3は河道跡に直交する方向に丸太を渡して設置され、下流側に杭を立てて固定される。使用されている材は長さ2.3～2.4m、径12cm程度で、部分的に湾曲しているが、枝の基部がそのままになっており、加工が少ない。

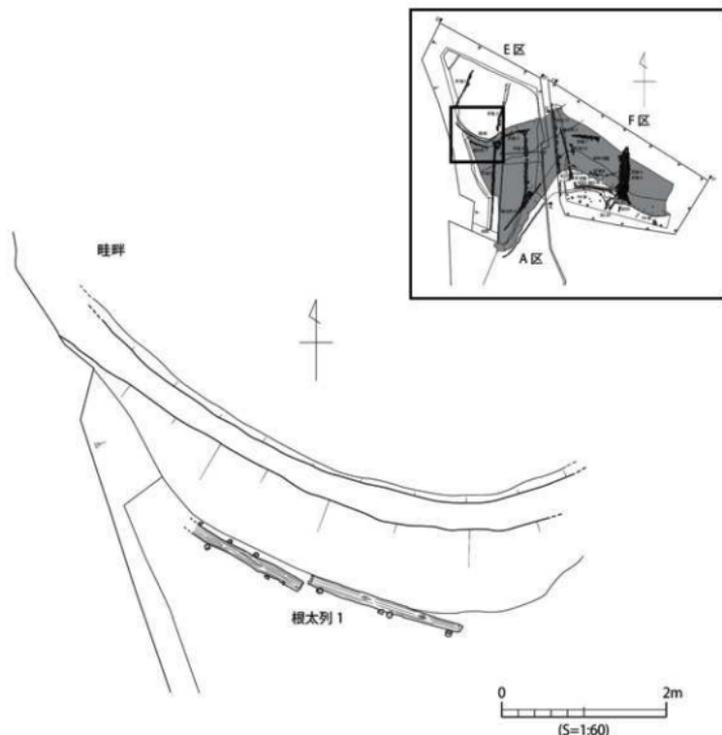
根太列は標高33.1～33.2mで川底から60～70cmの高さがあり、この間に灰色粘土が堆積する。水流が止まって灰色粘土が堆積した後に根太が設置され、水田化が始まった過程を示している。杭は径10cm程度の材、径約6cmの材が交互に使われていた。根太列の上流側からは16世紀の備前焼（第33図4）等が出土しており、設置時期は戦国時代から江戸時代初頭にさかのぼる可能性がある。

根太列3に沿うように別の石の並びがみられたため、これを石垣10とした。30cm～50cmの比較的大きな石を並べている。検出時は長さ2.2m程度のみであったが、水田に伴う石垣の一部が残存したと思われる。軸方向は根太列3とおおむね合致することから、両者に何らかの関係があったと推測される。標高は根太列3より50cm低く、川底に近いことから、石垣10の構築年代は根太列3に先行すると思われる。

(7) 石垣7（第21図）

調査区北西部で検出された石列である。径5～10cmと比較的小さな石を2～3段積んだ石が4.6mにわたって列状に並んでいた。検出された標高は33.5～33.7mで、水田床土の上位に位置する。水田の石垣の一部が残存した可能性が想定されるが、ほかの石垣に使用されているより小さい点が疑問であり、あぜ道、水口等他の機能を持った施設である可能性が残る。同様に、A区の石垣4南端部でも、小さな円礫を敷き詰めた箇所を確認している。

石列7と直交する方向にも、本来石垣7と同様に石が並んでいたと思われる石の集中部がみら



第18図 蔵廻り遺跡根太列1実測図 (S=1/60)

れるが、原位置から動いているとみられ、列をなしていない。使用されている石は石列7と同じ小さめの円礫である。

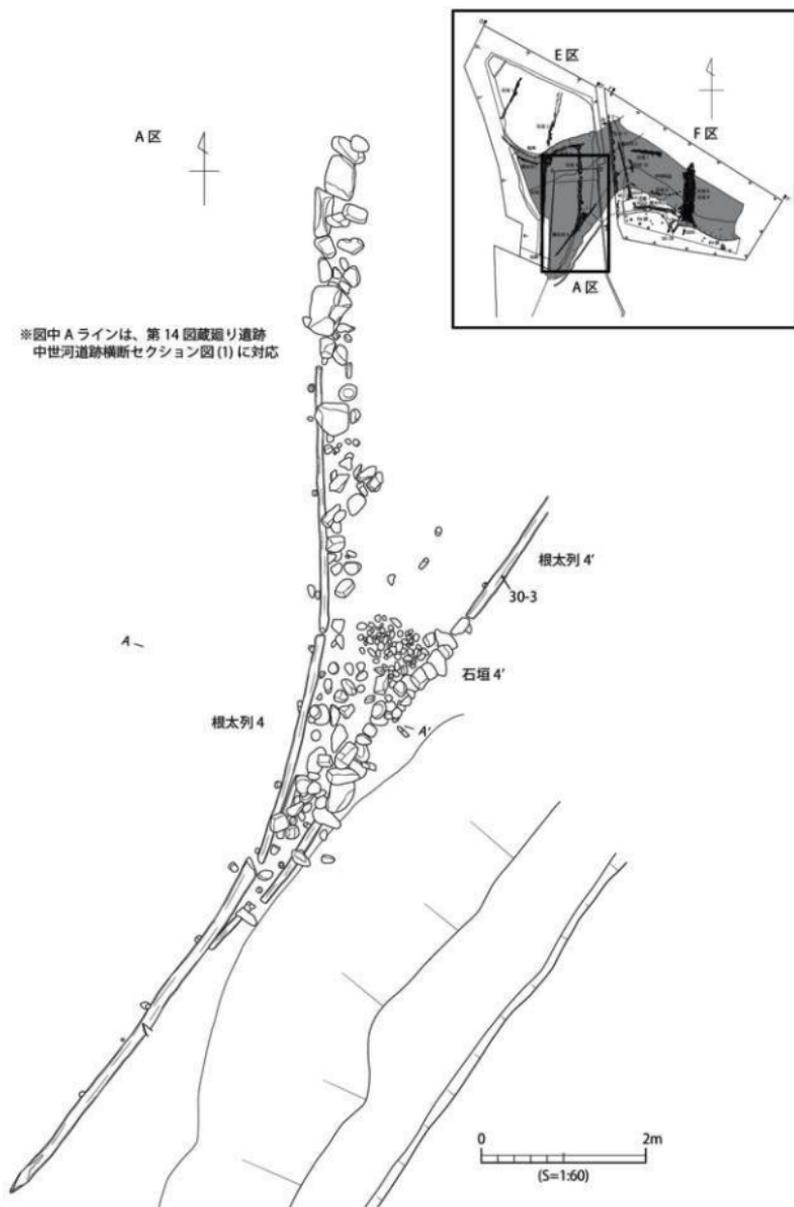
(8) 石垣8 (第20図)

河道南岸の川底近くで検出した石列である。明瞭な並びが4.8mにわたって確認できるが、途中が歯抜けとなった箇所が多い。径30cm～50cm程度の大きめの石と径10cm程度の円礫が混じる。石垣の一部が残存したものと思われる。軸方向は石列7とほぼ並行する。石の間から出土した陶磁器には漳州窯の青花磁器 (第32図12、15～16世紀) と17世紀初頭に属する黒唐津 (第33図1) が含まれており、石列8の構築年代は江戸時代初期と推定される。

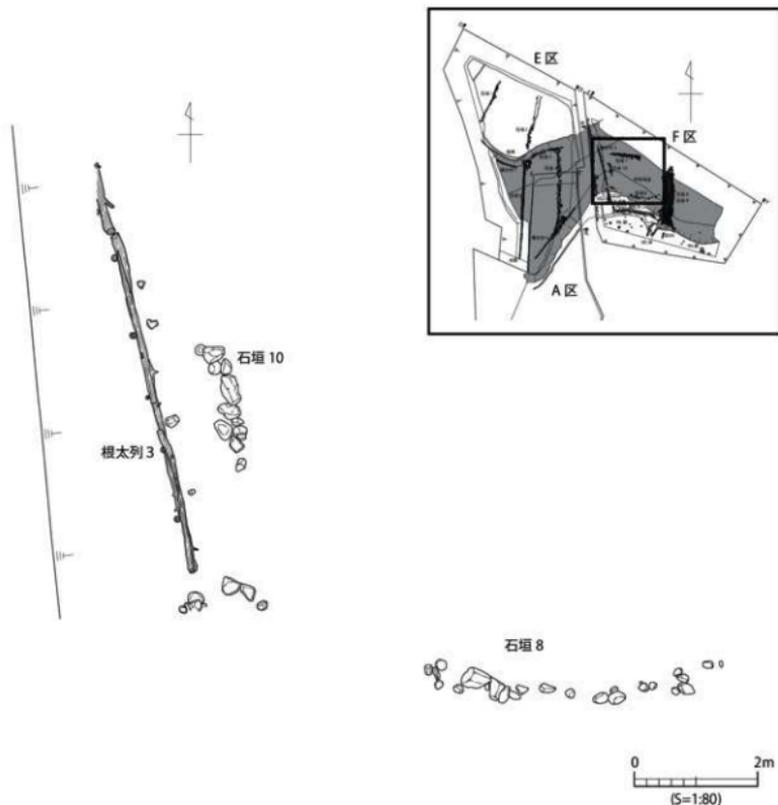
(9) 石垣9・6 (第22図)

上述したように河道南岸は段掘り状となっており、段差の下段に当たる東西方向に細長い帯状の面を平坦面1とする。石垣9、6はF区中央を南北に横断する大規模な石列であり、下層部を石垣9、上層部を石垣6とする。

軸方向は南北正方位で、河道に対してやや斜行する。石垣9は河道底から約50cmの高さに構



第19図 蔵廻り遺跡石垣4・根太列4平面図 (S=1/60)

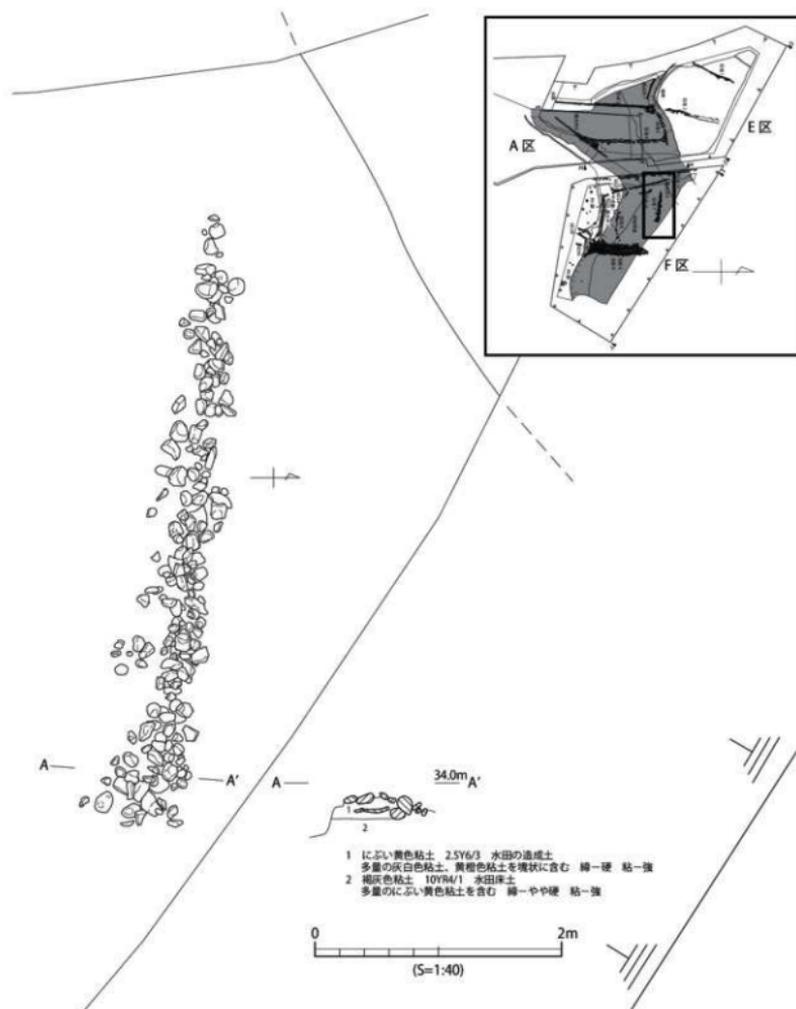


第20図 蔵廻り遺跡石垣8・10・根太列3平面図 (S=1/80)

築されている。南端は河道南岸のラインに接する。北端は調査区外となるため、厳密な全長は不明であるが、現存部分で長8.7m、幅1.5～2.1mを測る。芯部には主として径10cm～15cmの円礫を充填し、上流側と下流側の長辺を径40～50cmの大型の石で固める。

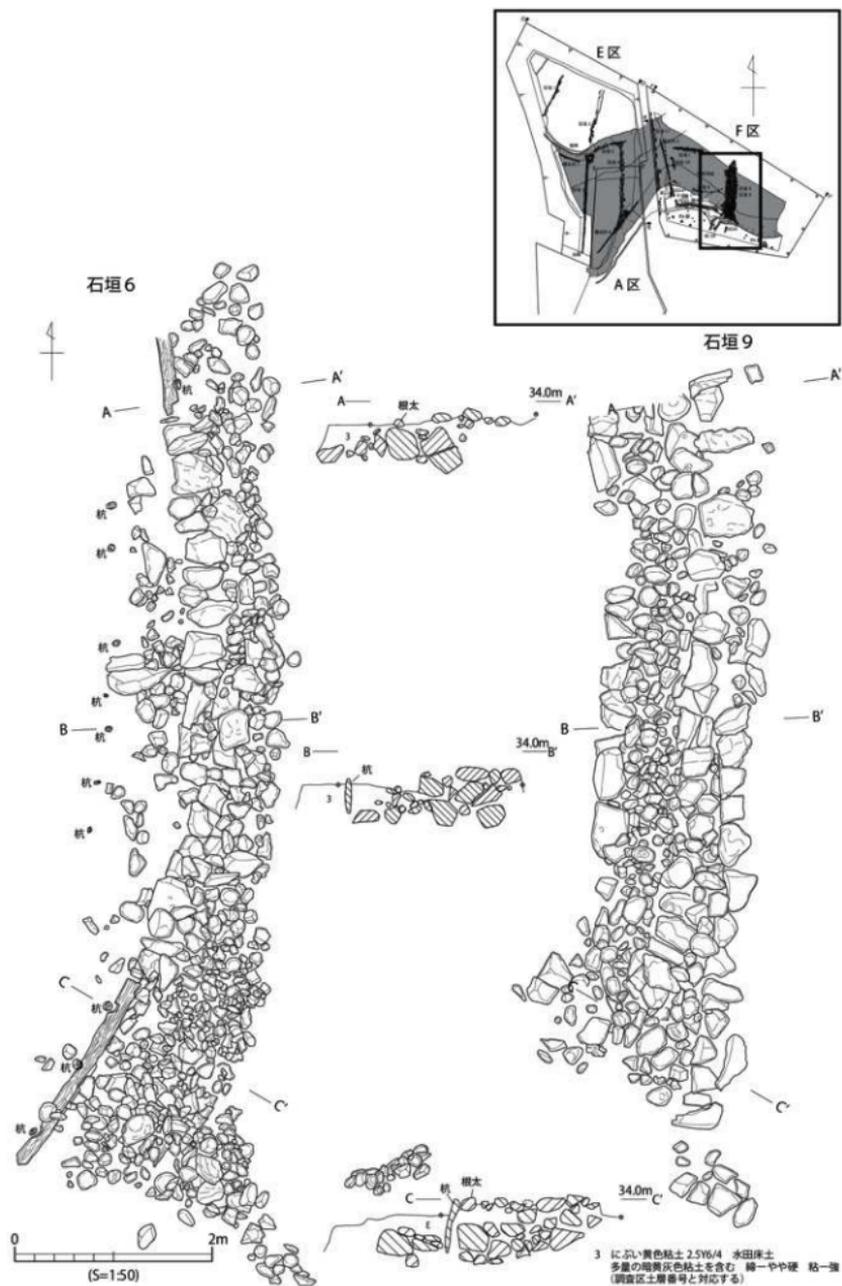
石垣9と6は実質的に一連の石積み遺構であるが、石垣9の上層に設置された根太が河道南岸のラインを越えて平坦面1上面まで突出していた。石垣6は上記の根太、平坦面1の上層に構築されていたことから、ある時期に河道南岸を切削して平坦面1を造成し、同時に石垣の積み増し、根太の設置等の工事を行ったとみられる。石垣9は河道拡幅・積み増し以前からの石垣であり、石垣6は拡幅・積み増し後の石垣ということになる。

石垣6の正確な長さは、北端が調査区外のため不明であるが、調査区にかかる部分で9.6mを測る。上流側は径10cm強の円礫が中心で、下流側は径40cm程度の比較的大きな石で固める。幅

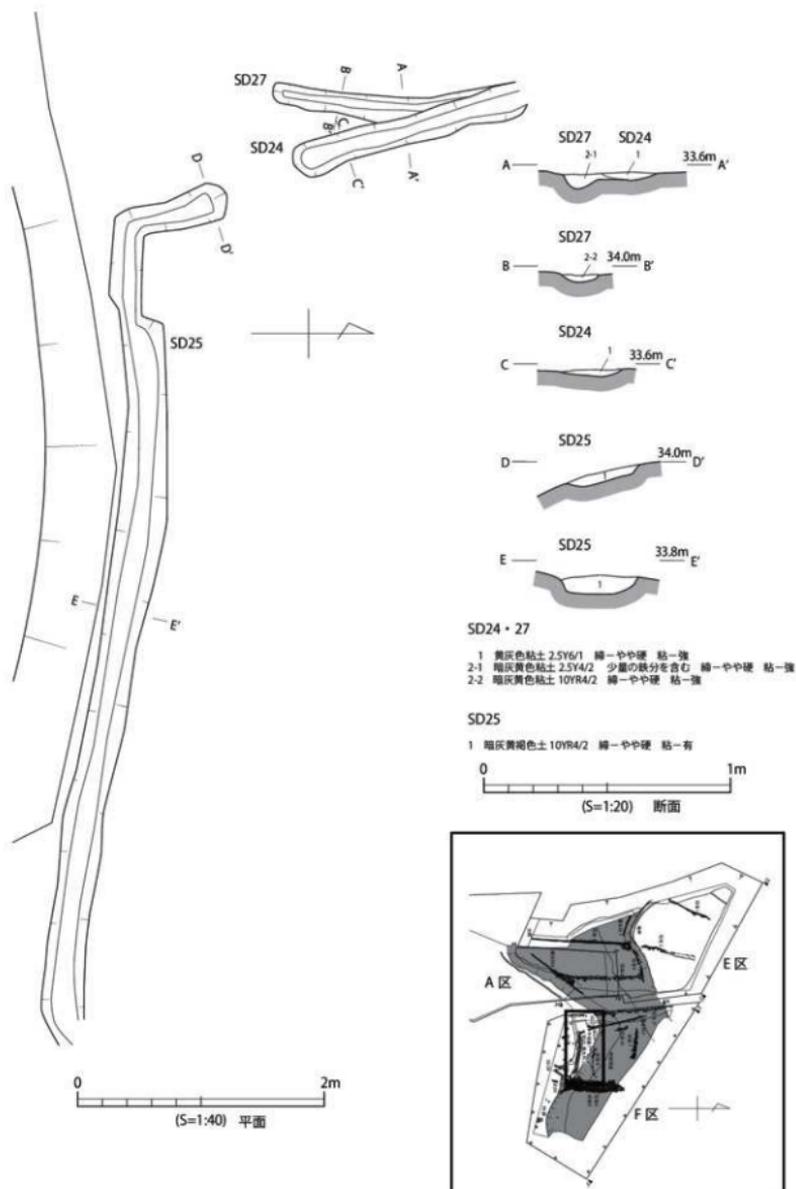


第21図 蔵廻り遺跡石垣7実測図 (S=1/40)

は、下流側長辺で石の配置が不規則となっているが、約50cm間隔で打ち込まれた杭列が下流側を画するものとみられるので、中央部での幅1.9mを測る。河道南岸付近では急速に幅が広がって約3.2mとなり、合わせて下流側に長2.1mの根太の設置、径10cmの杭による固定が行われている。石垣6の石の間からは18世紀の磁器（第32図2～4）が出土しており、構築年代は第32図4に合わせ18世紀第4四半期と推定される。



第22図 蔵廻り遺跡石垣9・6実測図 (S=1/50)



第23図 蔵廻り遺跡平坦面1上面の遺構 (S=1/40・1/20)

(10) 平坦面1上面の遺構(第23図)

平坦面1はF区SD28から下流方向へ帯状にのびており、長さ8m、幅は下流側の広い箇所まで4mを測る。A区でも河道南岸は段掘り状となっているが、その平坦部分がF区の平坦面1に連続する面であるかは確認できなかった。標高は33.3m～33.4mとほぼ水平である。河道南岸を切削して造成された面と考えられる。造成の目的は水田の拡幅と考えられる。

(11) 根太列2、SD24・25・27(第24図)

平坦面1の南辺に沿って根太列2が設置されていた。使用されている材は、大きいもので長さ3.2m、径16cmを測る。根太列2を取り上げると、直下の面からSD25が検出された。幅30cm、深さ6cmを測る。東西方向に7mのび、西端は北へ折れ、その先はSD24へつながる可能性が高い。SD24は現存長2m、幅22cm、深さ4cmを測る。SD27は現存長1.3m、幅20cm、深さ6cmを測る。SD24がSD27を切っていることから、SD24が新しい。拡幅された平坦面1、根太列2の輪郭に沿っていること、またSD24の軸方向と根太列3の軸方向が合致することから、江戸時代の水田に伴う遺構と考えられる。

(12) 石垣1・2(第25図)

河道北岸側の水田面の造成に伴い構築された、近代の石垣である。石垣2は現存長4.1mを測る。石垣の東半分は重機掘削時の不注意のため約5m間の石を飛ばしており、この部分を含めた推定全長は9.1mとなる。主に40cm～50cmの比較的大きめの石を1段積み上げ、間に10～20cmの礫を挿入し、固定する。石垣3の北延長線に続けるように構築されており、石垣3と一連のものとして構築された可能性が高い。

石垣1は石垣2の西8mに位置し、軸方向は石垣2にほぼ平行である。南端は調査区外にのびるため正確な全長は不明であるが、最も残存状況の良い基底部で長7.5mを測る。主に使われているのは径15～30cm前後の石で、4段積み上げて高さ40cmの石垣を構築している。石垣1、石垣2に挟まれた田面1枚分の規模は約8m×10mとなる。

各石垣に対応する水田面の段差はE区北壁セクション(第9図Dセクションライン)に明瞭に示されており、石垣2に対応する段差は比高20cm、石垣1は比高40cmと比較的高い。

(13) 石垣3・11(第25図)

石垣3は、河道に斜行するように南北方向に構築された石垣である。主として径40～50cmの大きめの石を4段積み上げ、壁面の高さ1m、全長15.2mを測る。

石垣3を境に土の堆積状況は大きく変わる。河道を埋めている水田床土(第10図Fセクションライン3層)は、出土遺物から江戸時代に投入されたものと考えられ、地山由来の明黄褐色土を多量に含む。付近の地山を切削して得られた土を盛り土として用い、河道を埋めていった状況をよく示している。この床土は石垣3以東、石垣6までの範囲に投入されており、拡大された水田の基盤を形成しているが、石垣3以西の河道部にはこの床土は投入されておらず、東側に比べてくぼんだ状態のままであったと考えられる。

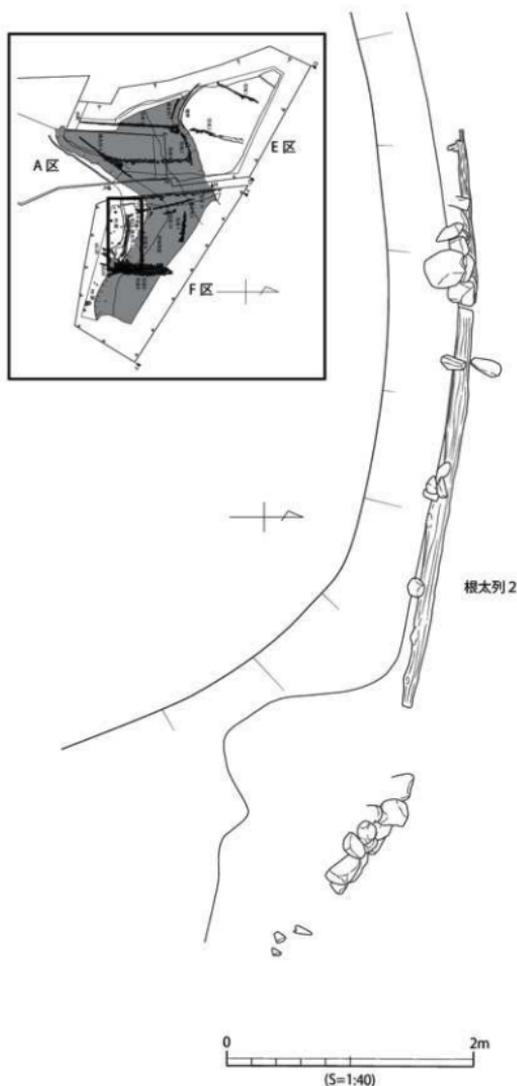
上記の床土を盛った段階でも、旧河道跡は周囲に比べて少なくとも60cm程度低くなっており、近代に入って段差を解消するためさらに埋め立てが行われた。この時の埋め立てに際して、石垣3以東には明黄褐色土系統の土が多量に投入され、削平された北岸、南岸とはじめてレベルがそろった。しかし石垣3以西には水田化のための盛り土が行われた形跡がなく、窪地状のまま残されて

いた。この部分が最終的に周辺と同じレベルまで嵩上げされたのは、昭和33年の家屋建築に伴う造成の時点である。

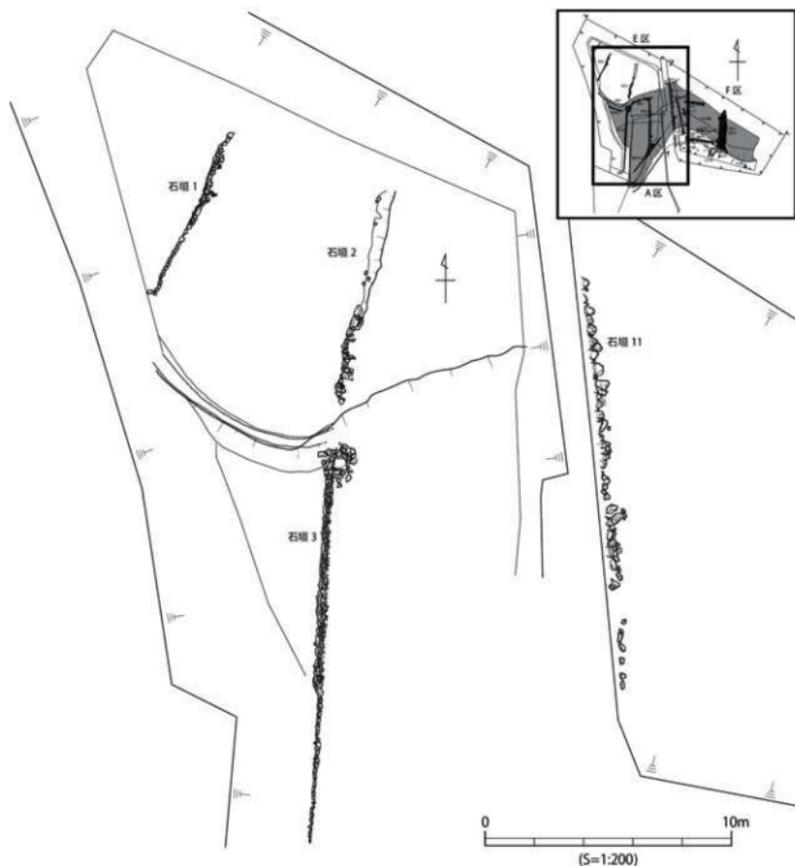
石垣11は土地境界にもなっているF区とE区の境界線上に構築されている。径40～50cmの大きめの石を用いる。基本土層の項でも触れたように、F区側とE区側で土地利用の形態が異なるようになるのは明治期以後である。F区側はE区以上に高く盛土が行われ、工場用地に転換する。この時点で構築された石垣と考えられる。

(14) F区ピット群・溝状遺構(第26図)

F区の中で地山面が残っていたのは調査区南辺沿いの東西20m×南北2～2.5mの細長い範囲に限定される。この範囲内でピット16穴、溝状遺構2条を確認した。ピットは径10～20cm、深さ5～10cmのごく小規模なものと、径30cm前後、深さ20～40cmのものがある。後者のうちPit1・2・3は東西方向に1.2m間隔で柱列状に並ぶ。これらの中に建物の柱穴が含まれている可能性はあるが、ピットが残る地山面の範囲が狭いため、調査区内で建物の形に並ぶものは確認できなかった。建物群は南方の調査区外に広がっている



第24図 葎廻り遺跡根太列2平面図 (S=1/40)



第25図 蔵廻り遺跡石垣1・2・3・11平面図 (S=1 / 200)

可能性がある。ピットはいずれも出土遺物がなく、時期不明である。

SD28は東西に細長い地山面の中央で検出された、幅1m、深さ30cmのしっかりした溝状遺構である。河道から分岐して南方へのび、調査区外へ続いている。河道から分岐して西方向へ2.1m続いたのち、急角度で南へ折れて2mのび、調査区外へ続いている。調査区内で確認できる長さは合計4mである。底部には砂が4～5cm堆積しており、掘削された当初は水が流れていたことがわかる。その後は埋没し、溝内には黒褐色土が堆積した。不明瞭だが層状の堆積がみられ、徐々に自然埋没していったと推定される。出土遺物には近世陶磁器(第32図1)があり、遺物からSD28の埋没時期は18世紀初頭と推定される。この時期は石垣9の構築時期と合致すること、また石垣9のすぐ上手にSD28の北端が取り付け位置関係から、両者は同時に構築・掘削された遺構

と考えられる。平面形状は堰の取水口を思わせるが、この時期には河道跡はすでに水の流れはなく、水田化していたとみられる。

石垣9は拡張されて石垣6となるが、拡幅時期は18世紀後半で、SD28は石垣6の時期にはすでに埋没していた可能性がある。

(15) A区ピット群・土坑(第27・28・29図)

A区の南側を中心に、50穴程度のピット群を確認した。明黄褐色粘質土の地山面に掘り込まれている。A区南辺付近のピットは径10～16cm程度しかなく、柱穴としては小さすぎるようであるが、調査区中央部のピットは径20cm前後である。ピットの埋土は、大別して①水田床土と共通する黄灰色粘土、②締りの悪い暗褐色土の2種類あり、前者が浅く、後者のピットが比較的深くなる傾向がある。これらのピットの中に掘立柱建物の柱穴が含まれている可能性は高いが、明確に建物の形に並ぶものは確認できなかった。

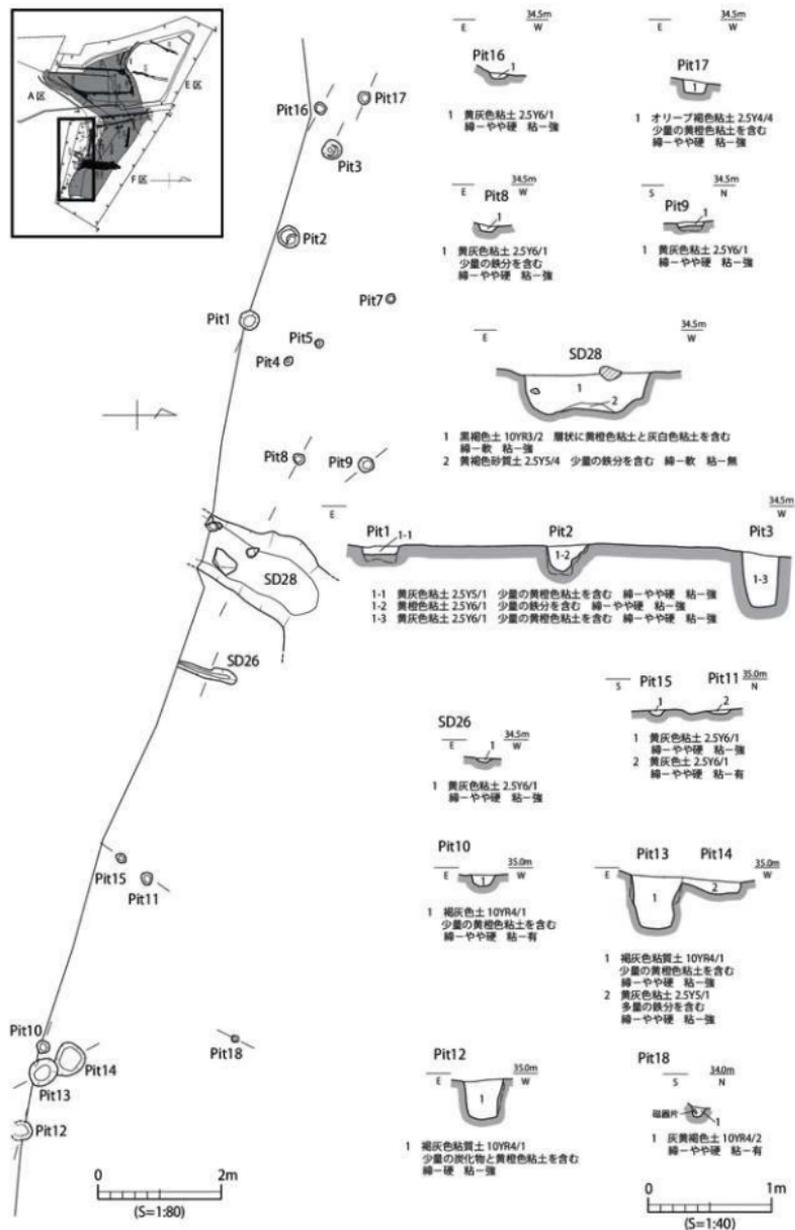
ピット群の西側は水田造成に際して削平され、ピット群が検出された面より約50cm低くなっており、地山面上の遺構は失われている。ピット群の東側は、ピットが検出された面から、わずかに段差がついて高くなっているが、この一段高い部分では全く遺構が確認されない。

戦前期の原地形についての聞き取りによると、ピット群の東側はもと小丘陵があって、現在の倉庫のあたりから調査区の西側まで突出していたという⁽⁴⁸⁾。安定した丘陵部に建物が営まれて、残っていた遺構のうち、平地を造成するため削平された部分の遺構は失われ、原地形の高さから変わっていない丘陵縁辺部の遺構がよく残ったものと考えられる。

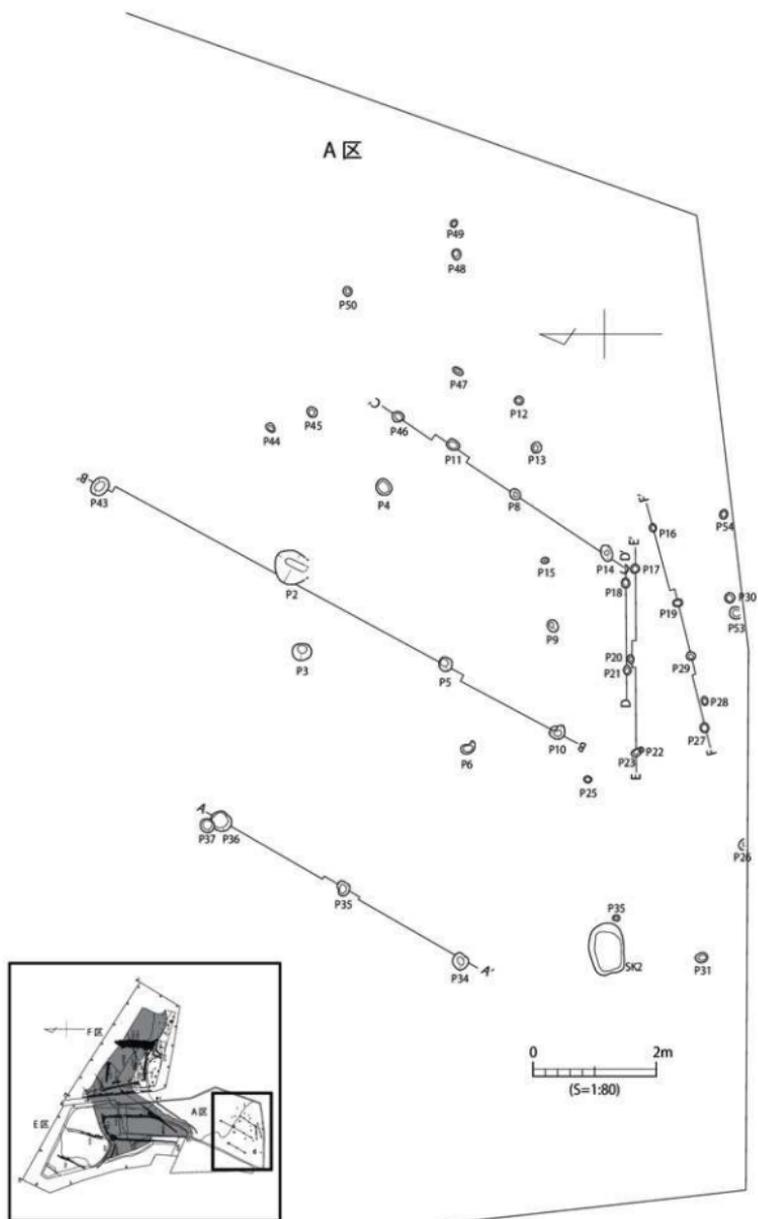
土坑SK2はA区ピット群の南東隅で検出された。長径80cm、短径60cm、深さ4cmを測る。底面に張り付くような状態で播鉢の底部(第30図2)が出土している。時期は14世紀と推定される。SK2の残存状況は悪く、検出面からの深さはわずか10cm程度であるが、削平されたため浅くなったと考えられる。

(16) 中世河道跡、A・E・F区出土遺物(第30～33図)

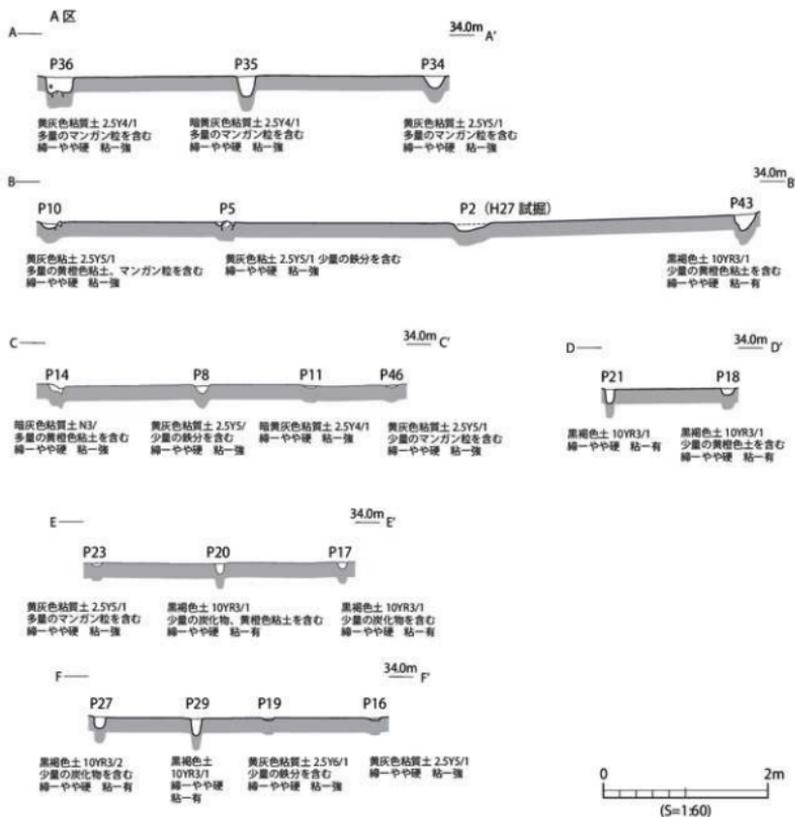
第30図はA区の遺構、河道部、包含層から出土した遺物である。1はA区Pit25から出土した白磁の碗である。表面は磨滅が著しく、ローリングを受けている可能性がある。口縁端部を玉縁状に作るIV類に属し、年代観は11世紀後半～12世紀前半である。2はA区SK2の底面から出土した播鉢の底部付近の破片である。内面には9条単位の播目がつけられる。表面、胎土とも還元色に焼き上がる。産地は備前で、年代観は14世紀である。3～5は石垣4から出土した。3は陶器の碗の底部である。畳付のみ無軸。胎土はわずかに黄色を帯びた灰白色である。外面は火を受けて火ぶくれしている。器形は呉器手で、17世紀後葉～18世紀前半の肥前産の陶器である。4は石垣4から出土した、磁器の皿である。見込みには砂目が2箇所残り、高台にも砂が付着する。砂目を用いて重ね焼きされた状況をうかがわせる。16世紀代の朝鮮系陶器、あるいは萩焼の可能性も残る。5は石垣4から出土した円形板状の木製品である。曲げ物容器の底板であろう。組み合わせられていた別材の痕跡が中央部に環状に残る。6～9、11は河道埋没後に堆積した灰色粘土層からの出土遺物である。6は白磁碗の底部である。見込みには蛇ノ目刺裂ぎが認められる。底部外面は軸葉がかからない。産地は福建省邵武窯と推定され、白磁D群に属する。年代観は14世紀後半から1440年代の間と推定される。7は大型の青磁皿である。同一個体の複数の破片が接合した。破片の出土位置は、水の流れが止まった後に堆積した灰色粘土層(第15図Bセクションライン9層)と、



第26図 蔵廻り遺跡 F区ピット群・溝状遺構実測図 (S=1/40・1/80)

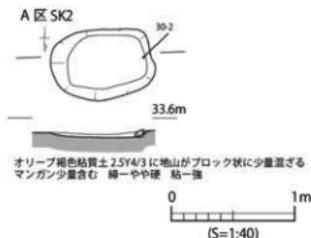


第27図 蔵廻り遺跡A区ビット群平面図 (S=1 / 80)



第28図 蔵廻り遺跡A区ピット群セクション図 (S=1/60)

その後河道の南岸が崩落して河道内に流入した流入土中（第15図Bセクションライン8層）にまたがっていることから、河道南岸に割れた状態が残っていた青磁皿が複数回にわたって河道へ転落し、堆積土中に入ったと考えられる。口径が17cmに達する大型品。口縁端部が外反する。高台内部は窯道具で支持するため環状に軸剥ぎされ、橙色に焼けた生地が露出している。接合面のうちには黒漆が残存するものがあり、漆継ぎしながら重用した状況をうかがわせる。見込み中央に印花による花文がある。8は土師質土器の鍋である。口縁は外傾したのち上方へ折れ、受け口状となる。外面には指頭圧痕が残り、煤が厚く付着する。年代観は12世紀である。9は土師質の土錘である。胴部の膨らみは弱く円筒形に近い。10は陶器の丸形碗の底部である。河道跡を埋め立て水田化するために投入された水田床土の内部から出土した。肥前産で、年代観は17世紀後半～18世紀前半である。11は壺又は甕の底部である。糸切り後削り出して高台を成形する。底部内面に自然釉

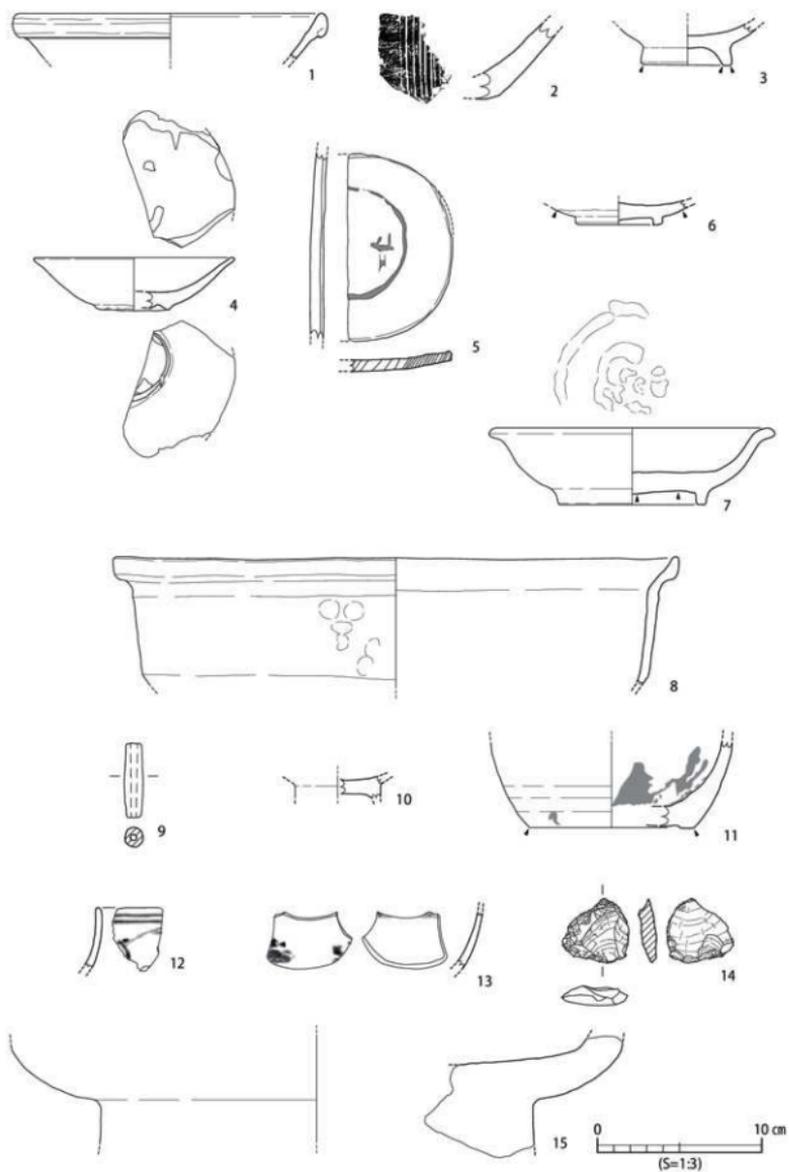


第29図 蔵廻り遺跡A区SK2実測図 (S=1/40)

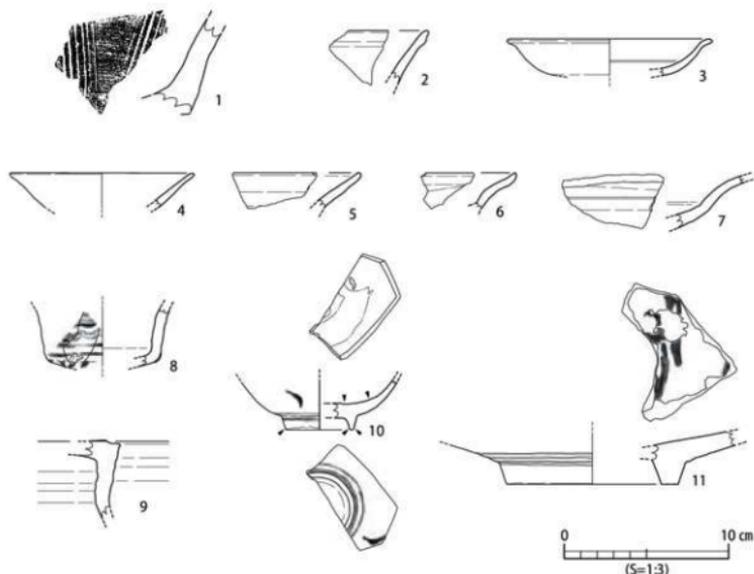
がかかる。産地は肥前系である。12は包含層から出土した陶器の丸形碗の口縁部である。外面に呉須で草花文、圏線を描く。肥前波佐見産で、年代観は18世紀前半である。13は丸形碗の体部である。外面には染付で草花文の花弁の一部が確認できる。14は黒曜石製のスクレイパーである。左側縁から下側縁にかけてやや粗い押圧剥離を連続して施す。右側縁の一部にも微細な押圧剥離が残る。本個体のほか、F区河道北西部から複数の黒曜石製品、剥片が出土しているが、流れ込みと考えられる。15は石臼(下臼)の受け皿基部～台座部分の破片である。

第31図はE区の河道部、及び包含層から出土した遺物である。1～6は河道跡の水流が止まった後堆積した灰色粘土からの出土遺物である。1は陶器の播鉢の底部付近である。内面には6条単位の播目が施される。産地は備前系で、年代観は16世紀以前である。2は碗の口縁部か。端部はやや肥厚し、玉縁形を意識した可能性がある。中国産の白磁と考えられるが、年代は不明である。3は白磁の皿で、端部は外反する。産地は中国福建省で、年代観は15～16世紀と思われる。4は小皿である。表面は淡い赤橙色を帯びる。産地は朝鮮系か。6は白磁の皿の口縁部である。外反した後わずかに上へ向かって先細る。外面は口縁部のみ透明釉がかかる。7は陶器の鉢である。腰に稜がついて上部は外反する腰折れ形である。外面の稜線から下の軸葉は凹凸があり網目状を呈する。肥前系である。8は腰折碗である。胴部には白化粧土を用いて刷毛目技法により波状文を表す。肥前唐津産で、年代観は18世紀前半である。9は陶器の底部である。器種を明確にできないが、器壁の厚さから壺、甕類が想定される。成形は紐作りによる。産地は肥前系である。10は磁器の丸形碗の底部である。見込みは蛇ノ目状に軸刺ぎされる。高台付け根部には染付による圏線がめぐる。年代観は18世紀前半とみられる。11は陶器の大型の鉢である。見込みには緑釉、鉄釉、白化粧土により刷毛目、三彩の装飾が施され、砂目が残る。断面逆台形の高台を削出しにより成形する。産地は肥前唐津で、年代観は17世紀後葉～18世紀前葉である。

第32図、33図はF区の河道部、包含層から出土した遺物である。1はF区中央の溝状遺構SD28埋土から出土した、磁器の丸形皿の底部である。畳付は軸葉がかからない。見込み部には染付による山水文が描かれ、外面には圏線がめぐる。産地は肥前で、時期は17世紀後葉～18世紀初頭とみられる。2～5は石垣6から出土した遺物である。2は丸形碗である。外面には染付で雪輪梅樹文が描かれる。産地は肥前で、時期は18世紀前半と推定される。3は丸形碗である。器形は腰張り形とみられる。外面には染付で文様が描かれる。産地は肥前で、年代観は18世紀である。4は磁器の丸形皿である。見込み部は蛇ノ目軸刺ぎされる。内面には染付で草花文が描かれる。産



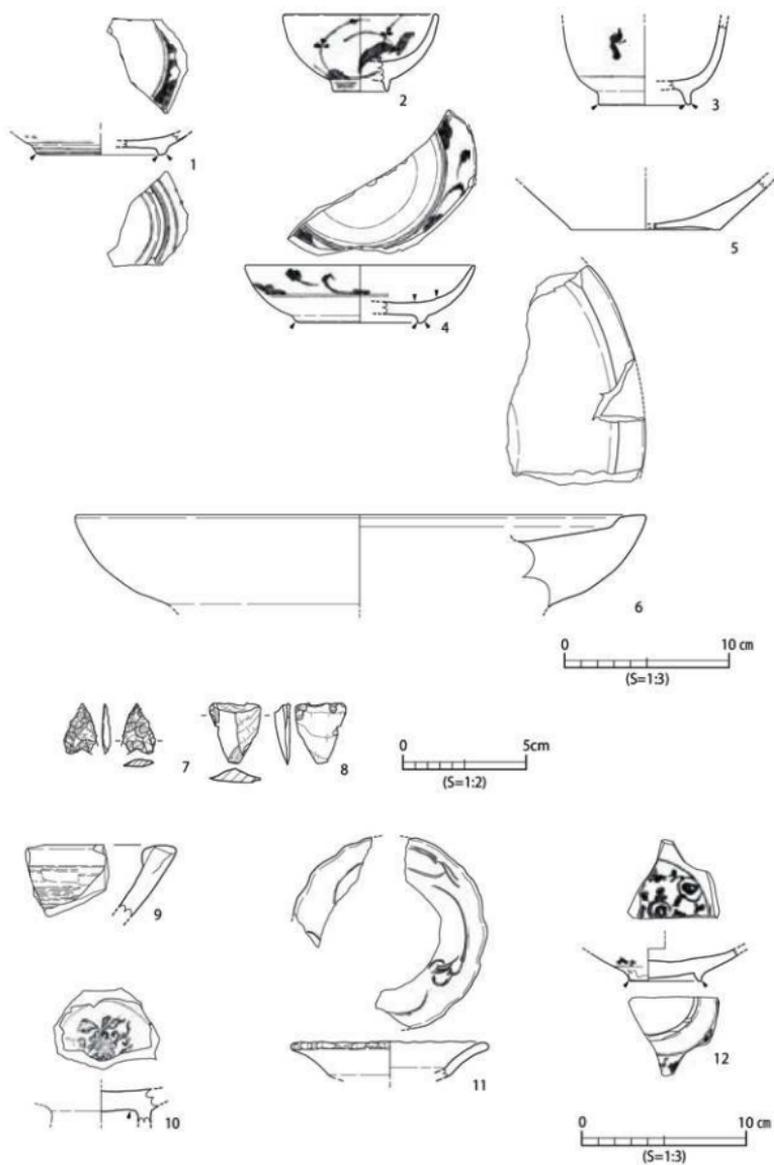
第30図 蔵廻り遺跡河道跡、A・E・F区出土遺物 (1) (S=1/3)



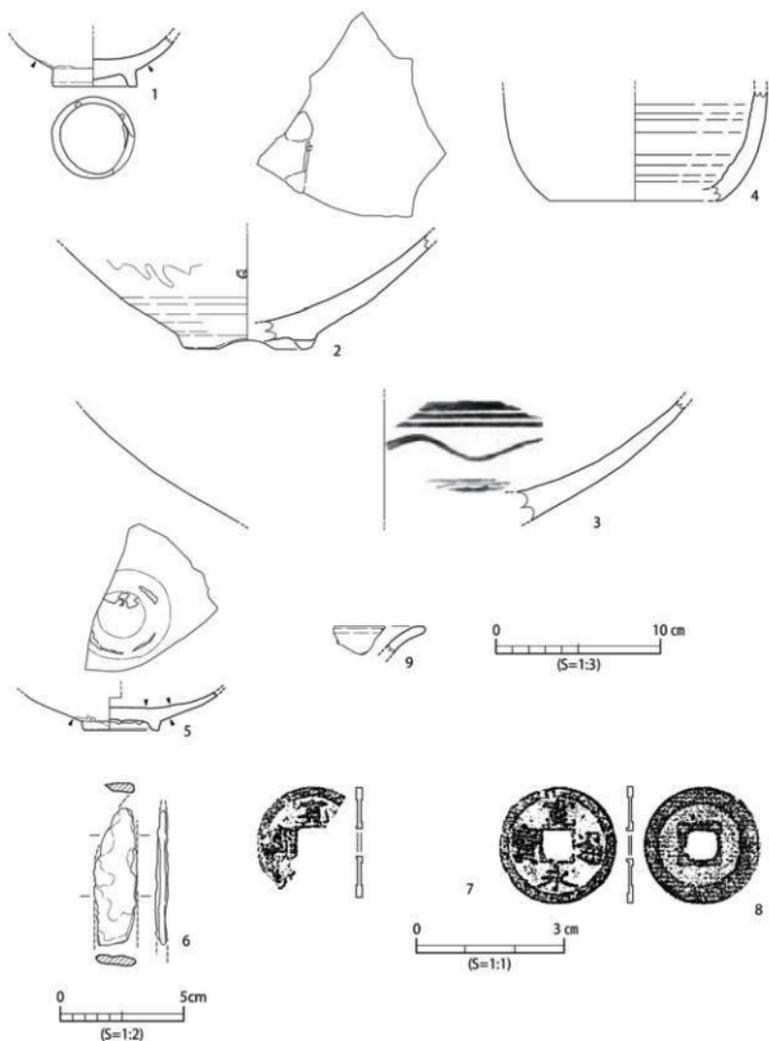
第31図 蔵廻り遺跡河道跡、A・E・F区出土遺物(2) (S=1/3)

地は肥前で、年代観は18世紀第4四半期である。5は土瓶の底部である。外面には少量の煤が付着する。6は石垣6の石材に転用された石臼(下臼)の受け皿部である。大田市静間城跡出土の類例から、下方に台座部がつく形状が想定される。⁽⁴⁸⁾ B区から風炉が出土している点を合わせると、茶臼として使用された可能性がある。7は水田床土から出土した、黒曜石製の凹基式の鎌である。外周部のうち右側縁の一部は素材の自然面をそのまま利用するが、ほかは微細な押圧剥離を施す。8～12は、河道内の水流が止まった後に堆積した灰色粘土からの出土遺物である。8は黒曜石の剥片である。背面の左半分は自然面が残る。頂点近くの一部に押圧剥離が施された痕跡がある。9は播鉢の口縁部である。端部は内面側に折り返しの後回転ナデにより整形されている。上面はわずかに膨らんでゆるい凸面状をなす。内面に横方向のハケ目調整が残る。産地は北陸系あるいは防長系と考えられ、年代観は16世紀～17世紀である。10は青磁の碗の底部である。高台内部は無軸で、軸を剥ぎ取られた可能性がある。見込み中央には印花文がスタンプされる。竜泉窯の碗D群に属し、年代観は15世紀である。11は青磁の皿である。複数の破片が接合しており、1片は河道のうち南岸に近い川底に張り付いた状態で出土した。口縁を波打たせた稜花皿で、内面に片彫りで草花文が表される。産地は中国竜泉窯で、年代観は16世紀である。12は磁器の皿の底部である。見込みには軸裏青(青花)による牡丹唐草文が描かれる。産地は中国漳州窯で、年代観は16世紀である。

第33図1は河道内の灰色粘土層から出土した陶器の丸形碗で、胴部全体に濃い鉄軸がかかる。高台中央は緩く盛り上がり兜巾状となる。高台は削出しにより成形され、畳付には胎土目が2箇



第32図 蔵廻り遺跡河道跡、A・E・F区出土遺物 (3) (S=1/3)



第33図 蔵廻り遺跡河道跡、A・E・F区出土遺物(4) (S=1/1・1/2・1/3)

所残る。産地は肥前系で、年代観は17世紀前半である。2～5は河道内を埋め立てた水田床土からの出土遺物である。2は陶器の鉢である。削出しにより高台を成形した後、弧状の切れ込みを入れる。見込みに残る目跡は、貝殻を積みみに用いた貝目である。にぶい褐色の生地に透明釉がかかる。底部近くでは厚く垂れて白みを帯びる。3は陶器の大型の鉢である。見込みに重ね焼き時の砂目跡が残る。白化粧土を用いて、刷毛目技法により波状文や圏線を描く。産地は肥前唐津で、年代観は17世紀後半～18世紀前半である。4は徳利または壺である。外面側は灰色、内面側はにぶい赤褐色に焼き上がる。外面には部分的に自然釉がかかる。産地は備前で、年代観は16世紀後半である。5は白磁の平形皿である。見込みは蛇ノ目状に軸剥ぎされ、軸剥ぎ部分の中に砂目が環状に残存する。外面の高台直上まで透明釉がかかる。産地は肥前系で、年代観は17世紀後葉～18世紀前半である。6は石垣6から出土した金属製品である。刀子の刃部で、左側縁は先細る。7、8は水田床土の上層から出土した寛永通宝である。

第5節 D区の調査

(1) D区の基本土層 (第35図)

D区は調査直前に家屋が移転した部分である。家屋の基礎工事に伴い、真砂土を約1m盛って嵩上げされていた。盛り土の下層は旧表土が僅かに堆積し、肥料のビニール袋等が含まれていた。旧表土の下層は黄灰色粘土が10～20cmあった。調査前まで水田であったB区と共通することから、この黄灰色粘土は水田床土と考えられ、D区が一時水田化していたことが判明する。調査区東辺近くには、家屋の排水用暗渠が設置され、かく乱を受けていた。

D区で確認した遺構はピット11穴、土坑1基、溝状遺構6条である。

(2) D区の遺構 (第36図)

調査区東部でSK1を検出した。現状で一辺50cm、深さ6cmを測る方形の土坑であるが、西半分は家屋の排水用暗渠設置の際に破壊されている。

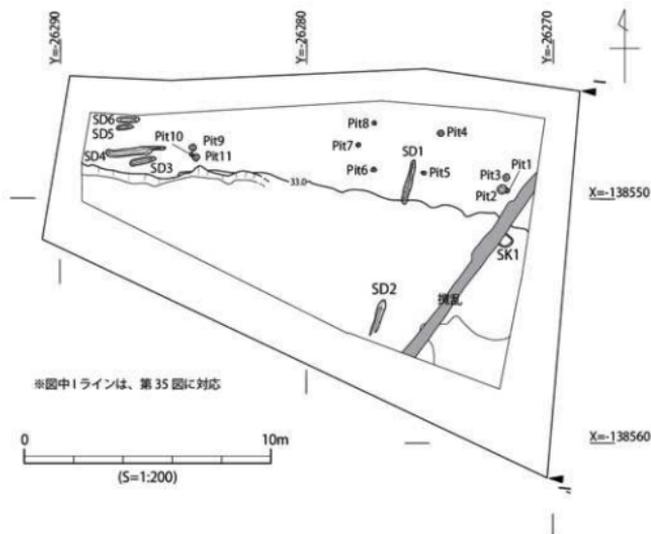
調査区西端で溝状遺構SD3～6を検出した。埋土はいずれも水田床土と同じ黄灰色粘土で、遺物は出土しなかった。SD3は長さ1.1m、幅20cm、深さ10cmを測る。SD4はSD3の北に接して検出され、長さ2.4m、幅24cm、深さ4cmを測る。SD5は長さ70cm、幅16cm、深さ2cmを測る。SD6は長さ90cm、幅16cm、深さ2cmを測る。SD3～6はいずれも浅く、遺存状況が悪い。狭い間隔で平行していることから、畑の耕作痕と思われる。

調査区東寄りでは溝状遺構SD1、SD2を検出した。SD1は長さ1.9m、幅18cm、深さ4cmを測る。SD2は長さ1.5m、幅24cm、深さ6cmを測る。いずれも遺存状況は悪い。走向が一致し、SD1南端の先にSD2が位置していることから、一連の溝であった可能性がある。

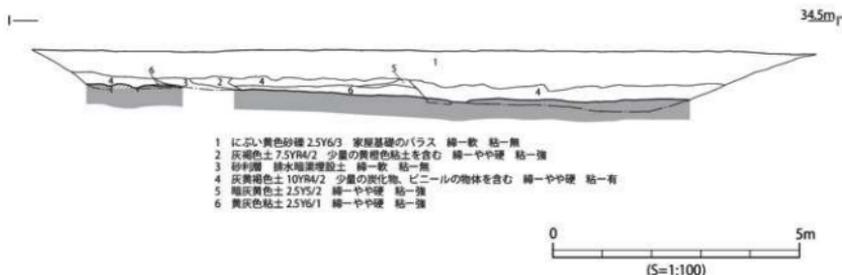
溝状遺構の周囲には8穴のピットが確認されたが、並んで建物を構成するとみられるピットは無い。調査区の西寄りにもピットが3穴(Pit9～11)確認された。これらのピットの内には、比較的深く、建物の柱穴が含まれている可能性があるが、調査区で検出した範囲では建物の形に並ぶものは確認されなかった。

(3) D区出土遺物 (第37図)

1は粗製の青花磁器の皿の底部である。高台は削り出しにより成形され、高台中央には兜巾がみ



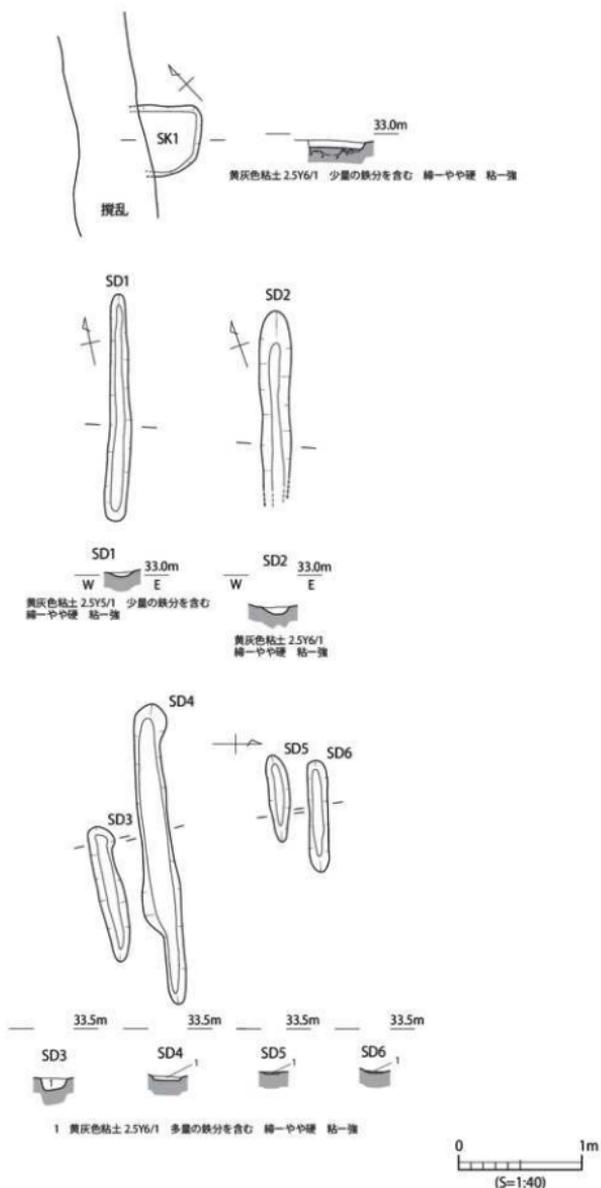
第34図 蔵廻り遺跡D区遺構配置図 (S=1 / 200)



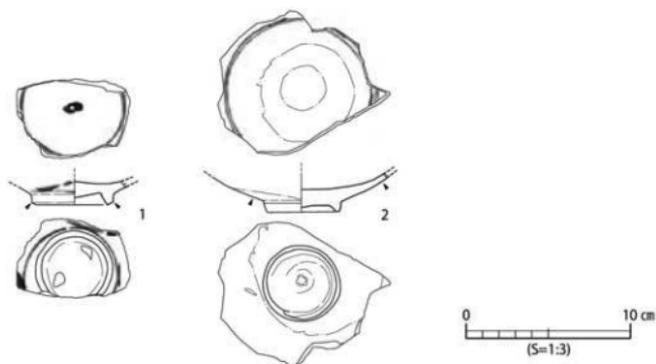
第35図 蔵廻り遺跡D区土層断面図 (S=1 / 100)

られる。年代観は16世紀末～17世紀初頭である。2は染付磁器の平形皿の底部である。見込みには圏線がめぐり、蛇ノ目釉刺ぎされる。外面の胴下部分から底部にかけて露胎しており、畳付にはわずかに糸切り痕が残る。17世紀前半の初期伊万里に属する。

D区



第36図 蔵廻り遺跡D区遺構図 (S=1/40)



第37図 蔵廻り遺跡D区出土遺物 (S=1 / 3)

第6節 B区の調査

(1) B区の基本土層 (第39図)

上から順に約20cmの表土層、黄灰色粘土層の順である。遺物は主として表土層から出土し、縄文時代から現代までの遺物が混在する。黄灰色粘土は水田の床土で、遺物はほとんど出土しない。調査区東辺を流れる流路1の部分では、川底に数センチの砂礫層が堆積する。

(2) B区の遺構 (第38図)

B区で検出した遺構は、溝状遺構7条、土坑2基、流路1条、ピット1穴である。蔵廻り遺跡で最も川に近く標高が低い調査区であり、建物の柱穴とみられる遺構は確認できなかった。

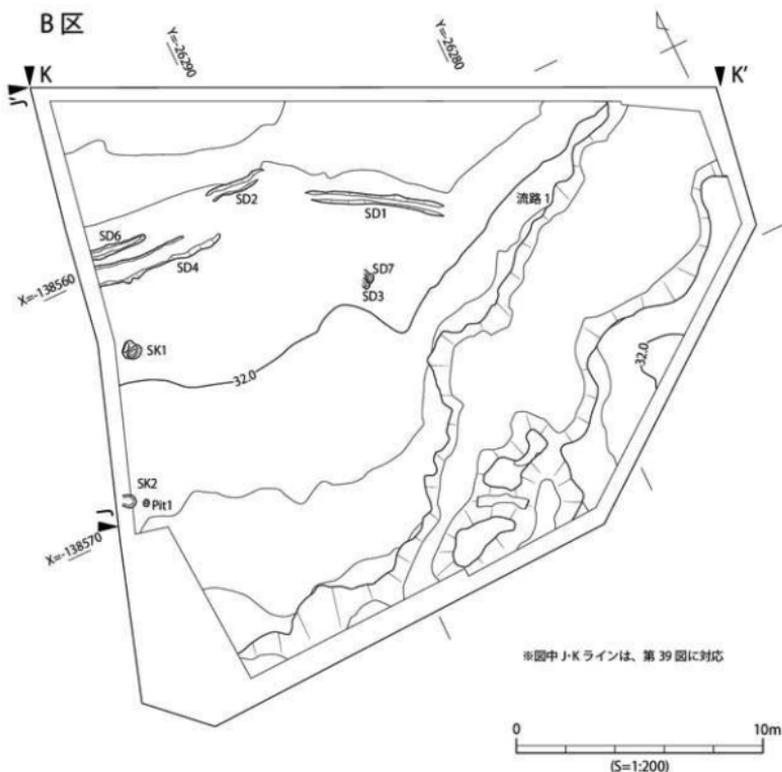
(3) 流路1 (第40・41図)

調査区南東辺では流路1を検出した。調査区東辺に沿って北東から南西方向へ流れ、調査区南辺で折れて西流し、海へ向かっている。西へ流れる部分では北岸のみ確認しており、南岸のラインは市道の下に想定される。川岸は緩く傾斜し、川幅は広い地点で8.8m、検出面からの深さは90cmである。底面には砂礫層が堆積していた。厚さ15cm程度であり、水が流れていたことは明らかである。礫のほとんどは径が小さいもので、水量が少なかったと思われるが、不自然に大きい石も数点混じっており、渡河の目的で置かれた可能性もある。調査区南端付近では流路の中の一部が中の島状に小高くなっており、蛇行しつつ網の目状に分流して流れる様子がうかがえる。

流路1は、西平原町内中央部を流れる平原川の支流の一つで、下流部で平原川に合流して海へ注ぐと考えられる。

(4) SK1 (第42図)

SK1は調査区西辺で確認された土坑で、径40cm、深さ26cmを測り、北辺の一部が段状となる。底部には径10cm前後の円礫が約20個残っていた。調査区西壁にかかる位置でもう1基土坑(SK2)を検出しているが、正確な径は不明である。



第38図 蔵廻り遺跡B区遺構配置図 (S=1/200)

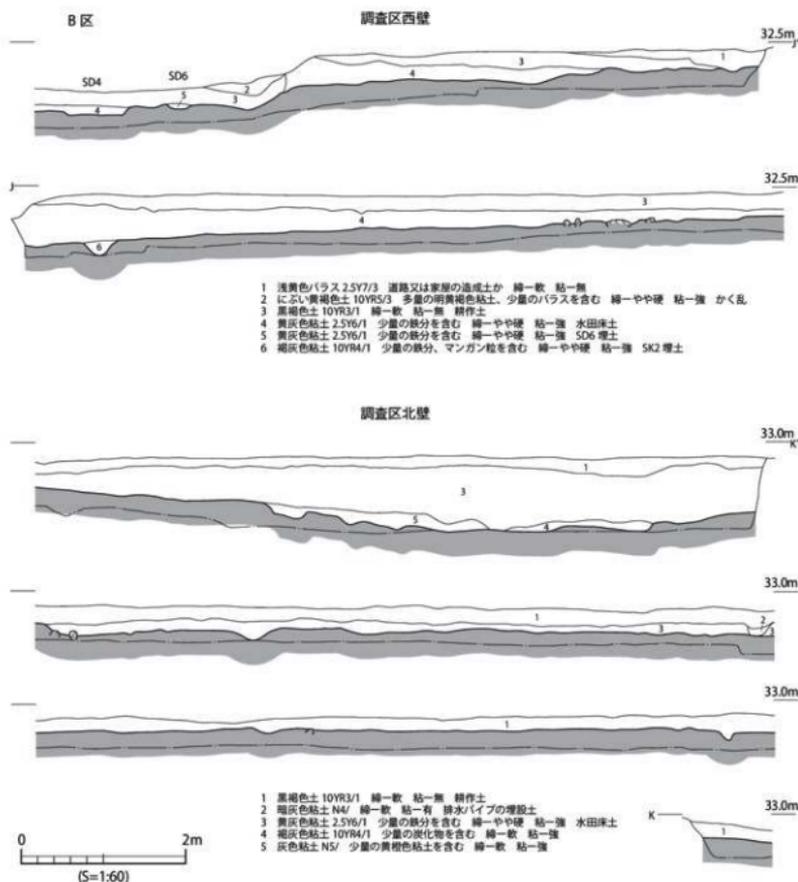
(5) SK2

SK2は調査区西辺で確認された土坑である。調査区縁辺の側溝にかかったため、ほとんど西壁セクションでしか確認できない。検出面での径40cm、深さ16cmを測る。底面の径は不明瞭だが10cm程度。埋土は褐灰色粘土で、水田床土と少し異なる。

(6) 溝状遺構 (第43・44図)

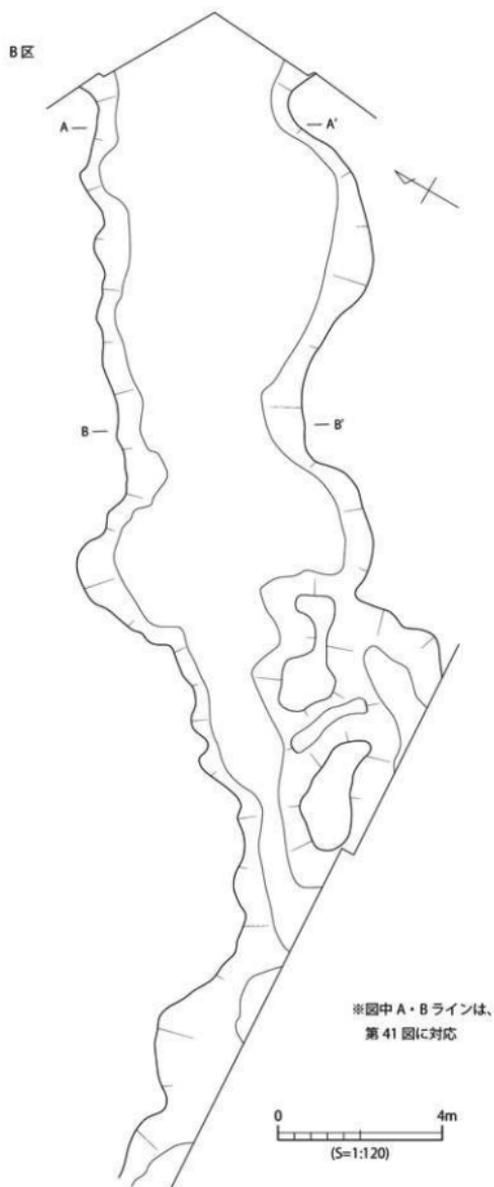
溝状遺構はいずれも検出面からの深さ10cm内外である。直上は現代まで使われた水田の床土に被覆されており、遺構の遺存状況は悪い。区画整理された現代の水田の区画とややずれる方向に、区画整理以前の水田面に伴うとみられる小さな段差が2段認められた。溝状遺構の走向はこの旧水田の区画と平行であり、水田耕作に伴う溝とみられる。埋土はいずれも水田床土と同じ黄灰色粘土で、遺物は出土しなかった。

SD3、7は試掘調査時にトレンチ壁の断面で確認したもので、トレンチ東壁から12～18cm程

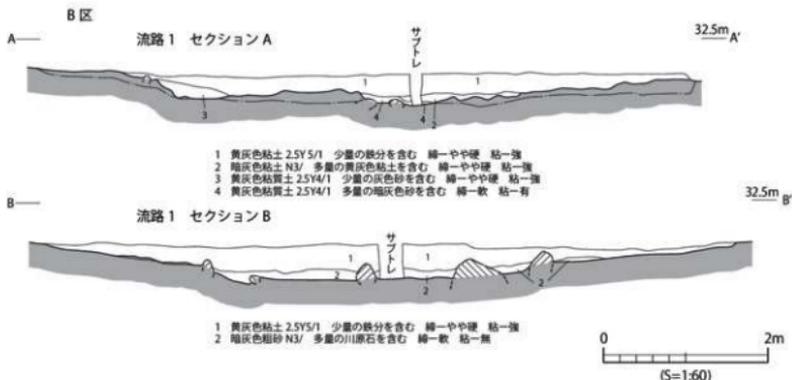


第39図 蔵廻り遺跡B区土層図 (S=1/60)

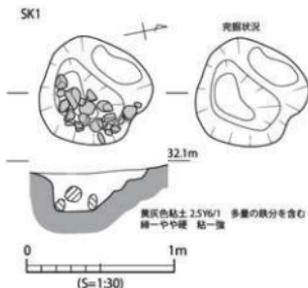
度の部分が残存する。SD4は、調査区西壁のセクションでは箱状の断面が明瞭に認められ、幅80cmとかなり広い。約5.6m東にのびるのが確認できるが、その先は不明瞭となる。SD6は幅40cm、長さ2.2mを測り、SD4に比べて狭い。SD6東端の先には走向を同じくするSD2があり、両者は一連の溝であった可能性がある。SD2は幅20cm、長さ2.6mを測り、深さは5cm程度で遺存状況は非常に悪い。SD1は遺存状況がよく平面的に確認が容易で、全長5.6mを測る。幅は40cm、深さは浅く8cmである。



第40図 蔵廻り遺跡B区流路1平面図 (S=1 / 120)



第41図 蔵廻り遺跡B区流路1セクション図 (S=1/60)



第42図 蔵廻り遺跡B区SK1実測図

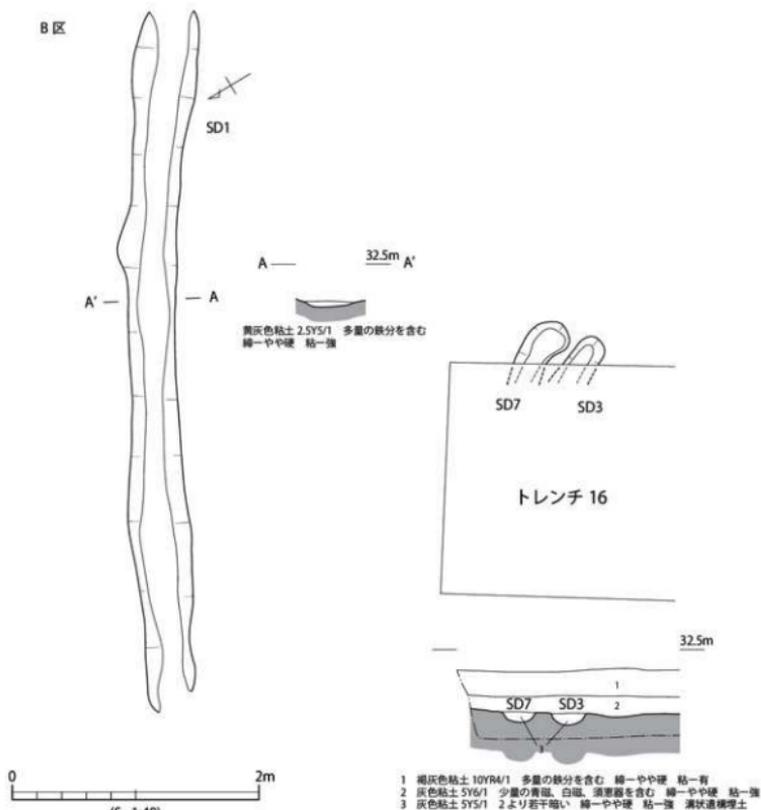
(S=1/30)

出土した瓦質土器の風炉である。口縁部の上下には水平方向の突帯がめぐり、突帯の間に垂直方向の条線を多数刻み込む。条間間隔は7ミリ程度。先端を三角形に尖らせた工具で連続して刻んだとみられ、表面に木目が残る。肩部には通気孔が穿たれる。破片のみであるため、通気孔の全形はわからない。9は小柄の茎部である。刀身は欠損している。10は天目形碗である。口縁直下の屈曲部分が残る。わずかに黄色みを帯びた灰白色の生地に鉄釉を施す。産地は肥前系で年代観は17世紀である。11は青花磁器の蓮子碗である。見込みには法螺貝文様が描かれる。外面の文様は唐草、あるいはアラベスクとみられる。小野氏の青花磁器分類のD群に属し⁽¹⁾⁽¹⁰⁾、年代観は16世紀前半である。12は青磁の皿である。轆轤で成形後口縁部を波打たせた稜花皿である。口縁端部に近い内面に2条の沈線がめぐる。年代観は16世紀前半である。破片の一つは河道底部の地山直上から出土している。

第47図1は陶器の丸形碗底部である。内外面に透明釉を施す。産地は肥前系である。2は陶胎染付の碗の破片である。文様は残りがよくないが草花文か。年代観は18世紀前半である。3は碗

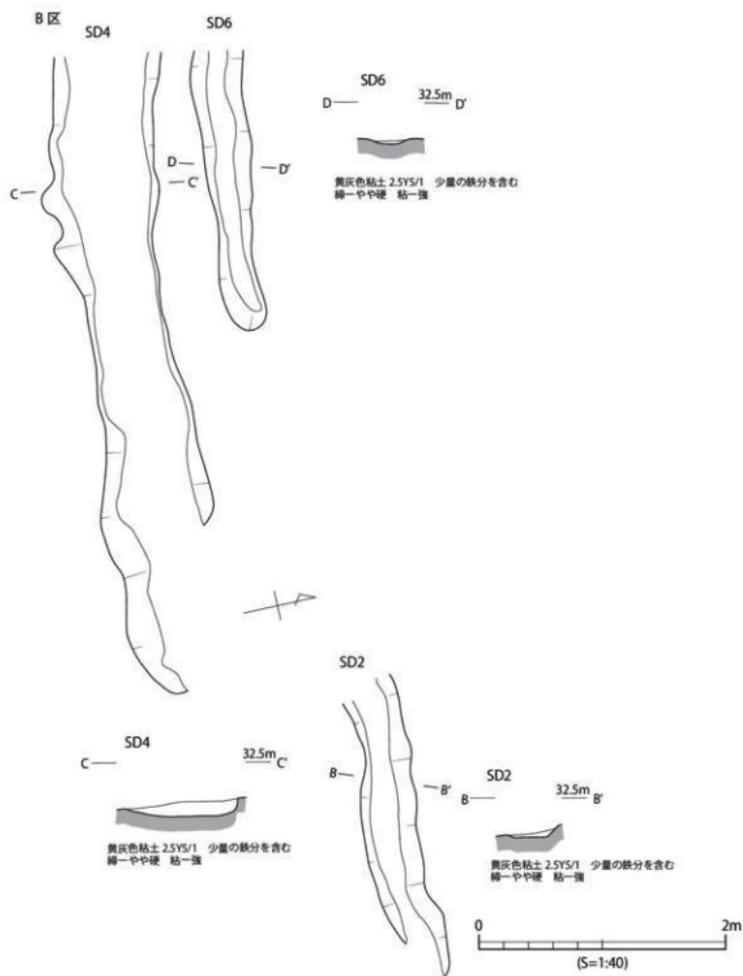
(7) B区出土物 (第45・46図)

第45図1は流路1埋土から出土、ほかは包含層から出土した。1は土師質土器の皿で、底部に回転系切り痕が残る。時期は平安時代である。2は安山岩製のスクレイパーである。刃部全体に押圧剝離を施す。3は須恵器の坏蓋の肩部である。ヘラ切りにより切り離しが行われる。ケズリの痕跡は不明瞭である。4は高坏の坏部で、体部に段がつき、段から下にカキメが施される。5、6は土師質土器の皿の底部である。回転系切りされたと思われるが、ほとんど痕跡が見えない。7は瓦質土器の播鉢である。内面に4条単位の播目が残る。外面は縦方向に刷毛目調整が密に施される。8は流路1の肩部から

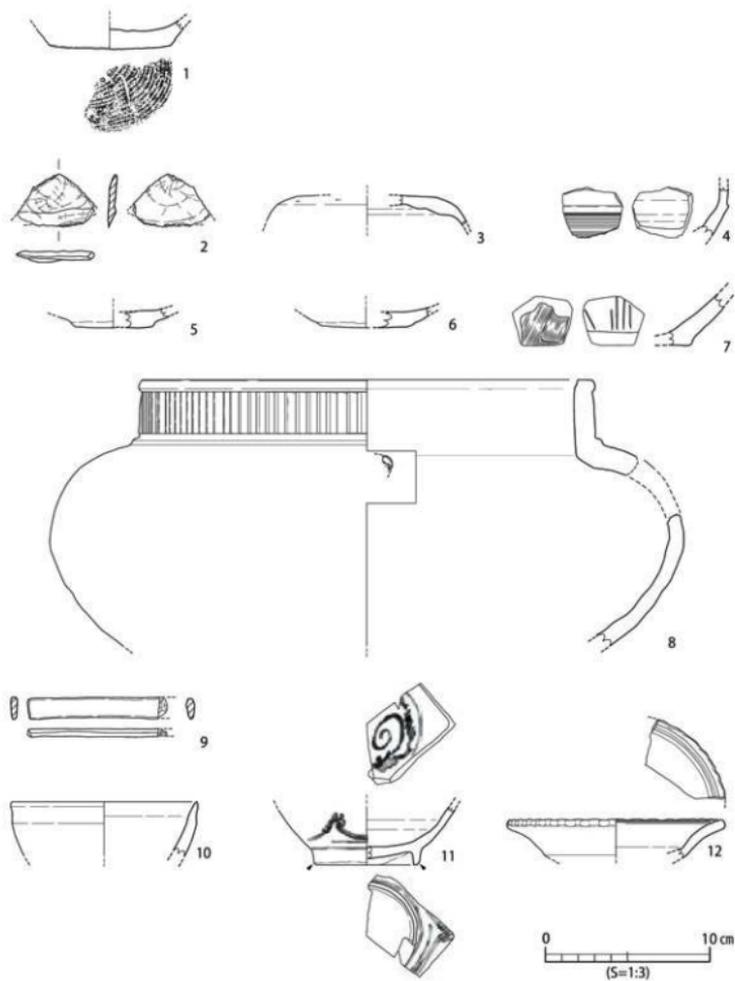


第43図 蔵廻り遺跡B区溝状遺構実測図(1) (S=1/40)

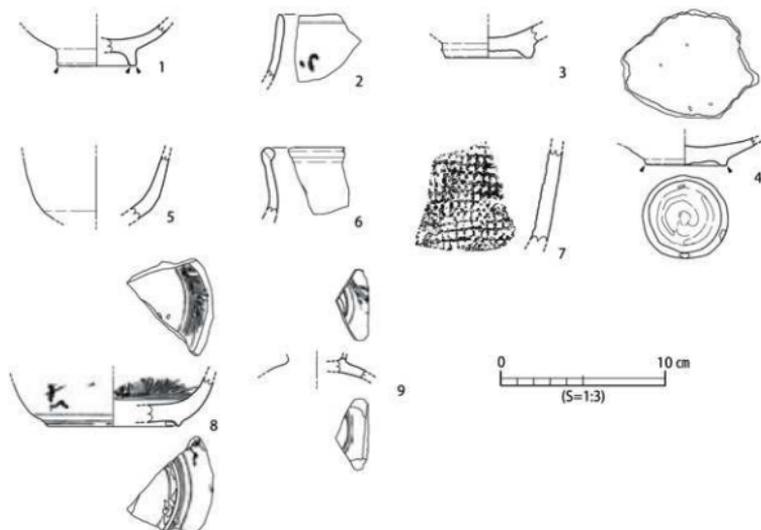
の底部である。底部外面は無釉、内面には藁灰釉が施され白色を帯びる。肥前系で、年代観は17世紀前葉である。4は陶器の皿底部である。低い高台中央に小さく突出する兜中が認められる。胎土は暗い赤褐色であり、外面に透明釉が厚くかかって緑色を帯びる。5は陶器碗の胴下部で、内外面に藁灰釉がかかり白色を帯びる。産地は肥前唐津で、年代観は17世紀前葉である。6は陶器の片口鉢である。口縁端部は外に折り返され肥厚し、丸みを帯びる。藁灰釉がかかり全体的に白い。産地は肥前唐津で、年代観は17世紀前半である。7は陶器の甕である。外面側が青灰色、内面側が赤褐色に焼き上がる。外面はナデ調整され、内面は格子目状の叩き痕跡が残る。産地は肥前で、年代観は17世紀後半から18世紀前半である。8は磁器の丸形皿である。高台端部には砂が熔着しており、重ね焼き時の砂目積み跡とみられる。内面には草花文、外面は唐草文が描かれる。産地は肥前系で、年代観は18世紀中葉である。9は磁器碗の蓋である。ツマミの周囲に竹文が描かれる。産地は肥前系で、年代観は18世紀中葉である。



第44図 蔵廻り遺跡B区溝状遺構実測図(2) (S=1/40)



第45図 蔵廻り遺跡B区出土遺物 (1) (S=1/3)



第46図 蔵廻り遺跡B区出土遺物(2) (S=1/3)

第7節 小結

(1) 遺構の分布、性格

蔵廻り遺跡では、調査区北部を東から西へ流れる河道跡、水田、及びピット群等の遺構が検出された。

A区東方からF区南方にかけては小高くなっており、ピット群は、この小台地の北辺から西辺にあたるF区南部とA区南部とで検出された。両者の中間に位置するA区中央部は、小台地の中心部であったと推測されるが、ピットを含め全く遺構が検出されない空白地帯である。ピット群が検出された範囲とは地山の質が異なり、比較的多くの石を含む層であることから、畑地化する際に当該部分が削平され、同時に遺構が失われたと推定される。つまり、小台地の中心部の遺構は削平され、比較的低い縁辺部の遺構だけが残ったものと考えられる。

A区、F区のピット群は時期不明のものがほとんどであり、柱穴規模は総じて小さい。ピットの一部は列状に並ぶが、掘立柱建物を構成するものは確認できず、居館等を想像させる遺構は確認されていない。丘陵の縁辺部に位置しているためであろう。ただ、Plt25からは白磁碗(第30図1、11世紀後半～12世紀前半)、SK2から備前焼の播鉢(第30図2、14世紀)が出土している。調査で検出された遺構の一部は中世に遡ると推定される。

調査と並行して、鎌手公民館の協力を得て土地台帳により調査した周辺の字は、B区・D区が「郷

蔵南」、A区が「蔵廻り」であり、調査区以東は「郷蔵ノ前」であった。「郷蔵」は、江戸時代に年貢米や救荒食糧の貯蔵場所として機能した村の倉庫をいう。浜田藩では、郷蔵に加えて救荒機能を持たせた「永康倉」が村々に設置されたことが知られており、本村にも「永康倉」と記した額が伝わっている。⁽¹¹⁾ 字の分布から推定される郷蔵の位置はA区の東方＝F区の南方であり、現在、郷蔵の推定位置には製材所の倉庫が建つ⁽¹²⁾。この地点の原地形は、東から小台地が張り出し、調査区西端まで続いていた。河道付近や低地を避け、安定した台地上を選んで郷蔵を建てたと考えられる。安定した条件であること、調査で検出された遺構の中に中世に遡るものが含まれることから、郷蔵推定地付近が中世にも利用されていた可能性はある。

(2) 河道跡の埋め立て・水田化の過程

河道付近の原地形は、平坦地が広がる現状と大きく異なり、南岸側のA区ピット群までの間には小丘陵が張り出していた。北岸側も削平を経て現状のような平坦な地形となっている。河道は起伏に富んだ原地形の間を曲流していたと想定される。原地形における河道の底面は周囲に比べて少なくとも1.6m低い位置を流れていたため、調査区周辺ではこの川の水を使うことはできず、この川の水を利用可能なのは下流部の水田に限られていた。

埋め立てと水田化の過程は、灰色粘土が一定程度(50～60cm)堆積した後に始まった。灰色粘土からの出土遺物には15～16世紀の輸入陶磁器と、17世紀初頭の肥前系陶磁器が含まれており、最初の水田化は江戸時代初頭に始まっている。この段階で構築されたのが石垣4、石垣5、根太列1、根太列3、石垣10など北岸の最下部で検出された遺構である。これらの遺構の設置と並行して、水田に使える面積を広くするため北岸が切削され、地形改変の結果急崖状となった。

水田化の第2段階は18世紀である。この段階の水田開発は、南岸方向への土地の拡張を伴った。南岸は一部切削されて現状のような段掘り形となった。平坦面1の根太列2、SD25、24、27はこの段階の水田開発に伴う遺構である。同時に、地山を削った土砂を河道部に投入し、水田の床土とした。埋め立て後の河道部は平坦面1と同じ高さに達し、水田として利用可能な平坦部分は南岸側へ少し拡大した。上流側(F区)の石垣9は平坦面1上面まで延長され、上層には石垣9を引き継いで石垣6が構築された。この段階では石垣4以東石垣6以西までの部分が埋め立てられ(第10図Fセクションライン「3層」)、その後石垣3～石垣4の間も埋め立てられる(第9図Eセクションライン3層)が、埋め立てを経た後もなお河道跡部分が周囲より60cm以上低い状態であった(第15図)。

近代にはE区とF区は別の所有者に属し、境界線上を里道、後に上水道が通って両地区は完全に分断された形となった。開発も全く別の過程をたどる。

里道以西では、南岸と北岸をさらに大規模に削平し、平坦部を拡大する。この段階の開発の内容は、①河道南岸のA区を削平して現状の高さまで下げる、②河道北岸のE区を削平して石垣1、石垣2を構築する、の二つであった。削平されて生じた土砂で河道跡を周囲と同じ高さまで埋め立てた。埋め立ての範囲はE区の石垣3以東に限られ、石垣3以西はこの時点でも埋め立てられないままであった。当時の在住者複数人が、調査区について「鎌手中学校所有の水田であった」「中学在学時に田植えをした」と証言している。聞き取りに登場する水田は、前述の埋め立て・拡大を経た後の水田である。当地域の水田用水の主な水源は、ずっと北のほうにある大きな池(通称は「大

堤」で、現鎌手中学校グラウンドに該当)であった⁽¹¹³⁾。

調査区北壁土層では、厚さ1mを超える造成土層が確認された。これにより、里道以東(F区)は大規模な埋め立てを経て(第10図1層)工場用地に転換し、戦前は雑穀工場が操業していたことが判明した。⁽¹¹⁴⁾ 一方調査区東壁は、造成土層の中間に軟質の腐植土層が入っていることから(第11図)、埋め立て→畑地化→再度埋め立てという過程をたどったとみられる。

(3) 出土遺物

今回の調査以前に知られていた古い時期の遺物としては、鎌手公民館に所蔵されている町内出土の縄文土器と須恵器がある。また、遺跡では古墳時代の須恵器窯である芝窯跡、中塚窯跡が知られていた。蔵廻り遺跡では、少数であるが黒曜石製の石鏃、6世紀に属する須恵器片が出土しており、既知の縄文時代、古墳時代の資料と整合する。

上記の他に、中世から近世にかけての遺物・遺構が新たに確認され、中世・近世を通じて継続的に人間の活動が続いていたことが判明した。

河道から出土した中世遺物の出土地点は、F区では南岸寄り、A区で東岸寄りの部分に集中する。郷蔵推定地点から流下、あるいは転落してきたとみられる出土状況であり、郷蔵推定地点には中世の有力者の居住域が想定される。煮炊き具、日常食器とみられる鍋等の出土量が少ない反面、同量、あるいはそれ以上に輸入陶磁器が出土している。この中には青花磁器、青磁の稜花皿等を含んでおり、年代は15～16世紀が中心であった。ほかに天目茶碗、風炉等の茶道具が出土しているが朝鮮系の陶磁器は確実なものが出土していない。

出土遺物は、14世紀に属する備前焼の播鉢、11世紀後半～12世紀前半の白磁碗が、いずれも遺構から出土している。平安時代から蔵廻り遺跡周辺の土地が利用されていたことを示しているが、出土遺物の傾向から遺跡のピークは15～16世紀と推定される。16世紀の中国陶磁器が顕著である傾向は、中須東原遺跡や沖手遺跡における輸入陶磁器のピークとも合致しており⁽¹¹⁵⁾、これらの輸入陶磁器は益田側から搬入されたと思われる。数少ない煮炊き具として、図化できなかった防長系の鍋の破片が出土しており、西方からの物資の流れがあったことも裏付けられる。輸入陶磁器を入手し、茶の文化に触れる程度の有力者が遺跡周辺に居住していたことも推定できる。有力者の居住域は、周囲に比べて高く安定している台地＝郷蔵推定地点に比定されるであろう。

【註】

- (1) 「大堤」の中字名は益田法務局所蔵の地籍図（西平原町に1-56）等に見える。なお、終戦前後の町内の状況について、田中義昭氏ほか当時の在住者複数から御教示をいただいた。
- (2) 資料見学に際して、鎌手公民館から多大な御協力をいただいた。
- (3) 本多博之「中近世移行期西日本海地域の流通と海辺領主」『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』島根県古代文化センター、2018年。
- (4) 矢富熊一郎『石見鎌手郷土史』島根郷土史会、1966年及び矢富熊一郎『石西国道史』浜田国道工事事務所、1964年。
- (5) 当時町内にあった瓦窯、店舗、施設等について、田中義昭氏より詳細にうかがうことができた。田中氏は昭和十年代に西平原町在住。
- (6) 同上・田中義昭氏の御教示による。
- (7) 田中義昭氏ほか終戦前後の当地域在住者複数からの御教示による。
- (8) 地権者・田中木工様からの御教示による。
- (9) 島根県教育委員会『静間城跡』2018年、第37図1, 2。
- (10) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2、1982年。
- (11) 註(3)前掲『石見鎌手郷土史』。
- (12) 字の調査に際して、山陰道保存会会長寺戸和幸氏、及び鎌手公民館から御教示、御協力をいただいた。
- (13) 註(6)に同じ。
- (14) 註(5)に同じ。
- (15) 佐伯昌俊「高津川・益田川河口部の港湾施設の様相」『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』島根県古代文化センター、2018年

第4章 榎坂窯跡の調査

第1節 位置と環境

榎坂窯跡は、益田市東端の土田町に所在する。周辺の地形は、土田川及びその支流が形成した狭小な谷が、川に沿って細長く伸びるのが特徴である。土田川をはさんだ対岸に位置する源田山の南麓には、広い地峡が土田～岡見間を東西方向に走っており、近世山陰道、国道9号はいずれもこの地峡を利用する。

近世山陰道は、上記の土田～岡見間地峡から西進し、土田川を「馬橋」で渡河した後現国道のルートから離れ、土田川の支谷を通して南西方向へ直進し、榎坂窯跡の東辺を通っている。榎坂窯跡は陸上交通の要地といってよい位置にある。大正期の鉄道開通により、地域の主要な交通ルートは海沿いを遠回りする現在の鉄道のルートへ移っていくが、近世山陰道を踏襲したルートも依然として地域最大の主要道であった。昭和58年水害を機に現市道につけ変わるまで、改修を重ねながら現役の道路として機能し続けていた^(註1)。平成28年度に馬橋地区について発掘調査が行われ、石敷き遺構や、コンクリートによる目張り等の改修痕跡等が確認されている^(註2)。

西平原町内の瓦窯の出荷手段が鉄道であったのに対し、榎坂窯跡は旧山陰道を出荷ルートに使うことを念頭に置いた立地といえる。

なお、当地域周辺には製鉄遺跡が散在する。榎坂窯跡の南方には上の谷鉦跡があり、上の谷鉦跡の近所には「鍛冶屋」という屋号の民家が存在する。榎坂窯跡東方の金山地区には金山下鉦跡がある。西方の木部町内にも滝ノ上鉦跡や大石鉦跡が分布する。

第2節 発掘作業と整理事業の経過

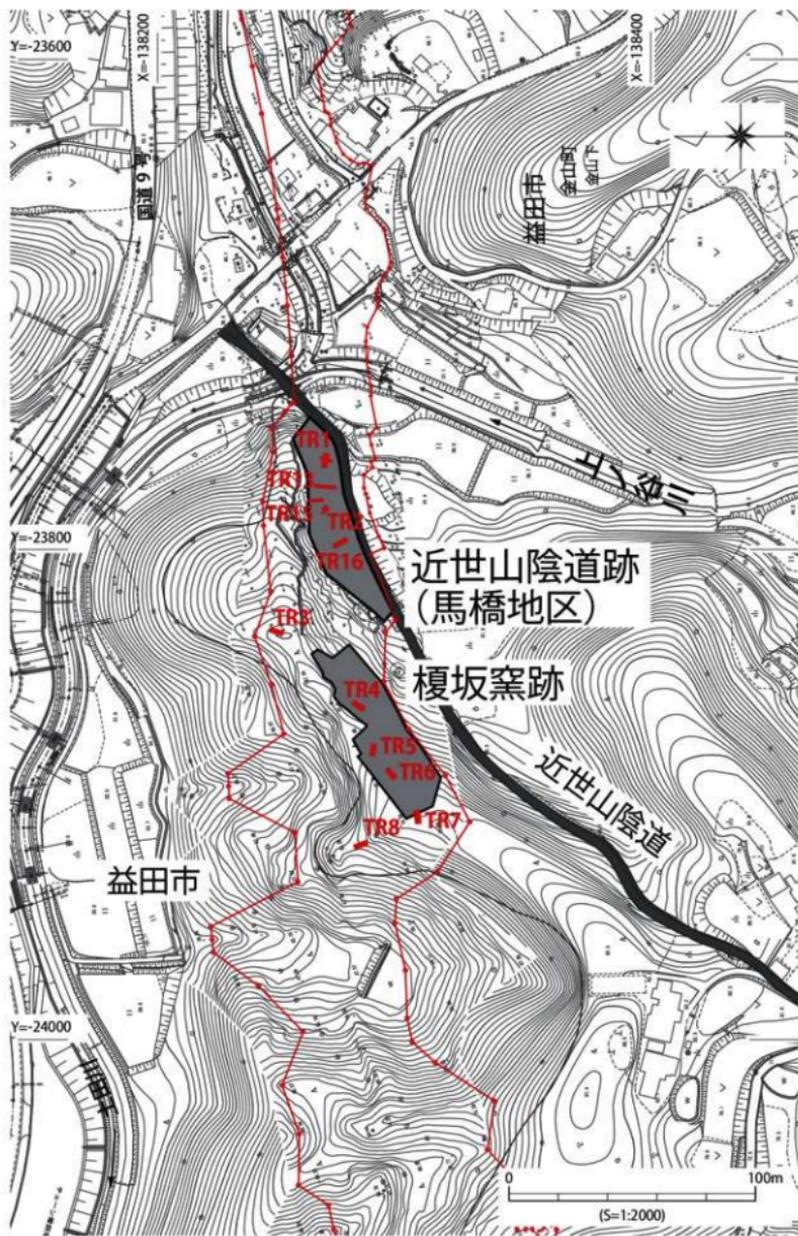
榎坂窯跡は益田市土田町の丘陵部斜面に位置する。三隅益田道路本線が、谷から丘陵部にかかる位置で、工法的には当遺跡以東が橋梁、以西が切通しとなる。橋梁の一つは位置的に近世山陰道の一部を破壊することになるため、平成27年度に試掘調査を経た後、平成28年度に近世山陰道（馬橋地区）の本調査を実施した。

榎坂窯跡はこの近世山陰道（馬橋地区）の南西に接しており、近世山陰道と併せて平成27年度に試掘調査、平成28年度に本調査を実施した。

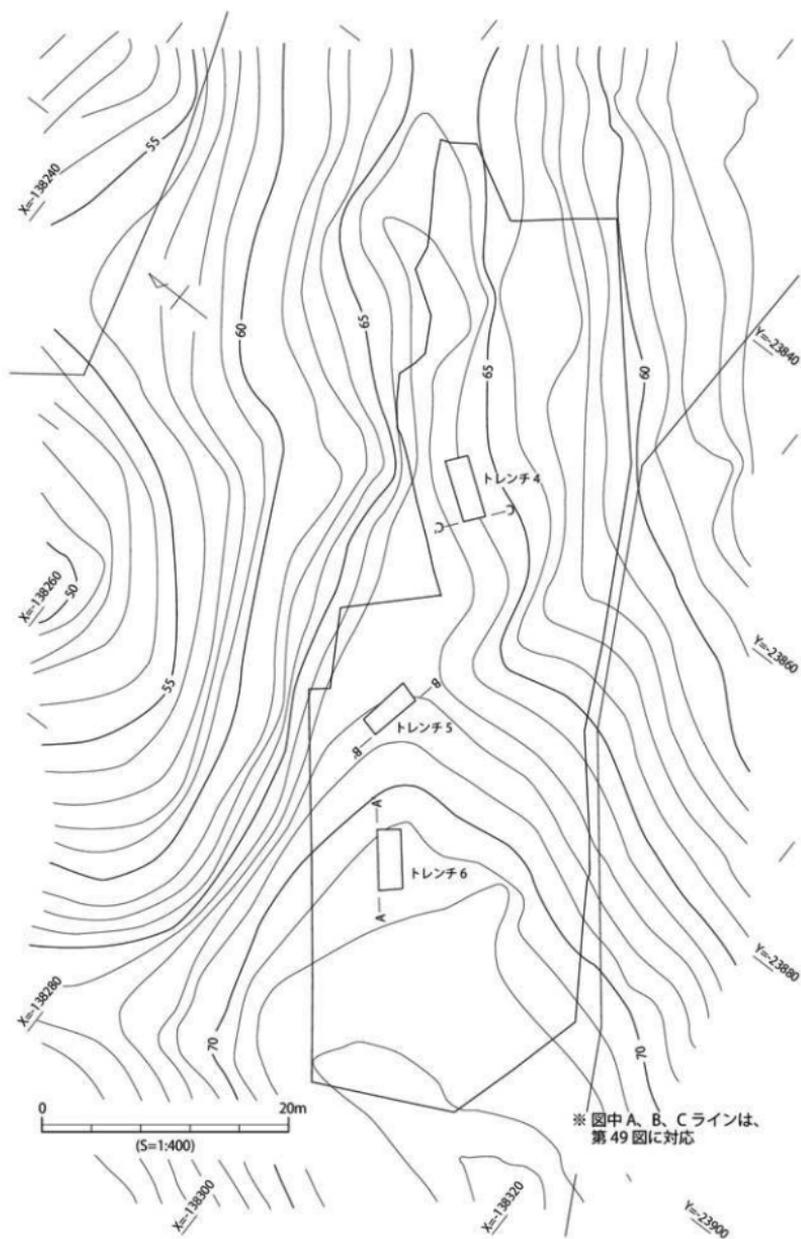
分布調査と試掘調査の時点では、山腹斜面に広い平坦面が認められ、礎石が検出されたことから礎石建物の存在が予想された（トレンチ4）。また、尾根頂部に細長い窪地が認められ、瓦列が検出されたことから（トレンチ6）この窪地を窯跡に想定していた。

本調査は平成28年6月1日から開始し、11月24日に終了した。本調査の測量、図化は遺跡調査システム「遺構くん」を使用した。

窯跡は、予想していた尾根頂部ではなく、調査区南西部の斜面で検出された。調査区南西の連房

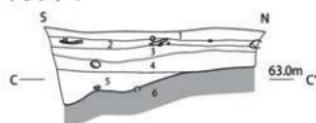


第47図 榎坂窯跡調査区的位置と周辺の遺跡 (S=1/2000)



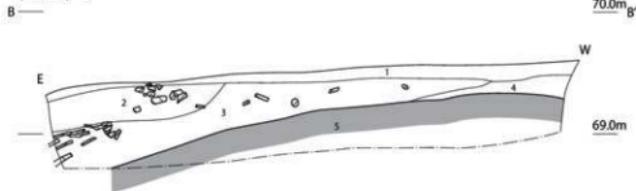
第48図 榎坂窯跡調査区配置図・調査前地形測量図・試掘位置図 (S=1/400)

トレンチ4



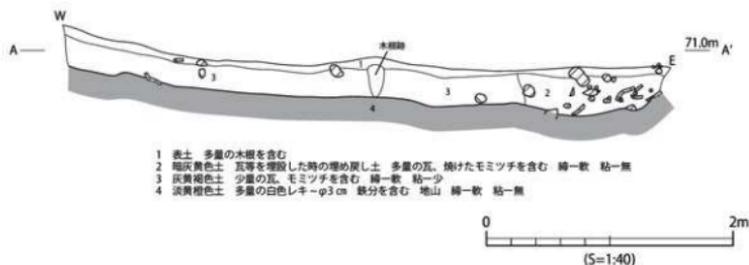
- 1 表土
- 2 にふい褐色粘質土 多量の明黄褐色粘土粒 竹藪を含む 締一やや硬 粘一有
- 3 明黄褐色粘質土 少量の灰オリーブレキ $\sim\phi 3\text{cm}$ を含む 平坦面造成時の盛土 締一硬 粘一強
- 4 黄褐色粘質土 多量の黄褐色レキ $\sim\phi 3\text{cm}$ を含む 平坦面造成時の盛土 締一硬 粘一強
- 5 にふい褐色粘質土 締一硬 粘一強
- 6 にふい褐色粘質土 多量のレキ $\sim\phi 10\text{cm}$ 鉄分を含む 地山 締一硬 粘一強

トレンチ5

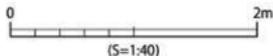


- 1 表土
- 2 暗灰黄褐色土 多量の瓦、表面洋化したモミツチを含む 多量の木根を含む 締一軟 粘一無
- 3 暗灰黄褐色砂質土 少量の木根を含む 締一軟 粘一無
- 4 灰黄褐色土 少量の木根を含む 締一軟 粘一少
- 5 にふい黄褐色土 地山 締一やや硬 粘一有

トレンチ6



- 1 表土 多量の木根を含む
- 2 暗灰黄褐色土 瓦等を埋設した時の埋め戻し土 多量の瓦、焼けたモミツチを含む 締一軟 粘一無
- 3 灰黄褐色土 少量の瓦、モミツチを含む 締一軟 粘一少
- 4 淡黄褐色土 多量の白色レキ $\sim\phi 3\text{cm}$ 鉄分を含む 地山 締一軟 粘一無



第49図 榎坂窯跡試掘調査セクション図 (S=1/40)

式登窯周辺と、尾根頂部は重機が進入できないため表土から人力による掘り下げを行った。山腹斜面の平坦面は重機の進入が可能な位置にあったが、試掘調査結果から礎石建物が想定されており、礎石に当たってしまう恐れがあるため重機による掘り下げができず、これも表土から人力による掘削となった。

連房式登窯は、調査区中央に土層観察用のベルトを残して掘り下げたところ、洋化した焚き庭や、窯壁の基底部分が検出された。焼成室部分は傾斜が急で、地山面はレンガを置くために階段状に加工される等、瓦窯に特徴的な構造であった。作業用のテラスが各焼成室の右側に付属する。東向き山腹では、等高線に沿う方向に細長くのびる面（平坦面1）上面で、礎石建物2棟を検出した。連房式登窯で焼成する瓦の成形、乾燥をはじめ準備を行う作業場とみなされる。尾根頂部エリアは粘土採掘跡で、粘土を採取したあとの排土が1m以上の厚さで堆積しており、排土全てを人力で移動す

ることは不可能だったため、縦横方向のトレンチを設定し、堆積状況を確認した。

出土遺物は瓦、陶磁器、窯道具等多岐にわたるが、窯道具は瓦焼成に使用される「ハセ」「モミツチ」のみで、陶器用の窯道具は含まれないことから、陶磁器のうち当遺跡で製作されたものはごく一部とみられる。残された瓦及び窯道具はすべて焼成失敗品とみるべきもので、それらの器種別数量比には大きな意味がないため、調査区内で確認できる遺物の器種を漏れなく採取するようにした。

整理事業のうち、遺物の水洗、注記、接合は現地調査と並行して行った。遺物の実測、図化、写真撮影および遺構図面の整理、浄書は他の遺跡と併せ、平成30年度に行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

第3節 連房式登窯の調査

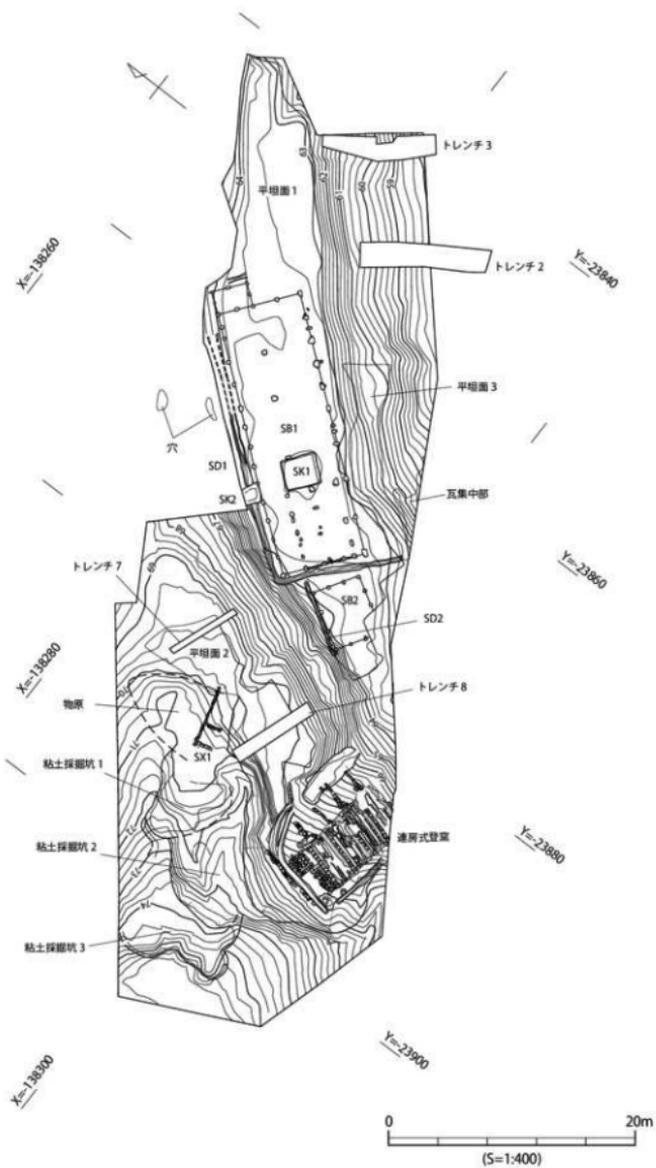
(1) 基本土層

本来の地山は黄色砂質土あるいは灰白色の岩盤であるが、登窯が構築された範囲は被熱により全面赤褐色に変色している。地山の上には、下から順に地山が流入した黄色砂質土、黒褐色土（表土）が堆積し、表土の一部で窯道具が集中的に出土する。登り窯で使用された窯道具や窯壁片が斜面を流下し、堆積したものである。

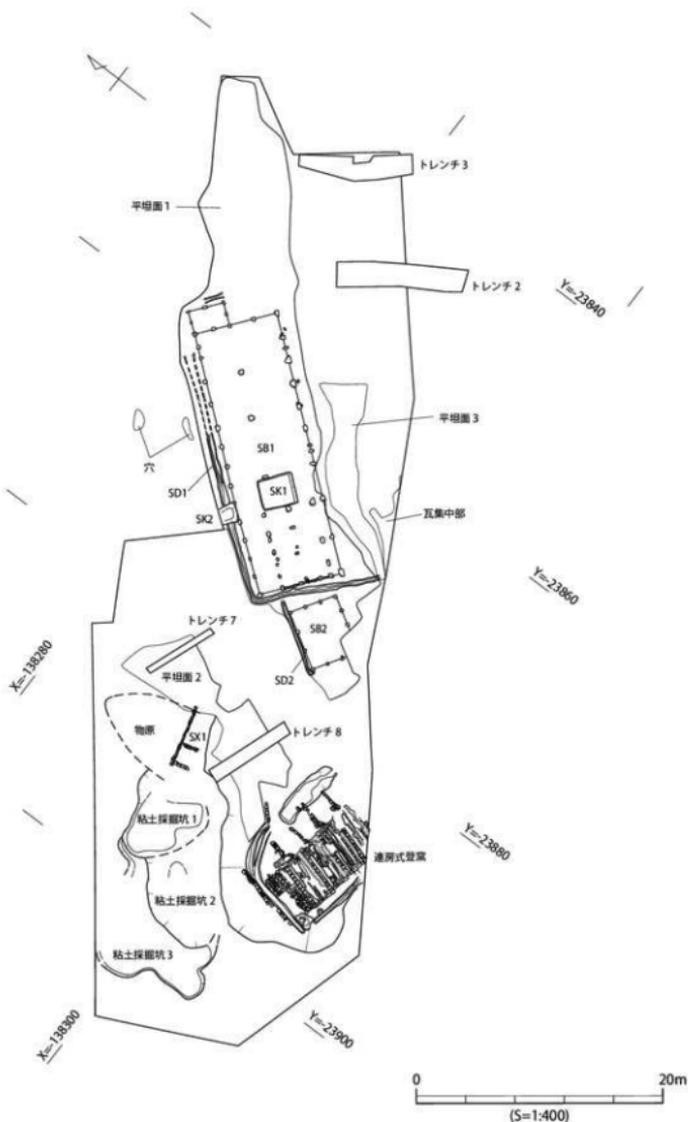
(2) 連房式登窯（第52～55図）

登り窯の焚き口部は調査区外へ東方向に延びるため、正確な焼成室数・規模は確認できないが、調査区内に残る窯壁の破片、「焚き庭」にあたる滓化部分等から、焼成室は5室以上と推定される。本報告では、確認できる最も下方の焼成室を第1室とし、上へ向かって第2室、第3室、第4室、第5室と数える。

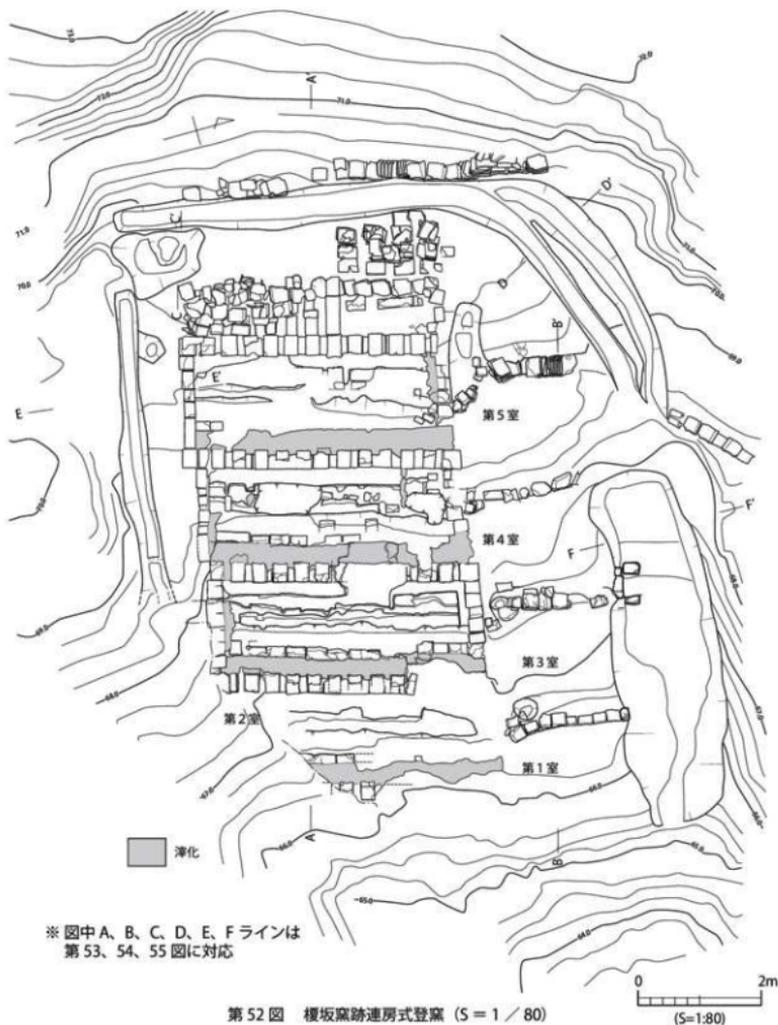
第1室の焚き庭は残存せず、焚き庭の前に立てかけられていたとみられるレンガが2個残るのみである。第2室は焚き庭が長さ1m強ほど残り、焚き庭前面のレンガも若干残る。第2室～第3室間の火格子の基部が、窯本体の左半分のみ残存する。一辺12cmの正方形に近い板状の耐火煉瓦を敷き並べた上に、7cm間隔においてブロック状のレンガを積む構造である。火格子部分に続く第3室焚き庭、焚き庭前面の煉瓦も残存する。第3室は、被熱硬化した地山面まで掘り下げを行ったところ、階段状となった。「トンバリ」と称する煉瓦を階段状に積むため、地山面を加工したもので、瓦窯特有の構造である。第4室は、火格子基部、焚き庭とも中央部を除いて比較的良好に残るが、中央部は流失している。焚き庭前壁の煉瓦は2個しか残らない。左側壁沿いに火溝相当部分の滓化した部分が認められる。焼成室床面は、本来第3室床面と同様に階段状に加工されていたとみられるが、階段の形状は痕跡程度にしか認められない。左側壁近くには「トンバリ」が5点、ほぼ原位置に残っていた。第5室は、煙道につながる最上段の焼成室で、火格子基部、焚き庭ともに左側壁から右側壁にいたるまで全面よく残る。床面は傾斜面となり、階段状の加工はほとんど確認できない。調査時に床面を認識できないまま掘り下げすぎたためと考えられる。焼成室は、瓦を敷き並べた湿気抜き施設の上に構築されている。窯壁の構築材よりやや大きい12cm×12cm×16cmの煉瓦を縦方向に12列並べ、煉瓦列間の空隙が煙道となる。煙道部分には残瓦を掛け渡して覆い、煉瓦の上を赤土で被覆する。被覆に使われた赤土は部分的にしか残っていない。現状で厚さ30cm前後であるが、被覆土の本来の厚さではないと思われる。



第50図 榎坂窯跡調査後地形測量図 (S=1/400)

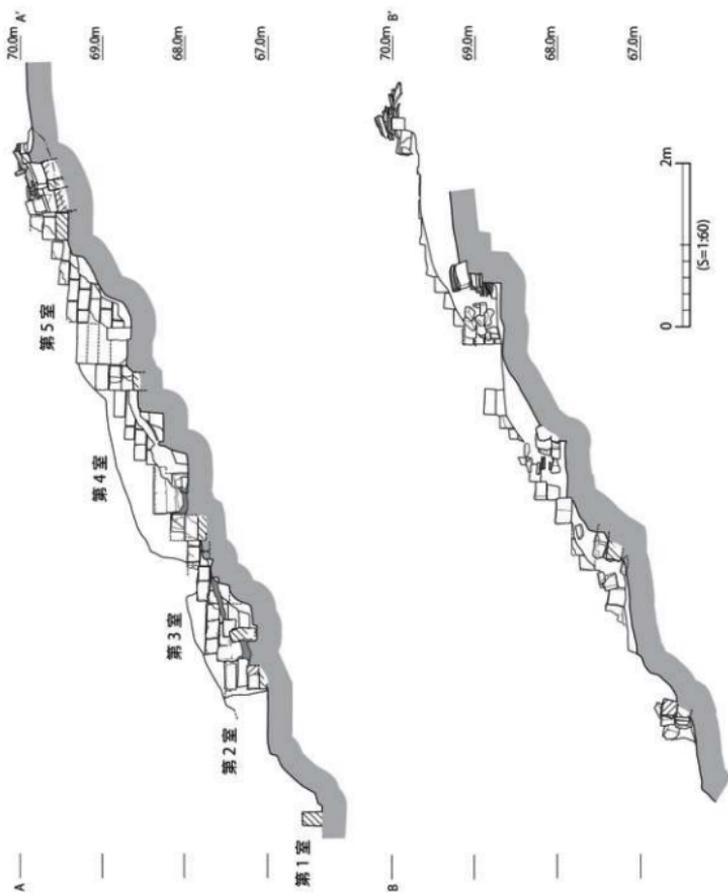


第51図 榎坂窯跡遺構配置図 (S=1/400)

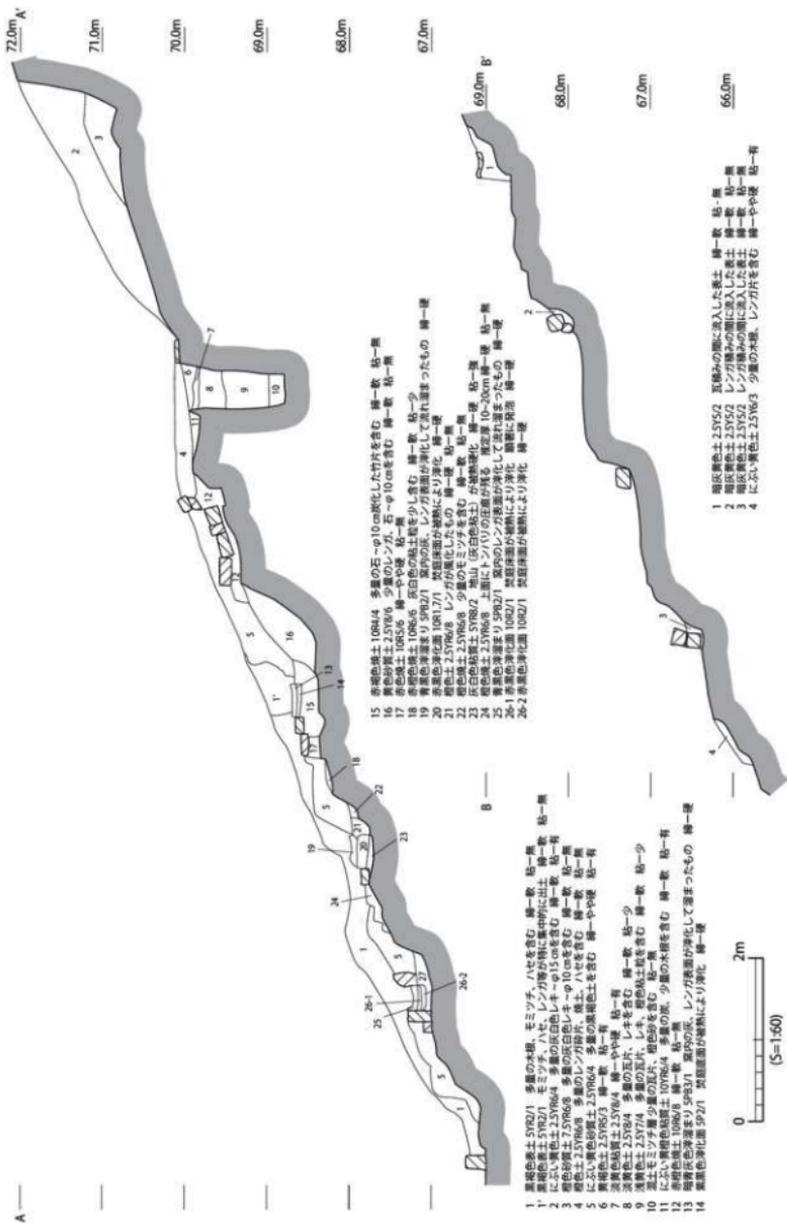


各焼成室の窯壁及び窯壁を構成するレンガはほとんど残らず、底部から2～3段分が原位置に残るのみである。窯元が移転する際に、移転先で再利用するため持ち去った可能性が推定される。

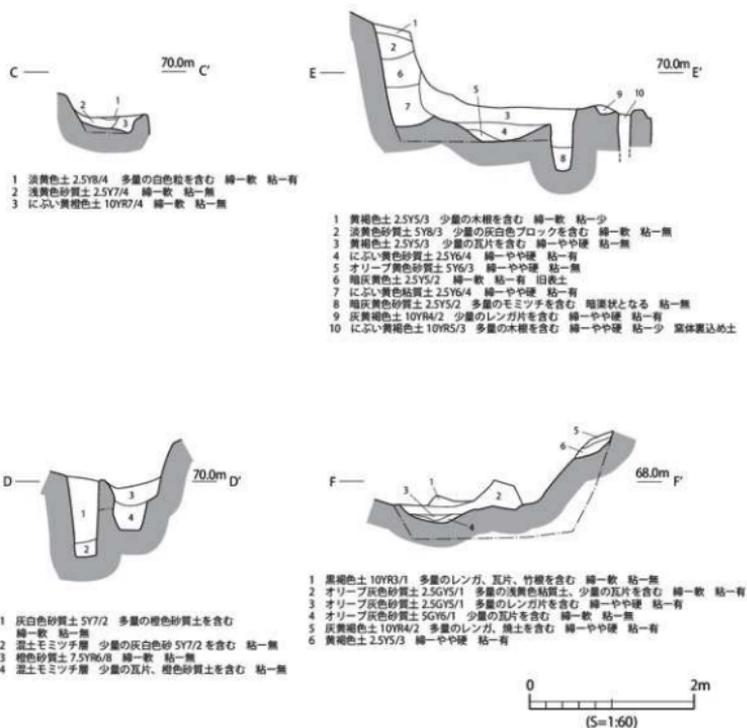
各焼成室の右側方に作業用テラスが付設されている。上段と下段の間はレンガを積んで土止めとしている。現状でレンガが2段分残るが、窯本体のレンガ同様持ち去られた可能性も否定できない。第1室付属のテラスは原形をとどめない。第2室付属のテラスは、90cm×40cmを測り、山側に設置された土止めのための煉瓦は、進入口付近でゆるくカーブする。右側壁近くに柱穴があり、



第53図 榎坂窯跡連房式登窯側面見通し図 (S = 1 / 60)



第54図 複板窯跡連房式登窯縦断面図 (S=1/60)



第55図 榎坂窯跡連房式登窯周辺断面図 (S = 1 / 60)

上屋を掘立柱で支える構造であったことが判明する。第3室、第4室のテラスにも土止めの煉瓦、柱穴が認められる。第5室付属のテラスは、右側壁付近を煉瓦で土止めし、排水溝寄りには瓦積みとする。登窯の上辺と、左側辺沿いに排水溝がめぐる。幅30cm、深さ約1mを測り、底部には30cmの厚さでモミツチを充填して土で被覆し、暗渠状としている。左側辺の排水溝はそのまま下方へ流れて調査区外に続き、上辺の排水溝は右下方へ流れ、途中で分岐して2本となる。切り合い関係により、上の溝から下の溝へ作り変えられたとみられ、後者にはモミツチが充填されていない。右側方では排水溝の掘り込みが不明瞭となる。この部分は、焼成室間をつなぐ通路を兼ねていた可能性がある。

(3) 連房式登窯周辺出土の土製品 (第56図)

1～11は土製品である。登窯の左側の一地点に、集中して置かれていたものである。1は、基部が残存し、先端は欠損するが、丸みを帯び始めておりほぼ原状に近い長さともみられる。心棒に粘土を巻き付けて成形した後心棒を引き抜く。内面には成形時の縦方向のしわがみられる。内面を横方向に削り、基部側を大きく拡げる。孔全体の先端は細く、基部は広く作られているが、成形後心

棒を引き抜いたり、木呂竹を挿入、あるいは引き抜く際に有利な形状となっている。2は、基部から先端まで完存し、全長43.5cmを測る。孔は先端径2.2cmに対して基部側が1cm広い。基部側は削りにより大きく開く形状である。3は先端部が残り、外面ナデ、基部内面を削る。4、5は孔内面に縦方向のしわが残る。5は全長40.2cmを測る。心棒に粘土を巻き付けたのち、心棒を引き抜いて成形する。孔内面には成形時の縦方向のしわが残る。基部内面は、削りにより径が大きく広がる。6は基部寄りの部分が残る。基部内面は削りにより径が広がる。1～6は削りにより基部内側が開く形に作るのが特徴である。7は孔内面に成形時のしわが残る。8は先端寄りの部分である。基部は欠損する。片面に煤が付着する。外面は指押さえ、ナデ調整される。9は基部である。心棒に粘土を巻き付けて成形後に心棒を引き抜く。孔内面は先端まで成形時のしわが残っており、他の個体のような削りは行われていない。10は土製品の基部である。内面には篋巻き状の痕跡、削り痕が残る。11は羽口の基部である。孔内面にしわが多数残る。端部を削る。1～11は軸葉をかけず、素焼きであること、全長45cm弱、径12cmという法量の共通性から、鍛冶輪の羽口と考えられる。基部が広がる形状は、俄国一氏が分類する「皿掘り」もしくは「蜜柑掘り」の加工に当たると考えられる⁽¹⁸⁾。付近の鍛冶屋の注文に応じて製作した可能性がある。

12は器種不明の土製品である。右端は欠損し、左端は幅が広がる。端部の面には刻み目があり、別材を継いだものと思われる。13は器種不明の土製品である。厚さ2cmの粘土板に穿孔され、孔の曲線部分が残存したものと思われる。実測図の上辺には、別材と接合するための刻み目が入る。

第4節 平坦面1、礎石建物群の調査

(1) 基本土層 (第57図)

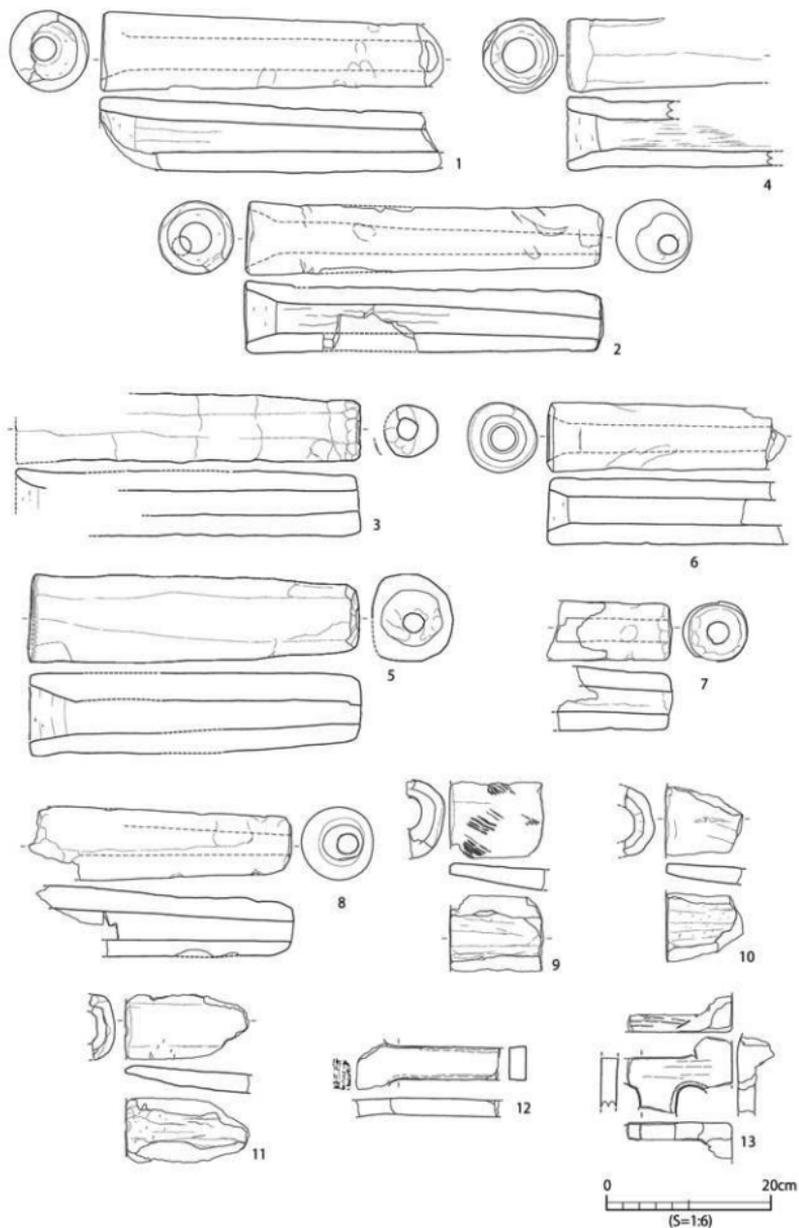
SB1地点での基本層序は第58図に示すC-Cラインで、下から岩盤層、暗灰黄色土、礫混じりにぶい黄色土と灰黄褐色土、にぶい黄褐色粘土、表土の順に堆積する。岩盤層直上の暗灰黄色土は旧表土である。後述する平坦面1を造成するに際して、この旧表土の上に斜面谷側ににぶい黄色土、灰黄褐色土を盛り土し、嵩上げしている。SB2地点での基本層序は第62図のとおりで、下から岩盤層、黄褐色土、明黄褐色土の順となる。黄褐色土が旧表土で、平坦面1を造成するに際して、旧表土の上に地山を削り出した明黄褐色土を盛って、嵩上げが行われている。

(2) 平坦面1、SB1・SD1・SK1 (第58～59図)

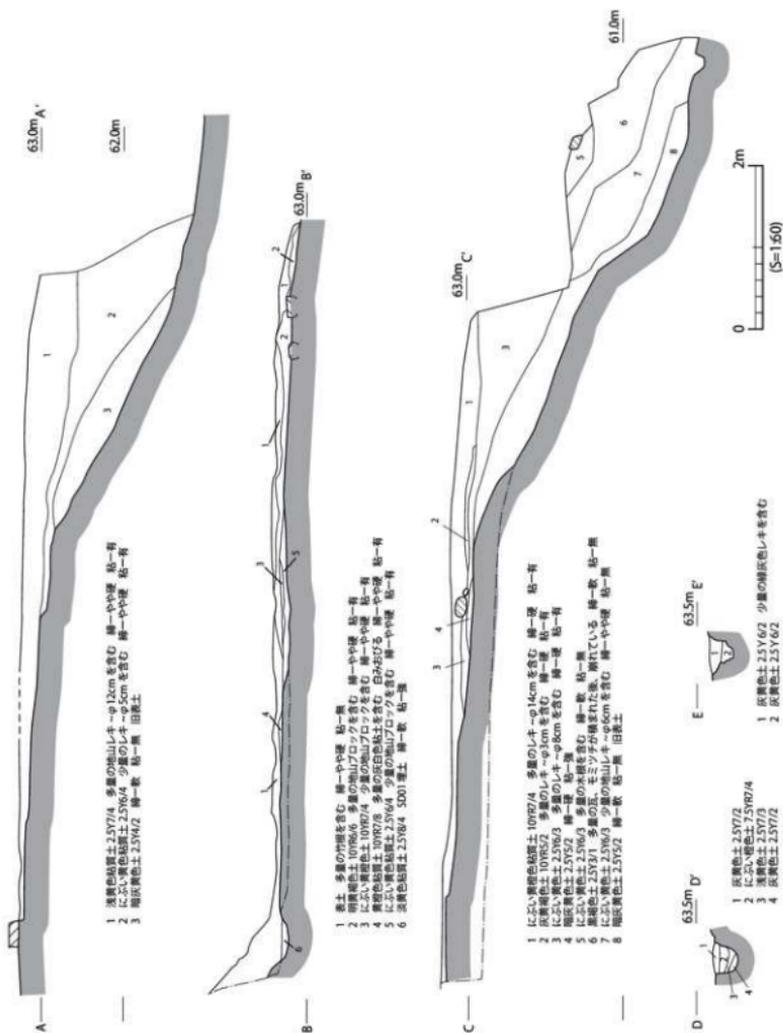
窯の北に接して、等高線と並行する全長52mにわたる平坦面を検出した(平坦面1とする)。調査開始の時点で、この平坦面の東辺は崩落が進み、地表面下が抉れてオーバーハングする状態であった。崩落する危険があったため、掘削の最初にこれらオーバーハングの部分の削り落とした。このため、調査終了時の平坦面の幅は、本来の幅より縮小している。

平坦面造成に際しては、山側斜面を切削し、切削で生じた土砂を谷側に盛って平坦面を造成している。(第57図Cセクション等)。平坦面は北端、南端で幅4m、SB1が建つ中央部で幅10mと広がっている。細長い尾根のかなりの部分が切削されているが、幅3m程度は尾根の原形が残る。尾根部分は調査区外であるが、北東斜面から南西斜面へ向かって径2mの穴を貫通させている。調査時にはほとんど埋没していた。窯跡との関連があるかは不明である。

平坦面上では大小2棟の礎石建物を検出した。北側の大規模な建物をSB1、南をSB2とする。



第56図 榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (S=1/6)



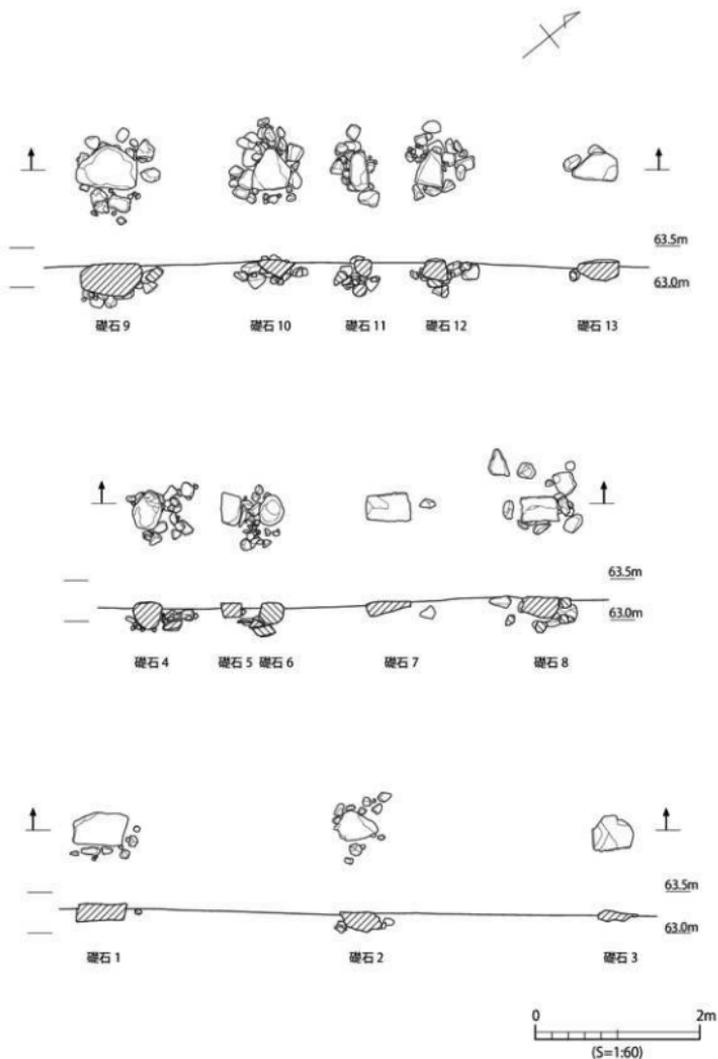
第57図 榎坂窯跡平坦面1土層図 (S=1/60)

SB1は南北21.9m、東西7m、桁行13間、梁行4間の規模で、北辺に張り出しがつく。SB1の中心からやや南に寄った床面には2.3m×2.1mの方形の土坑(SK1)があり、SK1を境に礎石の並びが変わる。SK1以北は広い空白部分の中に礎石が2個のみという配置であり、土坑の周辺を含めて土間であったと思われる。「礎石3」以南は中央部にも礎石が並んでいる。周縁部の礎石より小さく、これらは床を支えるための礎石とみられる。東辺の2列分は、他よりも礎石列の間隔が詰んでいることから、張り出し部であろう。4間×3間の床を持つ主屋から東に屋根、あるいは縁側が張り出す構造が想定される。SB1の外周には幅40～50cm、深さ14～30cmの排水溝(SD1)がめぐる。建物南西部から西辺、南辺にかけて溝の掘り込みが徐々に深くなり、建物の南辺を通過して東側斜面下方へ排水される構造となっている。SD1は建物北西部にも続いていると予想されたが、SB1西辺は急崖となっていて掘削すると崩落する危険があったため、一部にトレンチを設定して断面を確認するとどめた。西辺ではAセクションライン以北で2か所、およびSB1北西の張り出し部北側で1箇所、SD1の続きを確認した。

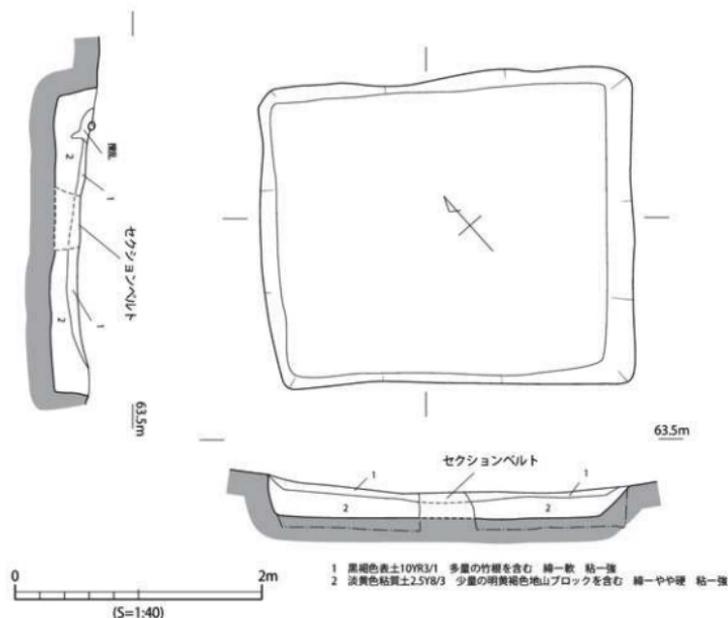
SK1はSB1南寄りで確認された、2.3m×2.1m、深さ20cmの方形の土坑である。底面には10～20cmの厚さで淡黄色の粘土が残っており、陶土を練る施設、通称「フネ」の基部と考えられる。SK2はSB1西辺の崖の下に位置する、1.5m×1m、深さ0.7mの土坑である。調査中は絶えず湧水が認められ、合わせて排水溝SD1につながっていることから、機能は水溜めと推測される。

(3) SB1・SD1・SK1 出土遺物 (第61図)

SB1と、SB1外周にめぐる排水溝SD1からの出土遺物である。1はSD1埋土から出土した鉢の口縁部である。端部を外へ引き出す。全体に灰軸がかかる。2は陶器の火鉢と思われる。粘土板や粘土紐を組み合わせて成形する。胴上部及び底部付近に粘土紐の突帯をめぐらせ、上の突帯には斜め方向の刻み目を、下の突帯には「×」状の刻み目を連続して施す。胴部と底部の継目、及び突帯基部には、材を接続するための刻み目を入れる。底部は3方向を半楕円形に削り出すことにより、3箇所の脚部を作り出す。底部内面を除き来待軸を施す。タガをめぐらせた桶を模した作りの火鉢と考えられる。用いられている粘土板は、遺跡内で出土している椀瓦の厚さとほぼ同じであること、造作が稚拙であることから、丸物の製作経験がない瓦職人が瓦製作の技法を応用して作った可能性がある。3は陶器の花器である。背面側に割り竹を模した現存高12.8cm(総高に近い)の円筒が立ち上がり、前面側に背の低い蓋付きの容器が2個並ぶ。1個体は蓋が失われ、もう1個体の蓋は約四分の三が残り、全面に来待軸をかける。蓋の上面には径1cmの円孔を穿つ。竹状の円筒部分の胴部には、竹の節を表した突帯を4条めぐらす。基部は、縦方向の条線を多数刻んで竹根を表現している。外面全体に鉄軸が厚くかかり、黒軸に近い発色、光沢をもつ。器面に凹凸があり、基部の条線が雑然と刻まれている等の特徴から、丸物容器の製作に習熟していない人、おそらく本遺跡で互作りにたずさわった瓦職人の手によるものか。底部外面に「江里製」の三文字を刻んでいる。この刻字は花器の製作者が「江里」であることを示している。大正後期～昭和前期にかけての益田市土町内で、「江里安太郎」氏が「石見実業株式会社」工場長として瓦窯を操業していたことが知られており⁽¹⁴⁾、榎坂窯跡の操業者はこの江里安太郎氏であったと推定される。4はSB1北西隅の礎石に接して、地面に置かれた状態で出土した、流紋岩製の石臼である。主溝間の角度を45度とした八分割で、主溝に平行する副溝を六本彫り、八分割六溝の構成である。



第59図 榎坂窯跡 SB1 礎石及び根石実測図 (S=1/60)



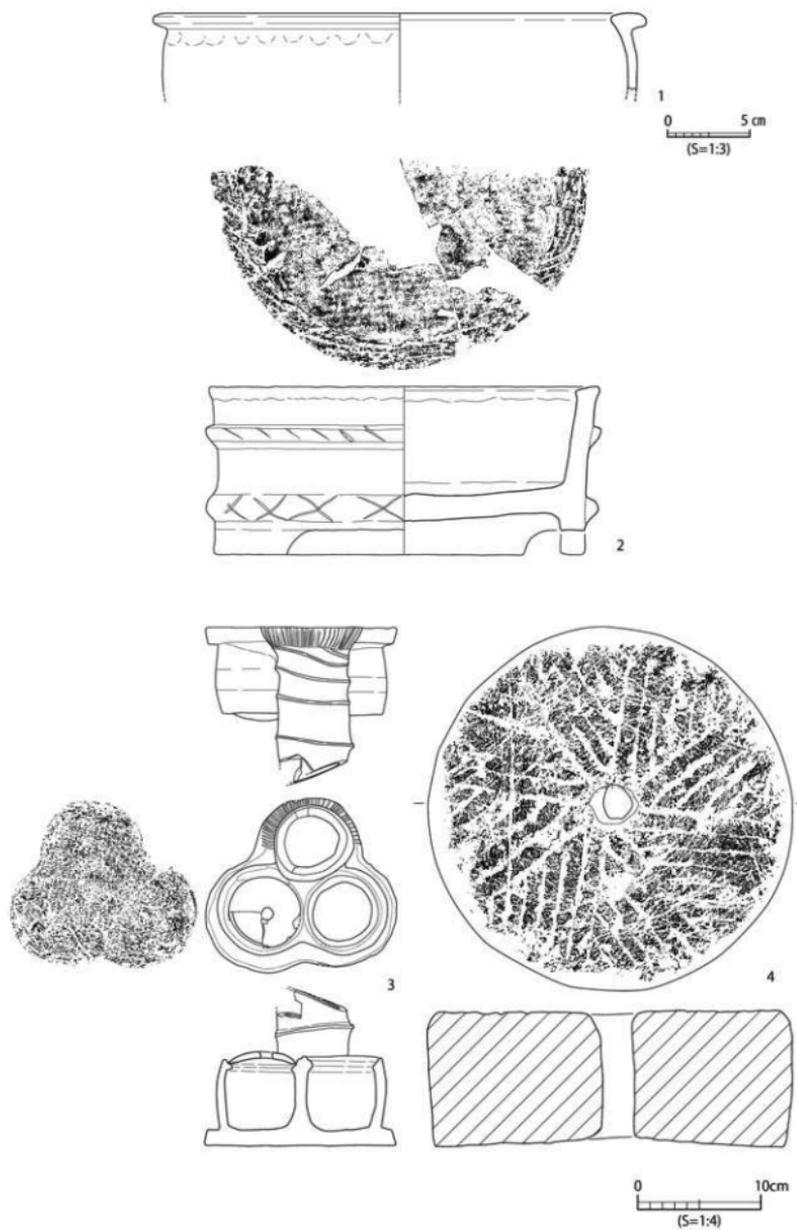
第60図 榎坂窯跡 SK1 実測図 (S=1/40)

(4) SB2・SD2 (第62図)

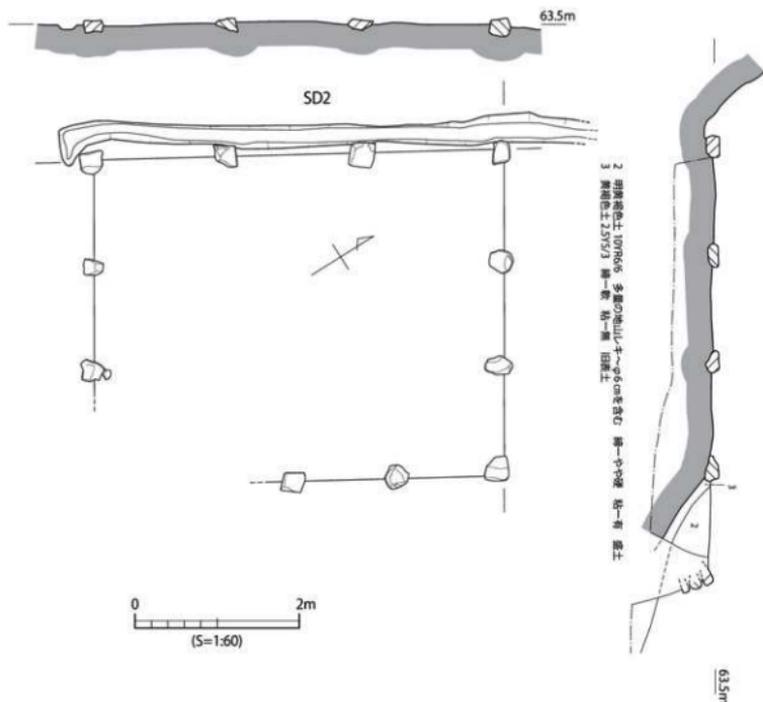
SB2は、SB1の南、登窯の北に位置し、軸方向はSB1の主軸よりもわずかに西に振れる。平坦面の縁辺が崩落したため、南隅の礎石1個が失われているが、南北5.0m×東西3.9m、3間×3間の規模の礎石建物である。礎石は外周部のみで、中央部にはない。建物西辺には幅20～30cm、深さ12cmの排水溝SD2が北へのびる。崖から流下する雨水を北へ向けて排水するための溝と考えられる。

(5) SB2・SD2 出土遺物 (第63図)

SB2から出土した遺物である。1は陶器の捏ね鉢である。口縁端部を外へ折り返して肥厚させる。内外面に灰釉を施す。産地は石見焼で、近代に属する。2は磁器の碗である。外面は型紙刷による花文を表す。3は線香立てである。高台に半月形の切り込みを入れて脚部を成形する。瓦と同程度の厚さの板を組み合わせて成形している点から、瓦職人が瓦製作の技法を応用して作った可能性がある。同様の線香立てが浜田市旭町後河内古墓群で出土している⁽²⁸⁾。4は五銭硬貨である。裏面に「大日本 大正九年」の文字が入る。



第 61 図 榎坂窯跡 SB1・SD1 出土遺物 (S=1 / 3・1 / 4)



第 62 図 榎坂窯跡 SB2・SD2 実測図 (S=1 / 60)

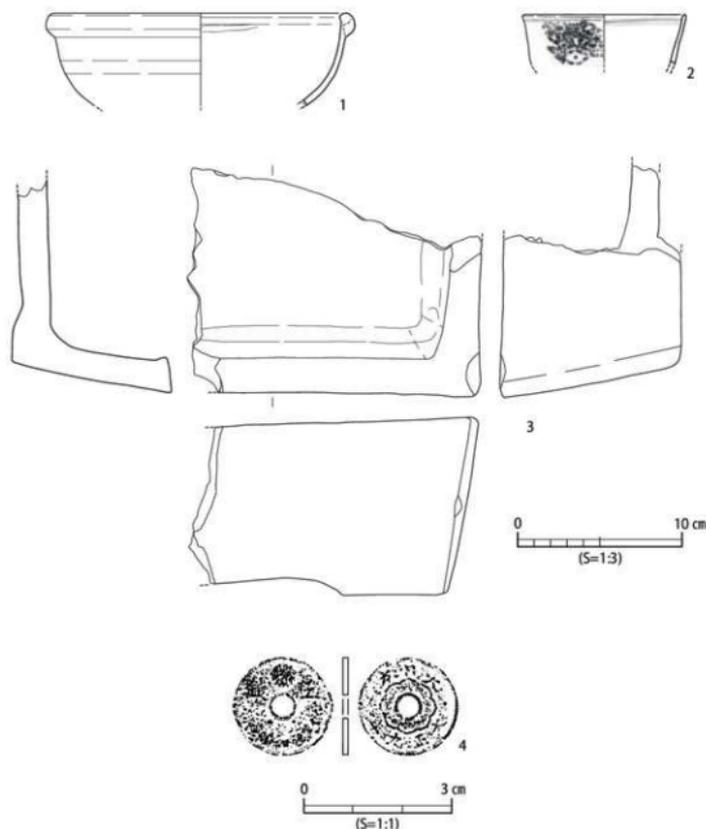
第 5 節 粘土採掘坑等の調査

(1) 基本土層

地山の上に黄色系統の砂が堆積し、5～10cmの非常に薄い層が重層する。C区一帯では瓦材料となる粘土の採掘がおこなわれ、排土を捨てながら掘り進んだ結果、大量の土砂が堆積している。横断セクション（第66図）からは26～28層、12～25層、1～11層の3つの大きな塊が認められる。C区中心部では砂の堆積が顕著で、水の流れがあったと考えられることから、粘土の水蔵・精製施設として使われていた時期があったと考えられる。

(2) 粘土採掘坑1～3（第64～66図）

遺跡が所在する尾根の頂部は粘土採掘坑として利用されていた。試掘調査の時点で、尾根の稜線に沿う方向に、幅2～3m、全長10m強の細長い窪みが確認された。当初はこのくぼみが窯跡であると予想したが、本調査で設定したトレンチのセクションから、粘土採掘坑と判明した。掘削土量が膨大となることから、全面掘削せず、複数のトレンチによる土層観察等から、採掘痕跡



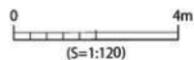
第63図 榎坂窯跡 S2・SD2 出土遺物 (S=1/3・1/1)

の範囲を推定した。

粘土採掘坑はおおまかに三段階の痕跡が確認できる。最も東に位置する粘土採掘坑1は、下端で約5m×6mの規模である。上端は輪郭を明示できない部分が多い。このうち東辺側が不明瞭なのは、後述する物原、SX1が形成または構築された際に破壊されたため、輪郭が不明瞭であると考えられる。粘土採掘坑2は粘土採掘坑1の南西に接する。残存部分の上端で、約6.5m×4.5mの規模と推定されるが、南東辺の形状が不明瞭である。この方向には連房式登窯があり、窯の構築に際しての整地のために窯の上方約3mの範囲が切削されており、このときの整地作業で粘土採掘坑の南東辺が破壊されたと考えられる。粘土採掘坑3は調査区の最西端に位置する。粘土採掘坑2の西端から4～5m西へ掘り進んだ形である。北は調査区外まで伸びるようで、正確な南北幅は不明であるが11m以上とみられる。相互の切り合い関係は確認できなかったが、順次尾根の上方向



※ 図中 A、B、C ラインは第 65、66、68 図に対応



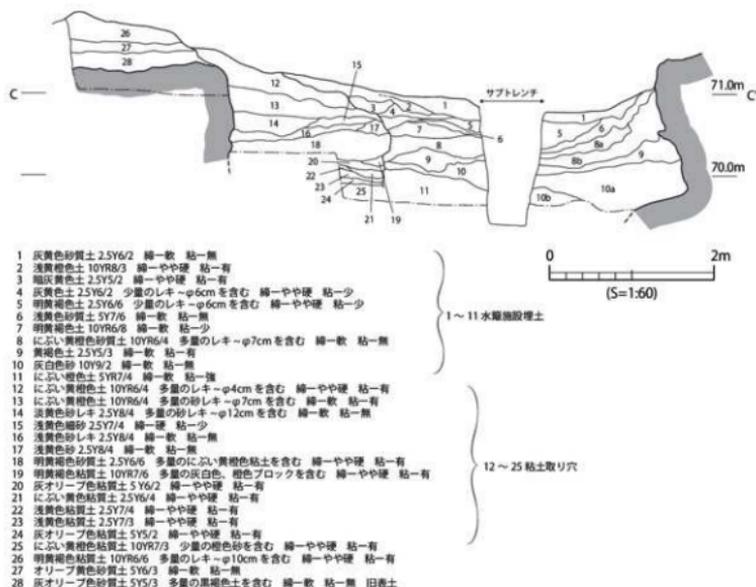
第 64 図 榎坂窯跡粘土採掘坑跡・SX1・物原実測図 (S=1/120)



第65図 榎坂窯跡粘土探掘坑跡縦断セクション図 (S=1/60)

へ掘り進み、下方にできた窪みに排土を捨てていくと考えられるので、粘土探掘坑1→粘土探掘坑2→粘土探掘坑3の順に、東から西へ、階段状に上がっていくプロセスをとった可能性が高い。

以上3段階の粘土探掘坑はともかくも判別できたが、面的に掘り下げられなかった部分が多く、また面的に掘り下げた部分でも階段状となっている箇所が多数認められたことから、上記の3段階はさらに細かく分かれるものと思われる。



第66図 榎坂跡粘土採掘坑跡横断セクション図 (S=1 / 60)

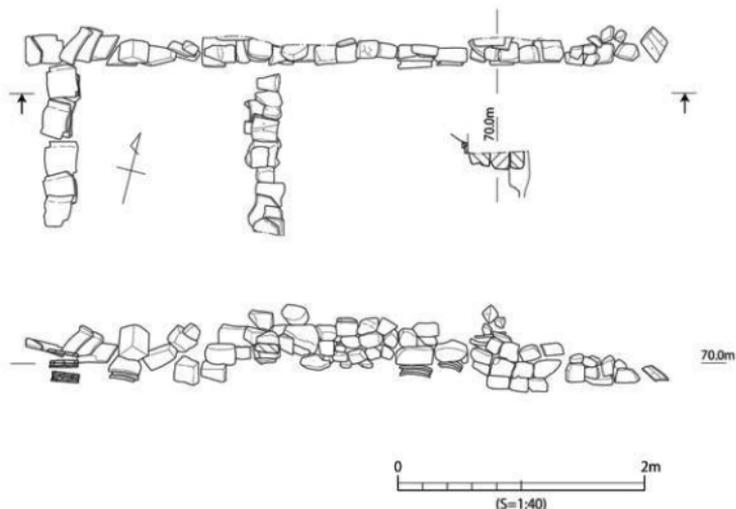
第6節 その他の遺構の調査

(1) SX1 (第67図)

SX1は粘土採掘坑1の東、後述する物原の南に接する位置で確認された。煉瓦を2~3段積み上げた壁を東西方向5mにわたって構築し、この壁に直交するように7~8段の瓦、あるいは煉瓦を積み上げて仕切り状のものを作る。粘土採掘坑が埋没した堆積層の上から構築されており、採掘跡埋没後に構築されたことが明らかである。壁に使用されている煉瓦は、内側の面が被熱・滓化した面であったり、破面であったりとさまざまである。窯で使い終わった煉瓦を再利用して、ランダムに積み上げ構築したと考えられる。北は物原に接していることから、物原の廃棄物が南側へ流れ込むのを止める機能も含まれていたと考えられるが、全体としてどのような機能を有していた遺構であるかは不明である。

(2) 物原 (第68図)

物原は粘土採掘坑1の東に接する位置で確認された。輪郭を明示できなかったが、セクションベルトの窠道具堆積状況から、南北6m、東西8mの規模と推定される。物原の西端はSX1の西端と一致することから、物原の形成時期とSX1の構築時期は近いと推測される。また、物原の南辺はSX1の壁で切られる形になっており、物原が先行、SX1が後行する関係と推定される。設定したセクションベルトでは、粘土採掘坑の底とみられる窪みにモミツチが流入する様子が観察される



第67図 榎坂窯跡 5X1 実測図 (S=1 / 40)

ことから、採掘坑形成後、かつ埋設する前に物原が形成されたと考えられる。

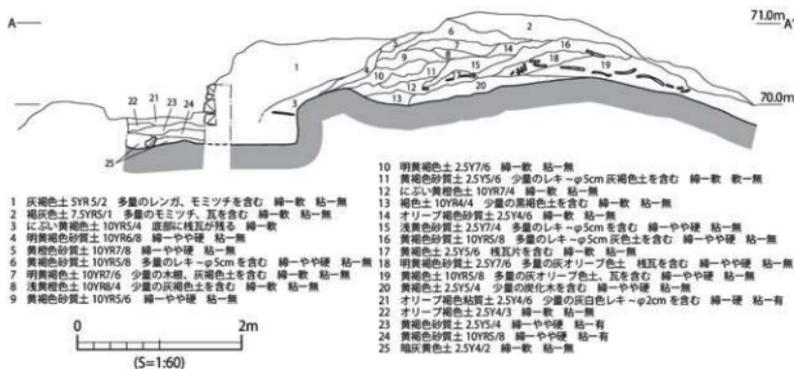
(3) 平坦面 2 (第 69 図)

連房式登窯の上端に高さを合わせて造成された平坦面である。平坦面西側の崖面には旧表土層と、その上層に粘土採掘にともなう排土とみられる土が堆積していた。平坦面 2 は、これらの堆積土を切って造成されていること、また連房式登窯の造成と同時期と考えられることから、粘土採掘坑の形成以後に造成されたと推定される。トレンチ 7、トレンチ 8 の土層では、尾根側を削平するだけでなく、谷側に土を盛って平坦面を造成されている。平坦面肩部には 8～10 枚前後の瓦を積んで列状に並べて、崩落を防いでいる。

(4) 調査区外の土層 (第 70・71 図)

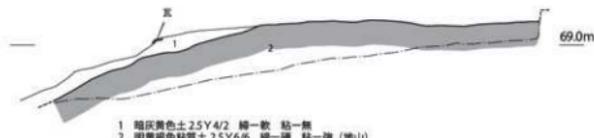
平坦面 1 下方はやや急な斜面が続く。斜面の各所で瓦、窯道具が出土したが、散発的で、範囲を明示できる状態ではなかった。

トレンチ 2 では道路跡、および旧電電公社のコンクリート製標柱を確認した。標柱には各面に「電話線」「昭 35.7」「1.0M」「L28S」等の文字がそれぞれ彫られており、当時の路面から 1m 下に電話線を埋設したことを表示している。この道は近世山陰道を踏襲した道で、北の延長部分は平成 28 年度の近世山陰道跡(馬橋地区)の調査で明らかになっている。改修を重ねながら昭和 58 年の水害まで使われ、水害で大規模な崩落が起こったことにより現道へ移った。改修の際に電線を埋設したことや、現道よりもかなり高い位置を通っていることは、住民からの聞き取り結果と符合す

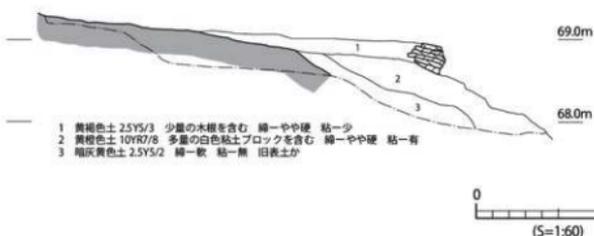


第 68 図 榎坂窯跡物原断面図 (S=1 / 60)

トレンチ 7



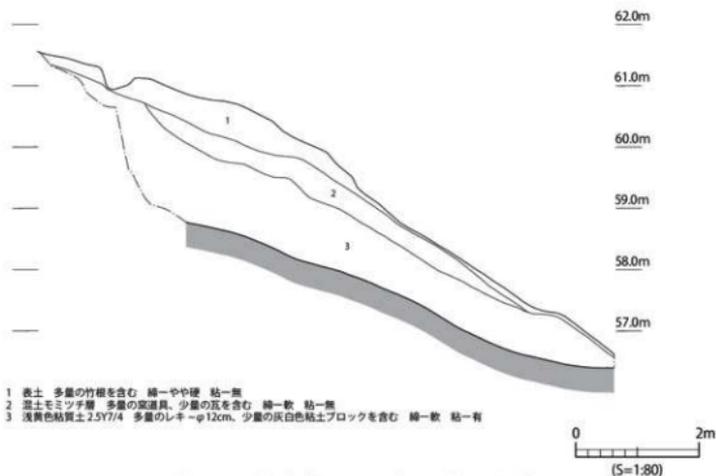
トレンチ 8



第 69 図 榎坂窯跡トレンチ 7・8 土層図 (S=1 / 60)



第70図 榎坂窯跡トレンチ2土層図 (S=1/80)



第71図 榎坂窯跡トレンチ3土層図 (S=1/80)

る。

SB1の下方に幅2.5m、長さ16.5mの小規模な平坦面が造成されている(平坦面3)。等高線の方向に沿って湾曲する。北端付近は谷側に石垣を構築して土止めを施している。

平坦面3の下部には、物原と別に瓦が集中する箇所がある。不要な瓦を単に集積したものか、あるいは上部の平坦面の崩落を防ぐために積まれたものかは不明である。

第7節 出土遺物

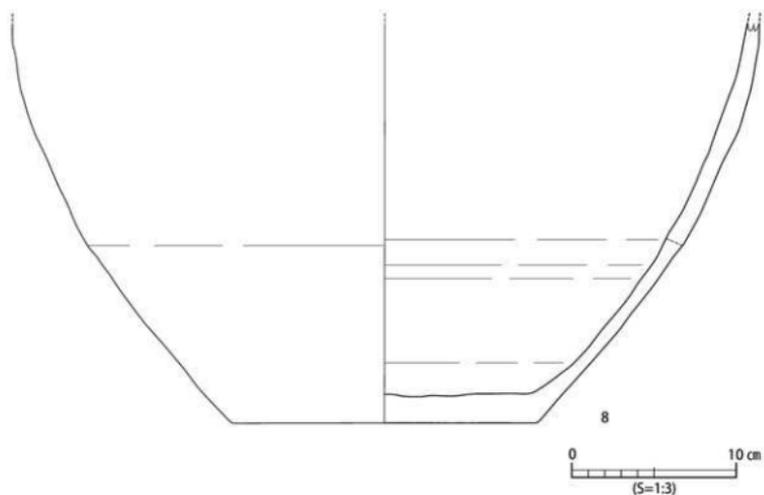
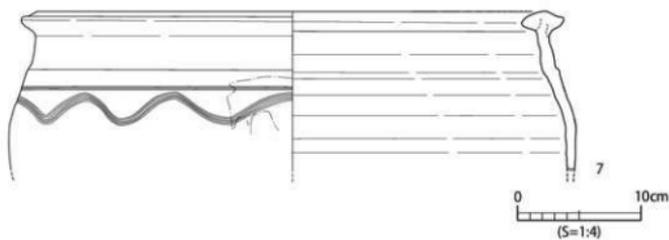
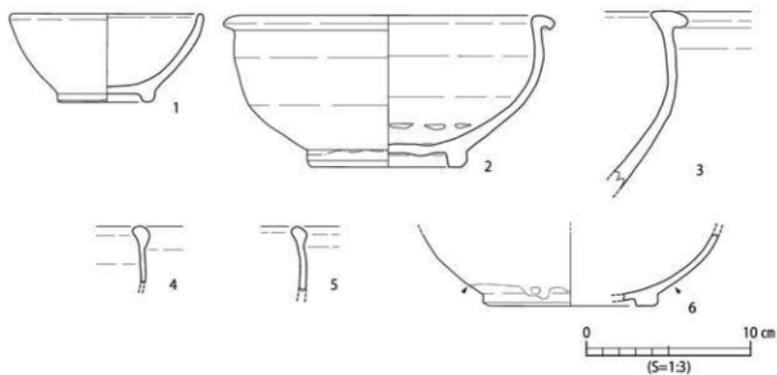
(1) 陶器：[第72～73図]

第72図1は碗である。口縁部は少し内湾する。外面に灰釉を施す。2は陶器の鉢である。口縁部を外へ折り返す。削り出しにより高台を成形する。見込みには目跡が8箇所残る。脚付きの窯道具の先端が熔着したものである。3は陶器の鉢である。口縁部を外に折り返し肥厚させる。内外面に灰釉をかける。4は陶器の鉢の口縁部である。端部を外に折り返し肥厚させる。内外面に灰釉を施す。5は陶器の鉢の口縁部である。端部を肥厚させる。6は陶器の鉢の底部である。削り出しにより幅の広い高台を成形する。底部は無軸。7は陶器の甕である。紐作りにより成形し、口縁部は内側に粘土帯を継ぎ足して肥厚させる。肩部には平行沈線及び櫛描きによる波状文を描く。粘土紐の継ぎ目ではわずかに段差が生じている。内外面に来待軸をかける。8は甕の胴下部～底部である。内面には現存部分に7箇所の目跡が残る。底部外面を除き来待軸を施す。

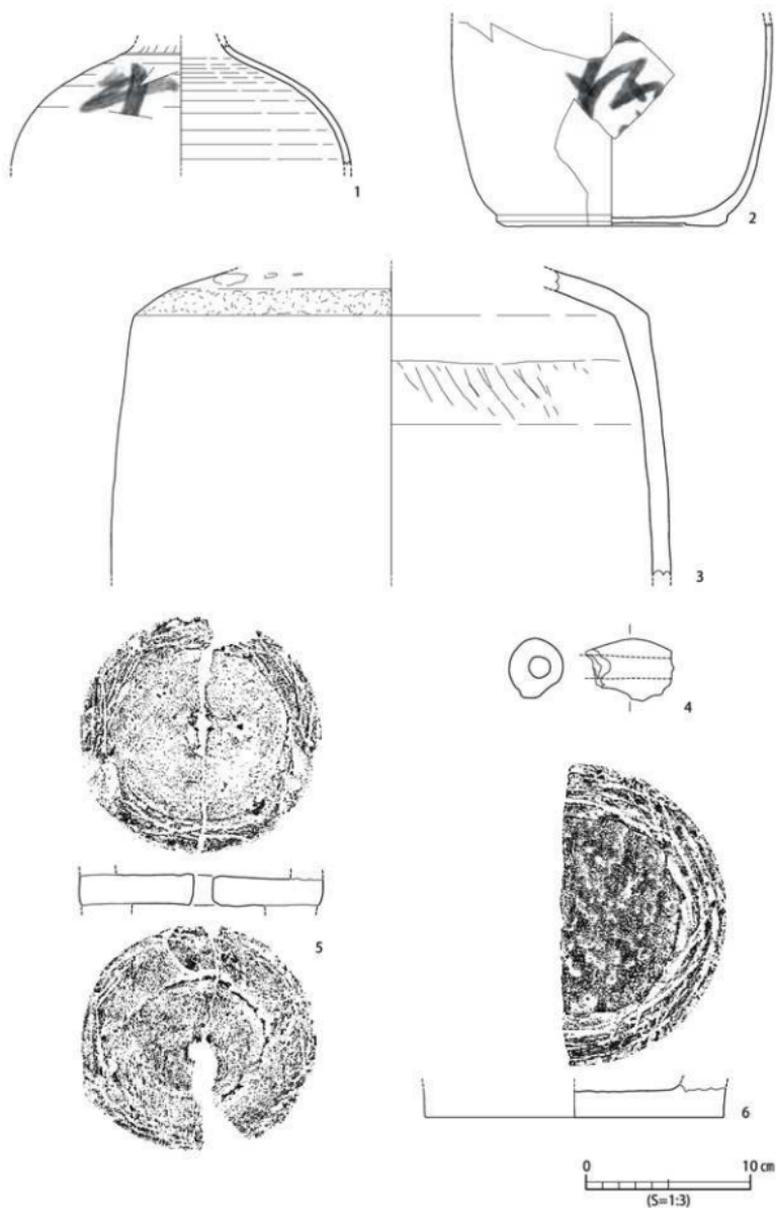
第73図1～2は徳利である。1は肩部から頸部である。外面は灰釉を施し、上から鉄軸を用いて「牛」の崩し字を記す。2は底部を削り出して幅広の浅い高台を成形する。胴部中央には鉄軸を用いた「場」の字が記される。3は陶器の硫酸瓶の肩部から胴上部である。肩部は発泡が顕著で微細な凹凸がある。外面に鉄軸を施す。4は陶器の鉢である。上面から下面まで、径1.4cmの孔を貫通させる。外面には来待軸を施す。5は器種不明の円板状の陶器である。外側面はナデ調整されるが、上面と下面は調整が行われていない。下面側の外周部及び上面側の外周部に、別材を接続した痕が残る。中央に径1.2cmの孔が貫通する特徴から、植木鉢の可能性も考えられる。6は器種不明の円板状の陶器である。上面の外周部には胴部を接続する際の刻み目が残る。内面は来待軸を施す。底部外面に見られる来待軸は部分的かつ不規則で、意図的に施軸されたのではないと思われる。

(2) 磁器 [第74～75図]

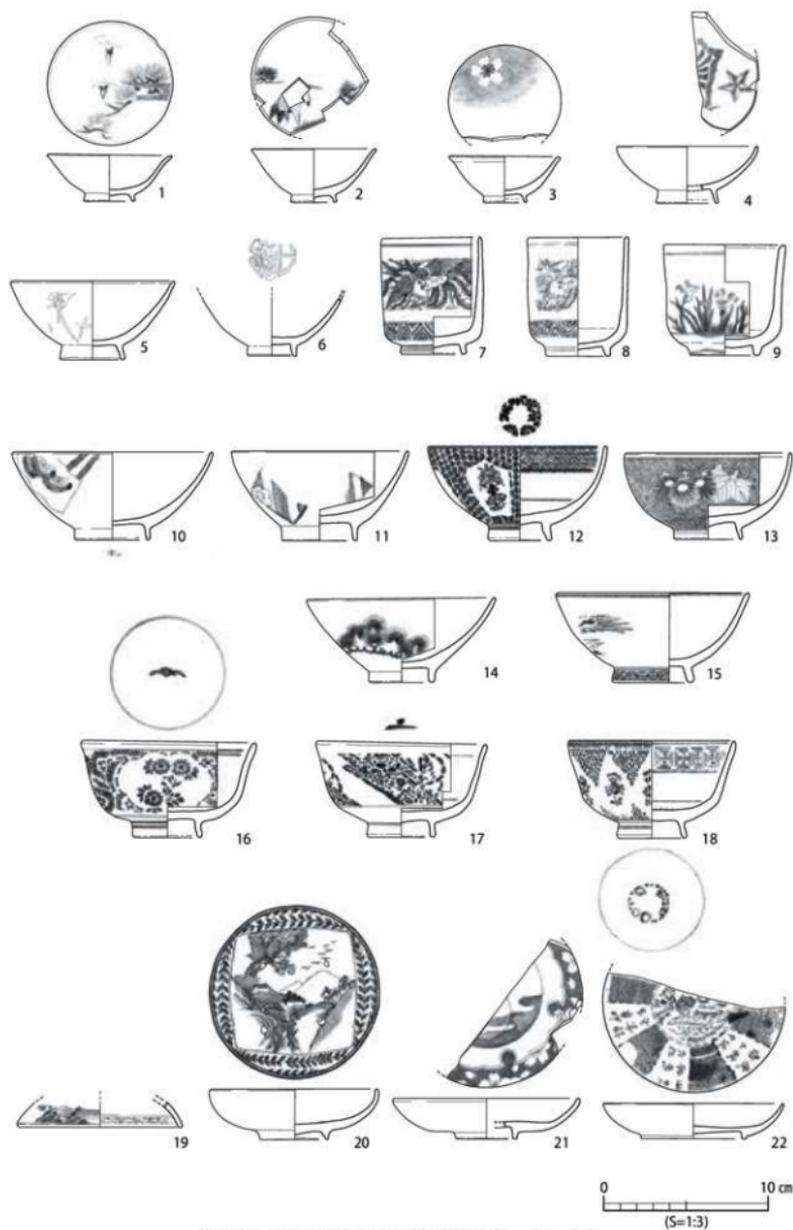
第74図1は端反形の酒杯である。見込みに上絵付で鶴松文を描く。松の葉を緑、枝を黒灰色で、鶴は脚部を黒灰色、胴体を白、頭部を赤で表す。松にかかる横長の雲は金粉を用いる。産地は瀬戸多治見か。2は端反形の酒杯である。見込みには鶴松文を上絵付で描く。松の葉を緑、実を赤、鶴を白と黒灰色で表す。3は端反形の酒杯である。胴部から口縁部にかけてコバルトを吹き付けて吹墨状とし、型紙により桜花の形を白く残す。その上から、花の中央を薄赤色で描く。4は平形の酒杯である。見込みに連隊旗を描き、文様を金粉で、旗外周の房を黒灰色で描く。連隊旗の横には五芒星を描くが、絵の具の剥落のためほとんど見えない。兵隊盃である。5は飯碗である。外面の上絵付の文様は剥落が著しくほとんど肉眼で見えないが、笹文の可能性はある。産地は有田である。6は瀬戸・多治見産の平形の酒杯である。7、8は筒丸碗である。銅版刷により、胴中央部に鳳凰文、下部に連続鋸歯文を表す。同一の図柄で、7は表面の風化が進行している。9は筒丸碗である。



第72図 榎坂窯跡出土遺物 (1) 陶器その1 (S=1 / 3・1 / 4)



第73図 榎坂窯跡出土遺物 (2) 陶器その2 (S=1/3)



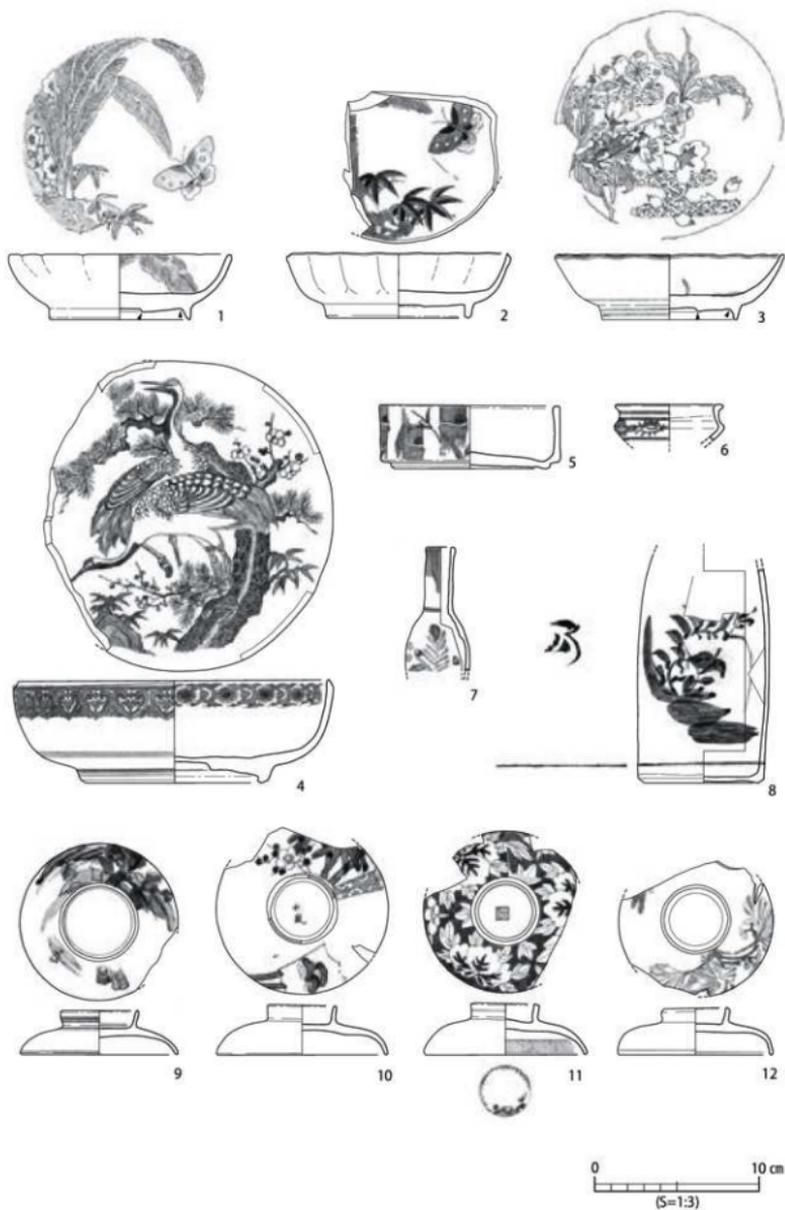
第74図 榎坂窯跡出土遺物 (3) 磁器その1 (S=1/3)

化学コバルトを用いた染付で草花文を描く。花の部分に銅緑釉を用いる。10は飯碗である。肩に松文及び巻物に梅文を描く。銅版刷に加え、一部を染付で描く。高台内面には「風」字が記される。他の出土遺物から、本来「松風」と記されていた文字の2文字目が残存したものである。11は飯碗である。化学コバルトを用いた染付で、四角文の中に、縦縞と花文を描く。産地は瀬戸・多治見である。12は丸形碗である。化学コバルトを用いた型紙刷により、見込みには花文を、口縁部内面には青海波を表す。胴部外面には窓文6箇所の中に草花文を表す。13は丸形碗である。胴部外面には四方禪文の埋め詰めの中に五三の桐文、菊花文を銅版刷で表す。14は飯碗である。胴部は高台基部から外方へ直線的に立ち上がる。胴部外面には銅版刷により松文を表す。窯元を表す楕円形の印の中には「青竹」あるいは「青草」の字があり、印の隣に「松風」のサインを伴う。産地は肥前有田である。15は飯碗である。胴部外面には鳳凰文を銅版刷で刷り出す。羽の部分のみ残存する。高台外面には銅版刷の四方禪文を連続させる。16は端反形の碗である。胴部外面には、化学コバルトを用いた型紙刷による窓文、窓の中に花文を表す。17は端反形の碗である。胴部外面には型紙刷による幾何学文を表す。18は端反形の碗である。口縁部内面に雷文、見込みに花文、外面に花文を、いずれも型紙刷で表す。

第74図19は碗蓋である。染付により草花文を描く。20は丸形皿である。口縁部は内湾して立ち上がる。内面中央には窓絵山水文、外周には二列の葉文を銅版刷で表す。山水文には樹木、水車、家屋、山、雁など多くのモチーフが盛り込まれる。21は丸形皿である。銅版刷により、外周部に板文を表す。22は丸形皿である。型紙刷により、内面中央には家屋のある農村風景を表す。外周部は区画された6箇所の窓の中に平家物語からの引用文を記す。「和章馬 瓢乗舟」「□□花 卉落水」「賞賦仄 陽三平」の字が読み取れる。

第75図1は輪花皿である。型打ちにより口縁がわずかに波打つ。化学コバルトを用いた印判手で、蝶文、笹文、芭蕉文を表す。高台部は蛇ノ目凹形高台となっており、少量の砂が付着する。チャツなど窯道具の上面に塗布された砂が付着したものであろう。産地は有田で、年代は明治期である。2は輪花皿である。内面文様の意匠は1と同じで、蝶のスタンプの位置、笹葉の陰影のみ異なる。高台部は蛇ノ目凹形高台である。産地は有田で、年代は明治期である。3は型打ちにより口縁をわずかに波打たせる。底部は蛇ノ目凹形高台を有する。見込みには草花文が描かれ、青海波を充填した雲文がかかる。化学コバルトを用いた印判手で、おそらくは銅版刷による。4は丸形の鉢である。高台部は蛇ノ目凹形高台で、軸剥ぎ部に環状の窯道具の痕跡が残る。見込みには銅版刷による松竹梅文、鶴文が表される。口縁部の内面に花文、外面に幾何学文が連続する。産地は有田である。

第75図5は段重である。外面には銅版刷により竹文を表す。6は鼎形香炉である。胴部中ほどで屈曲し、強い稜がつく。口縁端部は外へ折る。外面は上絵付により唐花文、及び蛸唐草崩しのような文様を朱色で描く。花卉部分には青と緑の絵具を用いる。産地は有田である。7は御神徳利である。胴部には上絵付により若松文が描かれ、花を赤、茎を緑で表す。緑の顔料は風化のためほとんど剥落している。産地は有田である。7を含め、上手の酒器が少数出土していることから、建物内に神棚を備え付けていた可能性がある。6も神棚での祭祀に用いられた可能性がある。8は燗徳利である。外面には化学コバルトを用いた染付により秋草文が描かれる。9は丸形碗の蓋である。化学コバルトを用いた染付により家屋、樹木、雲、舟を含む山水文を描く。須員の色彩に模しているが、化学コバルト彩である。10は丸形碗の蓋である。銅版刷による肩に松文、巻物に竹梅文が



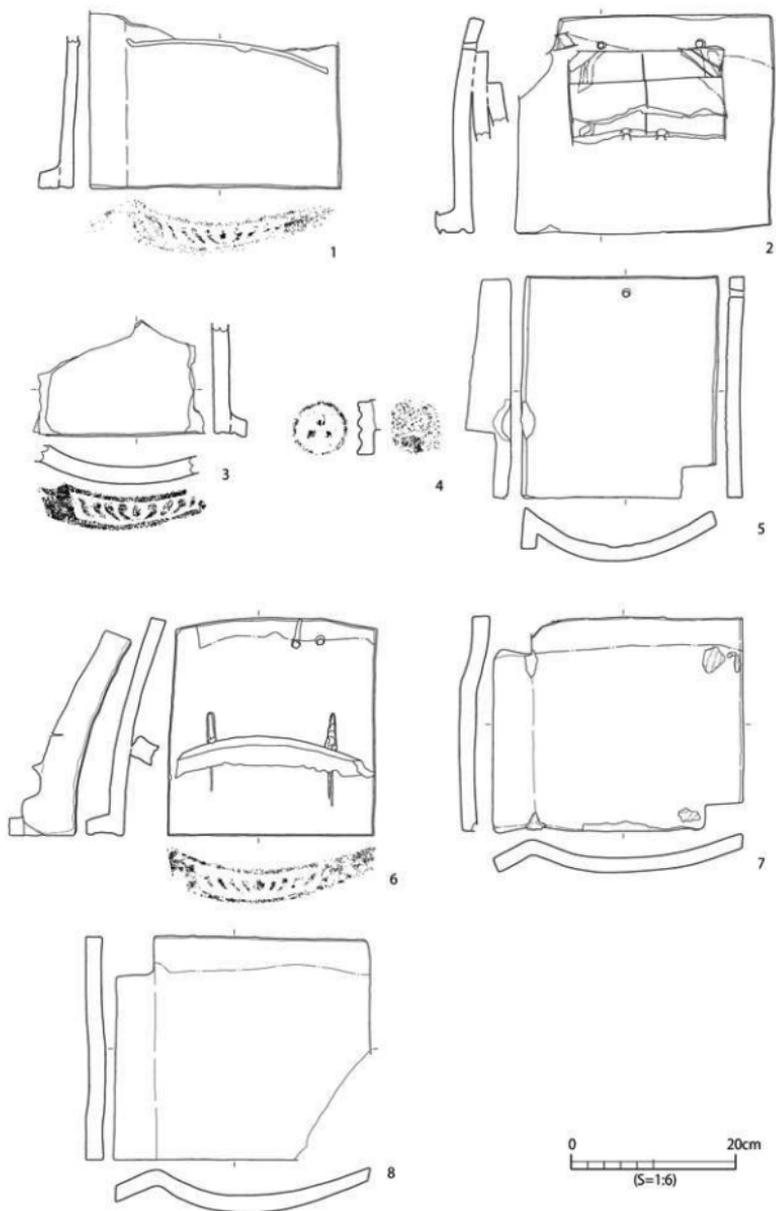
第75図 榎坂窯跡出土遺物 (4) 磁器その2 (S=1/3)

表される。化学コバルトを主体に、梅花の中央には正円子を併用し、淡赤色の色彩を出す。つまみ内には「松風」の銘文が入る。11は丸形碗の蓋である。外面は青地に桐文、口縁部内面は紗綾杉文をめぐらせ、中央部は崩した環状松竹梅文を表す。つまみ中央にある方形の印字は「岐」で、産地は多治見である。12は丸形碗の蓋である。蜻蛉文、秋草文を銅版刷により表す。花卉のみ銅緑釉を用いて濃緑色を表し、他は化学コバルトによる。

(3) 瓦類 [第76図～第77図]

第76図1は軒棧瓦である。粘土板の頭側下部に頸状に粘土を貼り継いで瓦当部を成形したもので、貼り継いだ箇所段差が生じている。凸面頭側に沈線が残るが、あるいは粘土を貼り継ぎ際の割り付け線か。凹面には重ね焼きした瓦の熔着痕跡が残る。瓦当文様は唐草崩しで、宝珠形の中心飾りの左右に各4葉の唐草が広がる。左右の第1葉は中心飾りの下を通り一続きになっている。2は軒棧瓦である。凹面には、分割線の入った熨斗瓦2枚が熔着する。軒棧瓦を重ね焼きする場合瓦の間に広い空隙が生じるため、この空間を利用して熨斗瓦を焼成したものである。瓦当文様は唐草崩しで、三葉形の中心飾りの左右に各4葉の唐草が広がる。外側の第3葉、第4葉は先端が割れて二股となる。3は軒棧瓦である。瓦当文様は唐草崩しで、宝珠形の中心飾りの左右に各4葉の唐草が広がる。左右の第1葉は中心飾りの下を通して連結している。瓦当面及び凹面に暗赤褐色の釉がかかる。4は軒棧瓦のうち、瓦当面左端の小丸部分である。瓦当文様は三巴文である。遺跡内で確認された小丸はこの1点のみであり、小丸を持つタイプの軒棧瓦をほとんど生産しなかったとみられる。5は、屋根の左端の列に使われる左袖瓦で、左側縁には細長い台形の袖板がつく。6は軒袖瓦である。凹面には、重ね焼きされた個体の瓦当部、及び窯道具のハセ2点が溶着する。左側縁には挟りの入った袖板がつく。瓦当文様は唐草崩しで、三葉形の中心飾りの左右に各4葉の唐草が広がる。外側の第3葉、第4葉の先端は割れて二股状になる。7は棧瓦である。頭側の2箇所、尻側1箇所に窯道具の熔着痕が残る。長さ26.4cm、幅30.5cm、幅2.1cmを測る。8は棧瓦である。凹面側の尻の部分を除き暗赤褐色の釉がかかる。

第77図1は棧瓦である。直立した状態で窯詰された棧瓦のうち、5枚が将棋倒しとなった状態のまま熔着したものである。各瓦の間には窯道具のハセをはさむ。最上段の瓦の尻側にモミツチの熔着痕が残る。現状の1、2枚目間に挿入されたハセはキノコ形の頭部をもたないタイプ、2枚目以下に使われているハセはキノコ形の頭部がつくタイプである。図左側のハセはいずれも頭部が欠損している。瓦が将棋倒しになった時、上段のモミツチに溶着してモミツチごと飛んだとみられる。2、3は軒丸瓦である。瓦当文様は連珠三巴文である。2は筒部凸面に重ね焼きされた丸瓦の側縁の痕跡が残る。筒部の側縁は面取りされる。棟の先端等に使用される瓦と考えられる。釘孔の一部が破面にかかって残る。4は丸瓦の筒部から玉縁にかけて残存したものである。筒部凸面には重ね焼きの痕跡が2箇所残る。筒部凸面の上に、別個体の丸瓦の側縁を載せた痕跡である。5は雁振瓦である。別の場所で出土した2個体が接合したものである。1個体の棧の上に別個体の尻部を載せてハセをはさみ、棧が互い違いに向く状態で焼成している。上の個体の尻部下面に下の個体の棧の一部が熔着していた。棧の下面には瓦の本体と接続するための刻み目を入れる。2個体とも断面山形で、中央に釘穴1個を持ち、尻端部を除く外面に來待軸を施軸する。6は雁振瓦である。長さ25.5cm、幅26.0cm、幅1.8cmを測る。断面山形で、中央に釘穴1個を有する。尻部の一部を除き外面に來待軸を施軸し、棧の下面に及ぶ。尻の上面にハセ1点が熔着、棧の小口面にモ



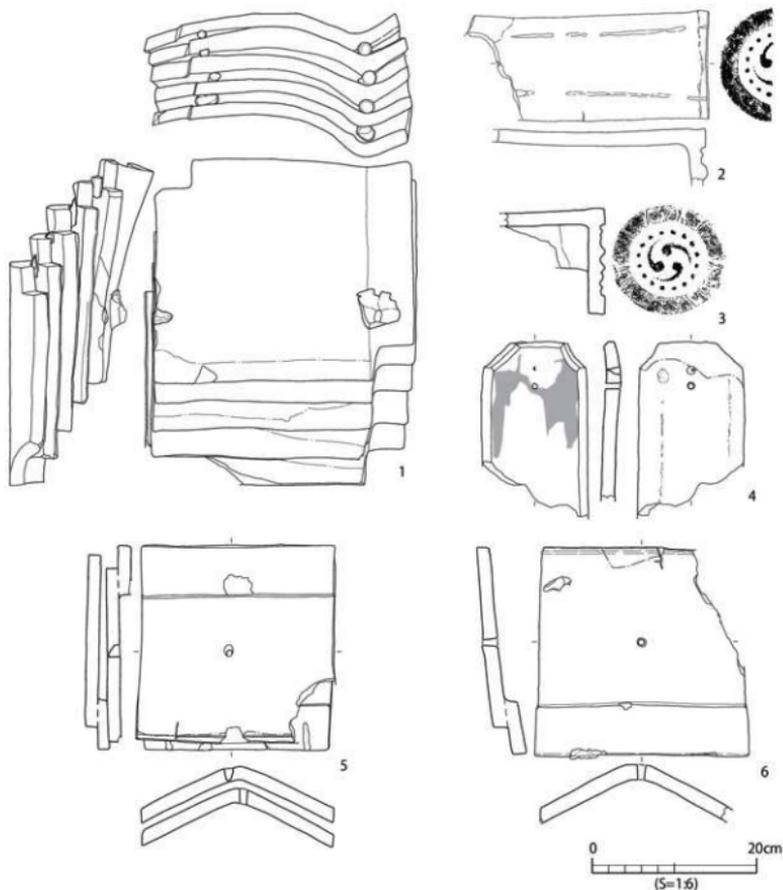
第76図 榎坂窯跡出土遺物 (5) 瓦その1 軒丸瓦 (S=1/3)

ミツチの痕跡が付着する。

第78図1～6は熨斗瓦である。1は、左側辺を除き来待軸が施軸され、裸胎部に釘孔1個を穿つ。釘穴は凹面側から穿孔される。2は、右側辺を除き来待軸が施軸される。裸胎部の凹面側から釘穴を穿孔するが、凸面側まで貫通しない。尻にハセ熔着痕が残る。3は、右側辺を除き来待軸が施される。凹面側から釘穴を穿孔し、凸面の施軸部分に貫通している。尻にハセ熔着痕が残る。4は凹面中央に分割線を持つ割熨斗である。軸葉は凸面中央を残し左右に掛け分けられている。釘穴は2箇所である。凹面から穿孔され、凸面の裸胎部に貫通する。尻にはハセが熔着した痕跡が残る。5は分割を経た割熨斗である。凹面から凸面側の裸胎部へ向けて穿孔するが、貫通しない。榎坂窯跡内で分割工程まで行われていたことを示す。分割状態の割熨斗がほとんど拾えなかったのは、その多くが出荷されたためであろう。6は熨斗瓦4枚が重ね焼きされた状態のものである。尻側の瓦間には楕円形の窯道具をはさむ。4個体とも左側辺を除く凸面に来待軸を施軸する。凹面側から釘孔を穿つが、最上部の1枚は釘穴が貫通していない。頭側にモミツチの熔着痕跡が残る。7は鳥伏間である。筒は途中から折損し、芯部には粘土が押し込まれているが空隙が残っている。瓦当部には連珠三巴文が押印される。8は鳥伏間である。筒の端部側面が湾曲し始めている点から、棟瓦に取り付け基部付近まで残存したものと推定される。芯部には粘土が押し込まれるが、空隙が残っている。基部側の剝離面には、接合強化のための櫛目状の条線が残る。瓦当部には連珠三巴文がスタンプされる。9は鳥伏間の瓦当部である。筒との接合部には接合強化のための櫛目状の条線を刻む。連珠三巴文が表される。10は棟止瓦の板部のうち、頂部付近と三巴文が残存したものである。雁振との継ぎ目は剥落する。11は棟止瓦の棟板のうち左半分が残存したものである。板の下端は軒丸瓦と組み合わせるため大きく抉られる。裏面には雁振側辺との継ぎ目部分が残る。三巴文は1箇所残る。12は棟止瓦の板部で、本来は裏面に断面山形の雁振がつく。瓦当部には三巴文が2箇所残る。裏面側の雁振との継ぎ目は、接合強化のための櫛目状の条線が残る。棟止板の下端は軒丸瓦と組み合わせるため大きく抉られる。

(4) 窯道具 [第79図]

第79図1～3はハセである。頭部を肥大させてキノコ状に作る。側辺に複数の面が残るのは瓦の圧痕とみられる。2は、側辺は1と異なり平滑である。3は頭部が欠損し、全体が被熱のため灰色を帯びる。4は楕円形の窯道具である。上面と下面は瓦の圧痕である。頭部が肥大して外観はハセに似るが、瓦の重圧により一端がくぼんだため、ハセのように見えている可能性がある。表面の広範囲に離れ砂が残る。5は「ヨウカン」と通称される大型の窯道具である。上面には針金状工具による切り離しの痕跡が残る。瓦の製作で粘土を板状に切り取るタタラ作りの工程で生じるものと共通する。モミツチの大型品にあたるものか。6は完形のモミツチである。長さ26.4cm、3.5cm、厚さ3.6cmを測る。全体に離れ砂をまぶす。上面には瓦4枚分の圧痕および軸葉が付着する。7はモミツチである。現状で上面、下面に各6箇所ハセの圧痕が認められる。モミツチの下端、上段の両方にハセをはさんだ瓦を立て並べた窯詰め状況が想定される。8は火立てである。焼成する瓦の前方に立て、火災が直接瓦に当たるのを防ぐ機能を持つ。凹面側には縦方向のコビキ痕が残る、被熱が強い。凸面側には横方向のコビキ痕が残る、被熱が弱い。凹面を焚口側へ向けて使用したと推定される。9はトガワラである。窯の焚口を閉塞する厚さ2cmの板状の窯道具で、中央の孔に金具を引っかけて開閉する。平面形は方形に近く、隅を面取りする。中央には径2.5cm

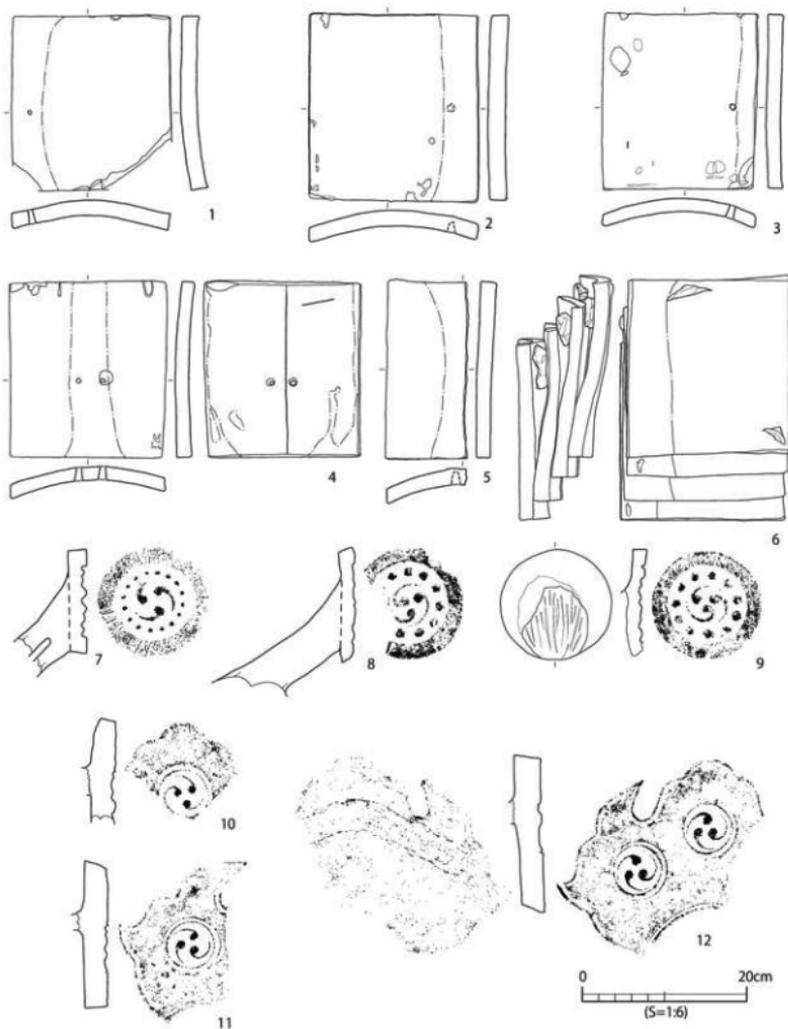


第77図 榎坂窯跡出土遺物 (6) 瓦その2 棧瓦・軒丸瓦・丸瓦・雁振瓦 (S=1/6)

の孔を有する。側辺は指や板状工具による成形後削り調整される。内外面は一部被熱して赤くなる。前面にはわずかに切り離しの痕跡が残る。タタラ作りにより成形された可能性がある。10は粘土をねかせる際に用いる盛鉢である。胴部は播鉢に近い角度で外傾して立ち上がる。口縁部は肥厚し、玉縁状となる。11は浅い形状の盛鉢である。底部外面は指頭圧痕が残る。口縁端部は垂直に面取りされる。底部には、盛鉢の乾燥時に置かれた布もしくは板の跡が残る。底部外周には連続して刻みを入れる。

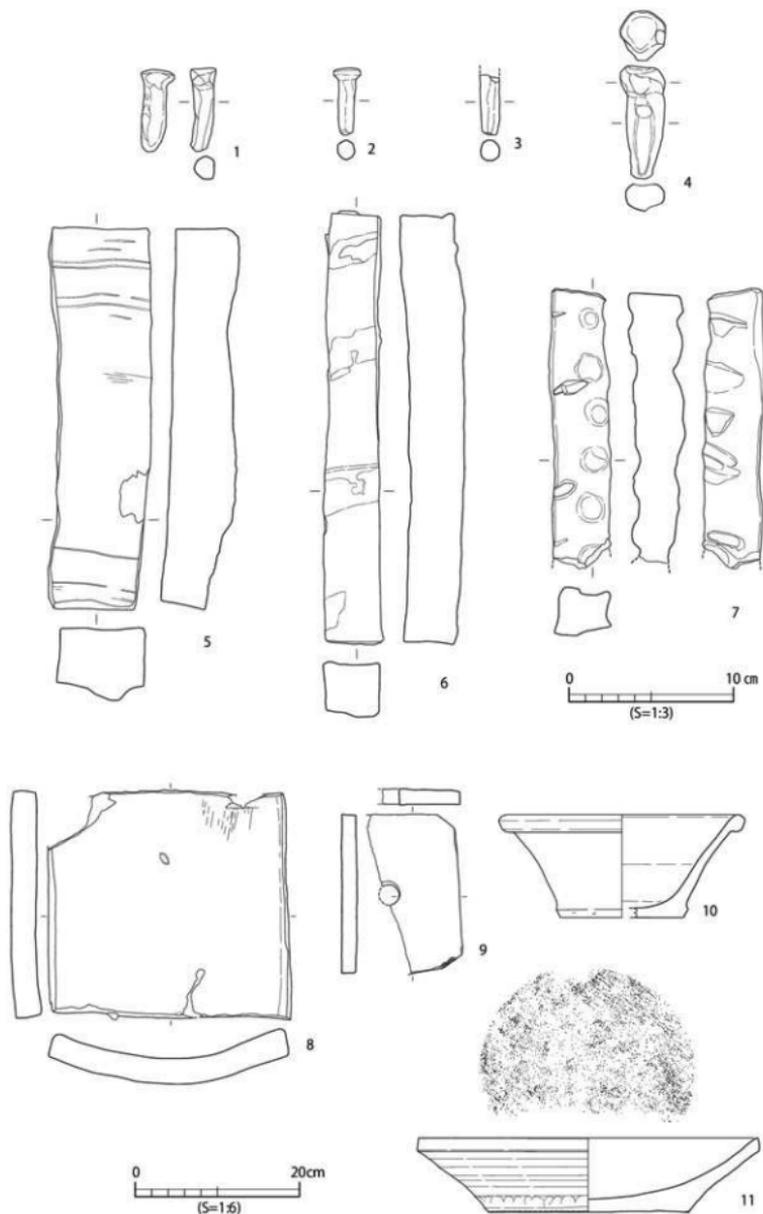
(5) 土製品・ガラス製品 [第80図]

1は用途不明の箱状の土製品である。ふくらみの強い底部から、5～8cm程度の側壁が立ち上がる。正面の側壁は山形に盛り上がり、一部を抉って凹みを作る。この抉りに対応するように、内



第78図 榎坂窯跡出土遺物 (7) 瓦その3 製斗瓦・鳥伏間・棟止瓦 (S=1/6)

面の一部に粘土が剝離した痕跡があることから、別材を継いでいた可能性がある。2は箱状の土製品である。粘土板を組み合わせて成形する。内面は粗いナデ調整のみである。底部内面や側壁の表面には瓦のタタラ作りに類似した切り離し痕跡が残る。底板の上面には高さ9cmの側壁を貼り継いでおり、継ぎ目には接統強化のための刻み目を入れる。下面にも高さ1.8cmの板を貼り継いで



第79図 榎坂窯跡出土遺物 (8) 窯道具 (S=1/3・1/6)



第80図 出土遺物 (9) 土製品 ガラス製品 竹材 (S=1/3)

脚部を作った後、削り出して4方向に透かしを作る⁽¹⁸⁾。3はガラス製のビール瓶である。ガラスの色は暗褐色である。底部付近に「KABUTO BEER」「カプトビール」の文字を浮き文字で表す。注口はくびれ、底部は凹み底状となる。4はガラス製のサイダー瓶である。ガラスの色は濃緑色である。底部外面には「三ツ矢」の商標・マークを浮き文字で表す。頸部付け根に凸帯がめぐる。

SK2からは竹材多数が出土した。確認できた範囲で、細く削られたもの40本がある。いずれも上端、下端を切断された完形品である。ほかに幅広い竹の破片が6点出土した。一本の材が割れたものか、別個体かは不明である。前者の1点が80図5である。長さ28.0cm、幅0.9cmを測る。後者の1点が6で、長さ24.5cm、幅2.4cmを測る

第8節 小結

榎坂窯跡では、連房式登窯1基、礎石建物2棟、粘土採掘坑3箇所、物原1箇所、不明遺構1基を確認した。遺物では、榎坂窯跡で製作されていた瓦類、及び窯道具等が出土した。以下、榎坂窯跡の各要素についてまとめる。

(1) 窯構造

各焼成室内は「トンバリ」（煉瓦）が階段状に積まれ、この上に瓦を立て並べて焼成する。前の焼成室と後ろの焼成室の間には火格子穴が水平方向に開いており（横狭間式）、炎は前室から火格子穴を経て後室へ入る。煙道部は、縦方向に並ぶ煉瓦列間に棧瓦を渡してトンネル状の煙の通り道を作る。その上を赤土で被覆する。煙道の上方に排水溝が走り、モミツチを充填した暗渠とする。各焼成室の右側方には作業用のテラスが付属する。

以上の構造は石見部の既往の調査事例と共通するものである。しかし、他の窯と異なり、後の焼成室を前の焼成室に対して煉瓦1個分ずつ左へずらして構築している。築窯に際してこのような無理をしているためであろうが、焼成室内の火の通り道（火溝）と、次の焼成室への通気口（火格子穴）の位置が煉瓦1個分ずれている箇所がある（第4室～第5室間等）。このような作りでは、炎は一度壁に当たって勢いが弱まった状態で次の焼成室へ入ることになり、焼成室の中で焼き上がり不均等になる可能性がある。おそらくは地形の制約によるものと推定される。

連房式登窯の覆い屋は掘立柱建物で、相生遺跡（益田市高津町）と共通する。大田市の城ヶ谷遺跡、江津市の矢源田窯跡など石見東、中部の窯跡では覆い屋の構造は礎石建物であったことから、地域差の可能性がある^(註9)。

また、通常、焼成室内に積み上げて段構造を作るレンガ（トンバリ）がほとんど残っていない。壁は壊され、基部を除いてほとんどレンガは残らない。操業者がほかの場所へ移転する際に、窯壁材料として再利用するため持ち出した可能性がある。

(2) 各建物の機能

瓦の製作工程は、①粘土の採取、②粘土の精製、③粘土板（タタラ）切り出し、④成形、⑤成形品（「白地」）の乾燥、⑥施釉、⑦焼成の順に行われる。

初期の工程である「土練り」は、方形の施設、通称「フネ」の中で行われる。SB1南寄りに位置するSK1は、粘土が残っていることから「フネ」基部である可能性が高い。

次に、最も広いスペースが必要となるのは、「白地」の乾燥工程である。成形品を地面に直接置いて乾燥させ、建物外周には箆を垂らす程度で特別の施設を必要としなかったという^(註7)。

本遺跡で検出された遺構の中では、SB1の北半分がこの乾燥工程の空間に比定される。このスペースには礎石が2つしか置かれない。平坦面1の中では最も広く開いた空間である。大田市城ヶ谷遺跡では、調査区～調査区外にかけて広がる最大の礎石建物（SB1）を乾燥場として使用していたことが聞き取りから判明している。外周部分を除き柱はほとんど立たず、吹き抜けに近い状態である点でも、榎坂窯跡と共通する。これらの類例から推して、SB1北半分が乾燥用スペースに比定できよう。

土練りと乾燥の間には、粘土塊から板状の粘土を切り出すタタラ、および型押しによる成形の工

程が入る。瓦の成形は、通常石臼の中心孔に心棒を通した木製の型に粘土板を押し付けることによって瓦の形状を作る。この工程に用いられたとみられる石臼が、SB1 北西の張り出し部に近い礎石に隣接して残されていた。広い場所を要する作業ではなく、作業者と型を置く程度のスペースがあれば可能である。SB1 南側の礎石が密に並ぶ部分の可能性があらう。

なお、ガス窯化する以前の焼成作業では、火を入れ始めてから窯内温度が十分上がるまでに数日間を要し、火を止めて温度を下げていくまでに同程度の期間を要する。合算すると10日程度の泊まり込みが必要となる。その間、絶えず火勢を確認する必要があるため、窯が見える近い場所で作業者が泊まり込む場所が必要となる⁽¹⁰⁾。SB1 南半は、礎石が密に並んでいることから床構造であったと推定される部分であり、下方の斜面からは生活用品とみられる陶磁器が多量に出土したことを合わせると、火を監視するための泊まり込みの場所を兼ねていたと推定される。

さらに窯に接近した位置にあるSB2は、床構造ではないことから、上記の泊まり込み場所とは考えにくい。燃料の薪や、窯から出した製品を仮置きする倉庫と推測される。

(3) 粘土採掘坑等

以上のように、焼成作業の場合は登窯、焼成前段階の土練り・成形・乾燥・施釉工程の場合は平坦面1、SB1、SB2に比定が可能である。

残る工程は、土練りの前段階に当たる粘土採掘と水廠である。このうち粘土採掘の場合は尾根頂部の粘土採掘坑群に比定される。ただ、水廠施設は不明な点が残った。通常、水廠施設は高さの異なる木製の水槽を複数設置し、水が高い水槽から順次低い水槽へ流れる間に夾雑物を取り除く構造である⁽¹⁰⁾。調査区内にこれに該当しそうな遺構は確認できない。性格不明としたSX1は、上記の水廠施設の構造と合致しない。水廠が行われていた場所は確認できなかった。

(4) 窯詰め、焼成品目

焼成された瓦の種類は棧瓦、軒棧瓦、軒丸瓦、雁振瓦、熨斗瓦、半熨斗、鳥伏間、棟止瓦と多岐にわたり、一般家屋に使われる瓦の種類を網羅しているが、家紋板は確認できなかった。価格は、棧瓦の特等が千枚当たり60円に対し紋板は焼成数が少なく、1対10円と高価である⁽¹⁰⁾。確認できないのは、生産されなかったため、あるいは焼成されたものが少数で、出荷され、残らなかったためであろう。また、軒棧瓦に小丸がつくタイプの物は調査区全体を通して1点が拾えたのみであり、恒常的に生産してはいなかったと思われる。

榎坂窯跡では、焼成時に熔着してしまった資料が豊富に確認でき、多様な窯詰め法が知られる。棧瓦では最大5枚が将棋倒しの状態で熔着した資料がある(第77図1)。瓦同士が直接熔着するのを防ぐために瓦間に上面側から窯道具が挿入されており、キノコ形のハセ(第79図1~3)と、ハセよりやや大きい楕円形の窯道具(第79図4)を併用する。この資料により、棧瓦の場合は、5枚以上の瓦を立て並べる場合があったことが判明する。表面にはモミツチが付着しており、モミツチをはさんで上段にも瓦を立て並べていたとみられる。軒棧瓦は熨斗瓦と一緒に焼成された(第76図2)。軒棧瓦を並べると瓦当の顎の長さ分の空白が生じるため、この余りの空間に熨斗瓦を置いて空間を隙間なく使ったものである⁽¹¹⁾。本資料では、余った空間に熨斗瓦2枚を置いて焼成している。熨斗瓦だけで焼成する場合は、最大4枚が将棋倒しになって熔着した資料がみられ(第78図6)、上面側から楕円形の窯道具が挿入される。熨斗瓦は4枚以上を立て並べて焼成する場合があったことが判明する。雁振瓦の場合は、棧の向きを互い違いにして並べた(第77図5)。丸瓦

は、凸面の左上方と右上方に、別個体の丸瓦の側縁が載っていた痕跡がある（第77図2, 4）。複数の丸瓦を横に並べ、上段に重ねる瓦の右側縁と左側縁を別の瓦の上に載せていく置き方が想定される。

以上のように、榎坂窯跡で得られた資料からは、棧瓦、軒棧瓦、熨斗瓦、雁振瓦、丸瓦の各器種について窯詰め法が推定可能である。

瓦以外の出土遺物のうち、第56図、61図掲載遺物、及び第80図に掲げた土製品は榎坂窯跡で製作された可能性がある。用途不明の土製品（56図12, 13）、桶を模した火鉢（61図2）等は、瓦に近い厚さの粘土板を組み合わせて製作されており、「丸物」職人が用いる轆轤成形、紐作り整形とは別系統の成形法である。瓦職人が瓦の製作法を応用して製作したとみられる。56図12, 13は、輪の羽口（56図1～11）と一緒に登窯の周囲に集積された状態で出土した。近隣住民の需要に応じて、これら瓦以外の器種を随時製作していたと考えられる。このような遺物の中の一つとして、花器（61図3）があげられる。器面調整が拙くて細かな凹凸が残る、轆轤を使用しない、竹根の表現を縦の条線だけで済ませる、火鉢（61図2）と同様に來待軸を厚く掛ける、等の特徴から、本品も榎坂窯跡で瓦職人の手により製作されたとみてよいであろう。底面には制作者を示す「江里製」の文字が刻まれる。大正～昭和前期の間に土田町で「江里安太郎」氏が瓦窯を操業したことが新聞広告等から確認される⁽¹¹²⁾。よって、榎坂窯跡はこの江里安太郎氏が操業した窯に比定される。

(5) 益田市東部の瓦窯と組合・企業の動向

榎坂窯跡を操業した江里安太郎氏は石見実業株式会社に所属した。同社は、益田地域の瓦窯の同業組合から発展した会社で、地元紙である『石見実業時報』に毎号広告を掲載した。また、同紙の元日号に傘下の各工場の経営者の名簿を載せる場合があり、これらから江里氏を含む益田市東部の瓦業者の名前、動向をある程度追うことが可能である⁽¹¹³⁾。

・『石見実業時報』大正8年1月1日号。同社の前身である「美濃阿武両郡赤瓦同業組合」が広告掲載。鎌手村の組合員として「湯浅啓太郎」「田中周吉」の二氏が見える。

・『石見実業時報』大正9年1月1日号。「美濃阿武両郡赤瓦同業組合」の後身である「石見瓦煉互購買販売組合」が広告掲載。岡見村の組合員として「江里安太郎」氏が見える。また、鎌手村の組合員として「田中周吉」「湯浅啓太」の二氏が見える。

・『石見実業時報』大正12年1月1日号。同組合を改組した「石見実業株式会社」が広告掲載。土田工場の職工長として「江里安太郎」氏、平原工場の職工長として「佐々木一」氏が見える。他方で、「岡見工場」の記載はこの時点以後確認できない。

・「土田工場職工長」としての「江里安太郎」氏は昭和4年元旦の同紙掲載広告まで確認できる。

以上の記事から、江里安太郎氏は大正9年の時点で岡見村（現浜田市三隅町）で窯を経営しており、大正12年までの3年間の間に、榎坂窯跡が所在する益田市土田町へ移った。その後、少なくとも昭和4年まで土田町で窯を操業していることが確認できる。榎坂窯跡は、土田町移転後の江里安太郎氏の窯に該当する。操業開始時期は大正9年1月以後、大正12年1月以前の期間内である。遺跡内のSB2から出土した五銭硬貨が「大正九年」製であることも合致する。

なお、鎌手地区では大正9年の時点で「湯浅啓太郎」「田中周吉」二氏の窯が存在したが、大正12年時点で「佐々木一」氏に代わっている。もと鎌手地域居住の田中義昭氏からの聞き取りによれば、祖父が平原地域（現 JR 線路沿い。一部残存）で窯を営んでいたが後に廃業したといい、これが「田中周吉」氏所有窯に該当する。また、田中氏が幼少時に町内の窯の作業を手伝ったという⁽¹¹⁴⁾窯は、遺跡台帳掲載の西平原町「佐々木窯跡」に該当し、こちらが新聞広告に現れる「佐々木一」氏の窯に比定される。瓦製造関係者間で、労働力の融通をふくむ協力関係があったことがうかがわせるエピソードである。

このように、鎌手地区・土田地区はともに地元で得られる良質の粘土を利用した瓦製造業が営まれた。特に鎌手地区は、古墳時代の須恵器窯2基も近代の窯と同じ丘陵の粘土を利用しており、粘土を利用した窯業の歴史は古い。

良質の粘土のほかに、強く意識されたのは輸送の便であった。榎坂窯跡は、近世から昭和期まで当地域の主要道として利用され続けた近世山陰道（及びこれを継承した道）に隣接する丘陵を選んだ。一方の鎌手は、明治22年に開通した新国道、及び大正期に開通した鉄道に沿う場所を選択した。良質な粘土の所在に加えて、瓦を出荷する輸送手段の有無が選地に大きく影響したことをうかがわせる。

江里氏が所属していた石見実業株式会社の前身は美濃郡赤瓦同業組合で、1916年（大正5年）に結成された⁽¹¹⁵⁾。同業組合結成の根拠法となった重要物産同業組合法は1900年（明治43年）制定され、同業組合が実施する検査を通じての品質の統一、向上を主な目的としていた。石見焼陶器製造業組合の場合は島根県同業組合規則を根拠に設立され、模範工場の設置、技術者の招聘など、同業組合の主旨一品質向上に沿った活動をしている⁽¹¹⁶⁾。

益田市の赤瓦同業組合の活動は「石見実業時報」等から追うことができる。

- | | |
|---------------------|--|
| ・1916年（大正5年） | 美濃郡赤瓦同業組合結成 |
| ・1916年（大正5年）12月15日号 | 値上げ広告掲載 |
| ・1917年（大正6年）6月15日号 | 値上げ広告掲載 |
| ・1917年（大正6年）9月15日号 | 値上げ広告掲載 |
| ・1918年（大正7年）2月15日号 | 値上げ広告掲載 |
| ・1918年（大正7年）6月15日号 | 値上げ広告掲載 |
| ・1919年（大正8年）1月1日号 | 美濃阿武両郡赤瓦同業組合に改組 |
| ・1919年（大正8年）3月15日号 | 石見瓦煉瓦購買販売組合に改組 |
| ・1920年（大正9年）8月15日号 | この年春から大戦後の不況本格化。同組合も「停滞品処分」のための投げ売りを余儀なくされる（大正9年8月15日号）。 |
| ・1921年（大正10年）4月15日号 | 石見実業株式会社へ改組。 |
- （『鹿足郡瓦窯業史』、『石見実業時報』から作成）

一見して明らかのように、同組合の活動の中で最も顕著なのは共同値上げであり、結成当初から価格カルテルの性格が強かった。度重なる値上げは第一次大戦に伴う原材料費の高騰に、業者が共

同で対処したものとみられる。同組合は、大正8年3月には阿武郡の同業者を巻き込み、石見瓦煉瓦購買販売組合を結成するが、結成時の広告に「美濃郡一円及び阿武郡小川村須佐村の瓦煉瓦生産業者は個人売買を全廃して一意専心品質の向上に努力し売買取引に関しては一切組合に一任致し候」⁽¹⁷⁾とあるように、カルテルの内容を従来価格協定から共同販売にまで広げた。瓦窯ではレンガを多量に消費するが、登り窯や関連設備の構築材となる煉瓦も、「瓦煉瓦」組合の結成によって容易に融通できるようになったと思われる。

同じ時期、重要物産同業組合法の解説書が刊行された⁽¹⁸⁾。著者の小野・飯田は商工務省商工局員であり、同業組合の事務を担当する当局者の立場から書かれた解説書である(同書「序」)。法の逐条解釈、手続きの詳細とは別に、西欧のギルド・日本の座など商工団体の歴史、近代の「トラスト及カーテル」といった同業者組織の歴史にも言及する。カルテルやトラストについては、「各製造業者及び商業者が個々独立して営業をして居ては其の間に激甚なる競争を惹起し、販路に於て、価格に於て同業者を凌駕せんとする結果遂に其品質を下落せしめ」る「弊害を除去せんために生れ出た」と、肯定的に紹介している。主題である同業組合について、「他日トラストと迄は行かずとも、企業連合即ちカーテルの如く組合が積極的態度を以て、或は生産制限を行い又は価格の一定を計ることの出来る時期が必ず到来するであろうと思ふ。又近き将来に於ける問題としては現今の消極的の他に積極的の事業を行ふことを得る様に法律を改正し、場合に依りては産業組合の事業の一部たる共同購入、又は共同販売をも兼ね行」うことが可能になる、というカルテル化への見通しと期待を述べ、法改正の可能性にも予言的に言及している。

商工省主導のカルテル・トラスト推進政策が本格化して立法に至るのはのちの1925年の工業組合法、1930年(昭和5年)の同法改正と重要産業統制法制定である⁽¹⁹⁾が、この時期の商工省の中にもすでにカルテル促進志向が存在し、同時にそのための法整備を考慮し始めていたらしいことが知られる。

全国的にはカルテル結成の最初の波が第一次大戦後の反動不況期(大正9年3月～)であったことと比較すれば⁽²⁰⁾、石見瓦煉瓦購買販売組合の発展は、他業界のカルテル化の時期に比較しても、また政府・商工省の産業統制政策と比較しても、早い動きといつてよい。

組合は、大正10年4月6日付で「石見実業株式会社」に改称する。同社の設立広告では、「組合法たる元より営利を目的とする業者として未だ完全なる施設と云ふべからず」と、会社化して営利を目的とするものであることを明確にした。会社化の利点、目的意識として「内は製品の改良(寸法色沢等級の画一)進歩と生産費の節減を計り品質に於ても価格(廉価提供)に於ても偏に需要者に満足を与へ外は他製品を圧倒して販路の拡張(対邦外的輸出)を為す等其能力を経済的に伸縮自在(一時に如何なる多量の注文にも応ぜらるる)ならしむる」等があげられている。

会社はスタート時の基盤である美濃郡だけでなく、阿武郡の須佐村・小川村の業者も「各工場職工長」の肩書で結集しており、事実上のトラストを目指したものとみられる。このうち、土田工場職工長として江里安太郎氏も名を連ねている⁽²¹⁾。

同社は、製造にとどまらず、地域外から移入される瓦も専属帆船で搬送し、一手販売するなど、赤瓦の生産という枠を超え、瓦の商取引の独占を志向した。帆船による他地域への搬送、「購買販売組合」の結成は、山口県防府市の佐野焼製造業者の動きと共通しており、山口県側の動向に影響を受けている可能性がある。鉄道が津和野まで開通するのは大正11年であり、舟運が主流だった

鉄道開通直前の状況も知られる。^(18 22)

このように瓦業者が利潤の増大、互取引全体の独占を志向し、そのための結集へと早くから進んでいった背景には、一つにはこの時期が都市化の進展期であり、住宅用の瓦は波があっても常に必要とされる成長産業だったことがあげられよう。

一方で、この時期は強力な競争相手としてセメント瓦が台頭してきた時期でもあった。大正13年元旦付の「石見実業時報」新年号の広告から、当時の益田・美濃郡に少なくとも二軒のセメント瓦の販売店が存在したことが確認できる^(18 23)。

大正10年4月15日に掲載された「石見実業株式会社」の設立広告では、「輓近種々なる名称の下に瓦は科学的製品統出せるも何れも一長一短ありて必ずしも在来の赤瓦に対比して優越せりと断言すべからず」と強調しているが、これは新出のセメント瓦を強く意識したと思われる^(18 24)。やや後の大正12年7月15日号に、石見実業がセメント瓦を攻撃する広告を出せば、セメント瓦の販売店「潮豊」も反論の広告を出す熾烈な状況であった。「誇大ナル広告ヲ利用シ社会ヲ欺瞞スルガ如キ陋劣ナル行動ハ敢テ無キ事ヲ茲ニ断言ス」とは、赤瓦業者側への当てこすりである。同広告で「セメント万年瓦」と呼び、ほかの販売店の広告では、「セメント瓦の権威 横田弘中工場製防水剤使用」とうたわれているように、宣伝の際のキーワードは防水と耐久性であった^(18 25)。セメント瓦は水がしみこみやすいことが赤瓦業者側からの攻撃材料となっていたが、弱点となりうる防水性の不足を「防水剤」で補っていたことがわかる。一方、セメント瓦の売りは耐久性で、石見赤瓦のセールスポイントと完全に重なり、シェアを食い合う関係にならざるを得なかった。

セメント瓦との競合が始まったことが、在来の瓦業者の結束を促進する動因となった可能性が考えられる。

【註】

- (1) 原田克士氏（益田市土田町在住）他からの聞き取りによる。
- (2) 鳥根県教育委員会『海石西遺跡 角落し遺跡 廻り田遺跡 近世山陰道跡（馬橋地区） 神出西遺跡』2018年。
- (3) 依国一『古来の砂鉄製鎌法—たたら吹製鉄法—』丸善、1933年。
- (4) 三国靖夫『鹿足郡窯業史』（自家出版、2005年）及び『石見実業時報』。
- (5) 後河内古墓群3号墓から出土遺物した、瓦質の容器が、瓦に類似した成形法により製作されている（鳥根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』1991年）。
- (6) 鳥根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』1992年、江津市教育委員会、『矢源田窯跡—波積ダム建設に伴う集団移転地造成工事及び県道江津・井田・太田線付替え工事に伴う文化財調査報告書—』2003年、鳥根県教育委員会『城ヶ谷遺跡（1区） 神谷遺跡 涼見E遺跡』2016年
- (7) 石州瓦工業組合員の皆様からの聞き取りによる。
- (8) 註(7)に同じ。
- (9) 『石見潟』13（江津市文化財研究会、1988年）。
- (10) 近世以降、旧出雲国内に成立した陶窯。
- (11) 浜田市教育委員会文化財係長榎原博英氏のご教示による。
- (12) (4)前掲書、及び『石見実業時報』。
- (13) 『石見実業時報』は飯塚順天堂薬局（現ホームセンタージュンテンドー）が発行していた地元紙。明治43年から昭和4年まで発行された。毎月15日発行が基本で、益田を中心に浜田、津和野地域のニュース、及び企業広告を掲載する。閲覧に際しては益田市立図書館の御協力を得た。
- (14) 田中義昭氏（昭和十年代に鎌手地区在住）の御教示による。
- (15) 『鹿足郡窯業史』自費出版、2005年。
- (16) 中安恵一「石見陶業と同業組合組織」（『古代文化研究』24、鳥根県古代文化センター、2016年）。
- (17) 『石見実業時報』1919年（大正8年）3月。
- (18) 小野武夫・飯田勘一『重要物産同業組合法精義』清水書店、1918年。
- (19) 池田順「産業合理化政策と官僚制」（『歴史学研究』51号、1982年）
- (20) 伊牟田敏充「カルテル時代—恐慌脱出へ政府後押し—」（『昭和経済史』（日本経済新聞社、1976年））。
- (21) 石見実業株式会社広告。『石見実業時報』大正元年1月1日号、大正10年4月15日号。
- (22) 『石見実業時報』大正11年10月15日号。
なお、佐野焼業者の動向については田畑直彦「山口県の窯業と石見焼」（『近世・近代の石見焼の研究』鳥根県古代文化センター、2017年）。
- (23) 『石見実業時報』大正13年元旦号。

- (24) 『石見実業時報』大正10年4月15日号。
- (25) 『石見実業時報』大正12年7月15日号。

第5章 蔵廻り遺跡周辺地域の古植生変遷

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント(株)

はじめに

蔵廻り遺跡は鳥根県西部の益田市西平原町地内に位置し、平原川の谷底平野内に立地する。本報は、蔵廻り遺跡周辺地域の古植生などの古環境(変遷)を明らかにする目的で、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターが、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した花粉分析業務の概報である。

分析試料について

試料採取地点(調査区平面図)を第1図、試料採取層準(断面図)を第2図に示した。これらの図面は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた原図をもとに、作成したものである。

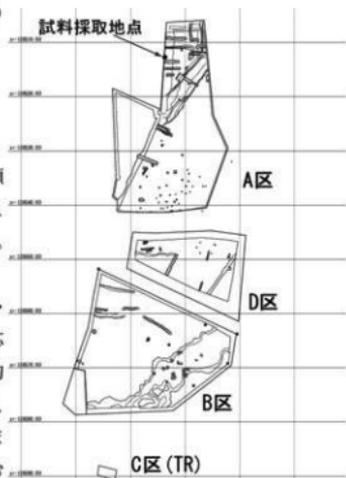
分析方法

1) 微化石概査方法

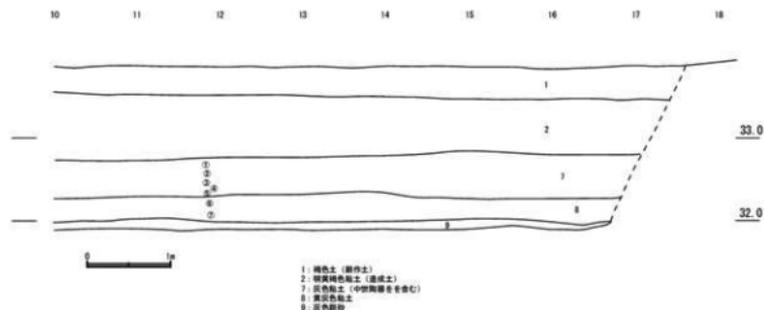
花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉(孢子)、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を5段階で示した。

2) 花粉分析方法

渡辺(2010)に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・孢子化石の同定も行った。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イ



第1図 試料採取地点
(調査区平面図)



第2図 試料採取層準(断面図)

第1表 微化石調査結果

ネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロ未満)に
に細分した。

分析結果

試料No.	花粉	植物炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
1	◎	△	○	×	◎	△
2	◎	△	○	×	◎	△
3	◎	△	○	△×	◎	△
4	◎	△	○	×	◎	△
5	◎	△	○	×	◎	△
6	◎	△	○	×	◎	△
7	◎	△	○	△×	◎	△

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非期に少ない
△×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

1) 微化石調査結果

微化石調査結果を第1表に示す。全ての試料で、花粉化石の含有量が多かった。また、植物片、植物珪酸体化石の含有量は、試料によるバラツキがあるものの、概ね多かった。微粒炭、火山ガラスは、含有量が少ないものの全ての試料で検出された。一方、珪藻化石はほとんどの試料で検出されなかった。また検出できた試料でも、破片が数個体確認できた程度であった。

2) 花粉分析結果

分析結果を花粉ダイアグラム(第3図)と花粉組成表(第2表)に示す。花粉ダイアグラムでは、分類群ごとの百分率(百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。)を、スペクトルで表している(木本(針葉樹)は黒、木本(広葉樹)は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した。)[総合ダイアグラム]では「木本(針葉樹)」、「木本(広葉樹)」、「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示した。[粒数ダイアグラム]では「木本」、「草本・藤本」、「胞子」「花粉・胞子(全ての合計)」ごとに含有量(湿潤試料1g中の粒数)の変化を示している。

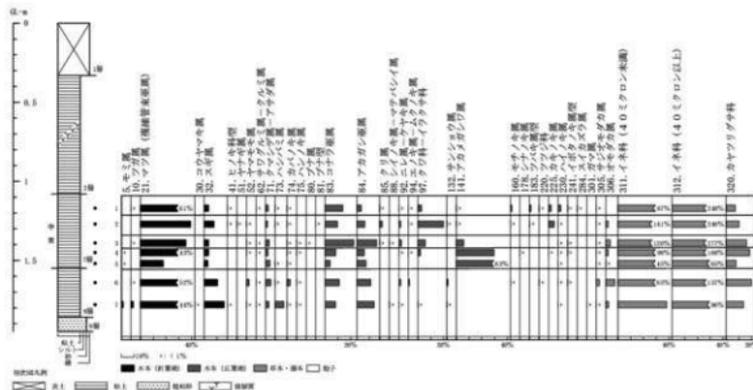
局地花粉帯の設定

花粉分析結果を基に局地花粉帯を設定した。以下に詳細を示す。また、局地花粉帯の変遷を明確にするために、下位～上位に向かって示した。

(1) III帯(試料No 7, 6)

マツ属(複雑管束亜属)が卓越し、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が次ぐ。

AK 西壁



第3図 花粉

(2) II帯 (試料No 5、4)

マツ属 (複維管束亜属) が卓越し、コナラ亜属、アカガシ亜属が次ぐ。ただし、試料No 5ではアカメガシワ属が卓越することから、マツ属 (複維管束亜属) が相対的に減少する。

(3) I帯 (試料No 3~1)

マツ属 (複維管束亜属) が卓越し、増加傾向を示す。コナラ亜属、アカガシ亜属がこれに次ぐが、減少傾向を示す。試料No 2でクワ科 - イラクサ科が高率を、試料No 3でアブラナ科が高率を示すことから、c 亜帯 (試料No 3)、b 亜帯 (試料No 2) a 亜帯 (試料No 1) に細分した。

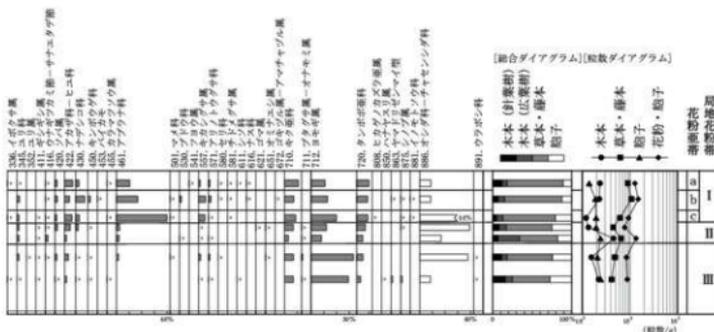
周辺地域の花粉分析結果との比較

北東 8km ほどに位置する上古市遺跡において、弥生時代から中世にかけてのほぼ連続した花粉分析が実施されている (渡辺, 印刷中)。上古市遺跡では、古墳時代から鎌倉時代に対応するIII帯からI帯の間では、マツ属 (複維管束亜属) の増加とスギ属の減少で特徴付けられ、卓越種がスギ属からマツ属 (複維管束亜属) へ変わる。一方、この間でのコナラ亜属、アカガシ亜属の出現率に変化は乏しく、卓越種に次ぐ出現率を示している。

今回の分析結果では、II帯でアカメガシワ属が卓越し、相対的にマツ属 (複維管束亜属) の出現率が低下するが、概ねIII帯からI帯にかけてマツ属 (複維管束亜属) が増加傾向を示す。一方でスギ属は最下位のIII帯でマツ属 (複維管束亜属) に次ぐ出現率を示すものの、減少傾向を示し、II帯から上位ではコナラ亜属、アカガシ亜属が高率を示すようになる。

前述のような花粉化石群集の特徴から上古市遺跡での分析結果と今回の分析結果を比較すると、上古市遺跡でのI帯が今回のIII帯と対比できる。

出土遺物から7層が中世に堆積したと考えられることから、今回の分析層準は全て中世に堆積したと考えられる。



ダイアグラム

のソバ属が僅かながら検出され、休耕田や、裏作、畦を利用した栽培が行われていたと考えられる。

(2) II帯期 (中世)

III帯同様に、周辺の丘陵はアカマツを主要素とする薪炭林で覆われていたと考えられ、局所的にカシ類を主要素とする照葉樹林の分布が推定される外、ナラ類が薪炭林や照葉樹林に混濁していたと考えられる。下部で卓越するアカメガシワ属は、林縁や荒地に先駆的に生育する高木であり、花粉生産量も少なく、飛散距離もさほど広いと考えられないことから、近隣で繁茂したと考えられる。

III帯同様にイネの可能性が高いイネ科 (40ミクロ以上) が高率を示し、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科 (40ミクロ未満)、カヤツリグサ科、キカシグサ属などの水田雑草を含む種類が多量に検出されることから、調査地 (あるいはごく近く) で水田耕作が行われていた可能性が高い。またゴマ属やソバ属が僅かながら検出され、休耕田や、裏作、畦を利用した栽培が行われていたと考えられる。

(3) I帯期 (中世)

III、II帯同様に、周辺の丘陵はアカマツを主要素とする薪炭林で覆われていたと考えられ、局所的にカシ類を主要素とする照葉樹林の分布が推定される外、ナラ類が薪炭林や照葉樹林に混濁していたと考えられる。中部のb亜帯でクワ科-イラクサ科が高率を示す。クワ科-イラクサ科の植物は、花粉生産量が少なく、飛散距離も狭いことから、養蚕に利用されるクワ (ヤマグワ) に由来する可能性が指摘され、近隣に生育したと考えられる。調査地が一時期、桑畑として利用された可能性も指摘できる。

III帯同様にイネの可能性が高いイネ科 (40ミクロ以上) が高率を示し、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科 (40ミクロ未満)、カヤツリグサ科、キカシグサ属などの水田雑草を含む種類が多量に検出されることから、調査地 (あるいはごく近く) に水田耕作が行われていた可能性が高い。またソバ属も僅かながら検出され、裏作や畦を利用した栽培が行われていたと考えられる。下部のc亜帯ではアブラナ科が高率を示す。アブラナ科には多くの「雑草」が含まれるが、ナタネやダイコン、葉菜類などの栽培種も多く含まれる。アブラナ科の高率出現は栽培と結び付けられることが多く (例えば、藤田ほか, 1991)、ナタネなどが栽培された可能性が指摘できる。この外、栽培種のソバ属やフヨウ属 (ムクゲ型) も検出され、休耕田や、裏作、畦を利用した栽培が行われていたと考えられる。

まとめ

蔵廻り遺跡で実施した花粉分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

- (1) 花粉分析結果を基に、I～III帯の局地花粉帯を設定した。更にI帯をa～c亜帯に細分した。
- (2) 上古市遺跡での花粉分析結果との比較から、角落し遺跡でのI帯が今回のIII帯と対比できた。この結果、III帯が鎌倉時代頃の植生を示すと考えられた。
- (3) 花粉分析結果を基に、蔵廻り遺跡周辺での中世の植生を復元した。この結果、調査地 (あるいは近辺) では水田耕作が行われたほか、一時的に桑畑となったり、水田の裏作や休耕田などで、ソバやゴマ、ナタネなどが栽培されたりした。
- (4) 分析した時期を通して、周辺の丘陵はアカマツを主要素とする薪炭林で覆われていたと考えら

れ、局所的にカシ類を主要素とする照葉樹林の分布が推定される外、ナラ類が薪炭林や照葉樹林に混淆していたと考えられた。

(5) II帯の時期には、アカメガシワが近隣で繁茂した。

引用文献

- 中村 純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究、13、187-197。
- 藤田憲司・古谷正和・渡邊正巳（1991）大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について、日本文化財科学会第8回大会 研究発表要旨集、33-34。
- 渡辺正巳（2010）花粉分析法。必携 考古資料の自然科学調査法、174-177。ニュー・サイエンス社。
- 渡辺正巳（印刷中）上古市遺跡周辺の古環境変遷。一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 禰口古墓・上古市遺跡、93-116、鳥根県教育委員会。

第3表 蔵廻り遺跡出土遺物観察表

採得 番号	遺物 番号	出土位置	種別	器種	法量				胎土	成形・調整	胎素	文様	装飾	産地	備考	
					a	b	c	d								
30	1	AIKPh25	磁器	碗	(18.4)	—	—	—	白色	輪轆成形	透明釉	—	白磁	中国	白磁焼内類 11世紀後半～12世紀	
30	2	AIKSK2	陶器	腰鉢	—	—	—	—	灰色	組作り成形	—	—	—	備前系	瀬口6条単位 14世紀代	
30	3	AIK石04	陶器	供養手碗	—	—	5.5	—	灰白色	輪轆成形	透明釉	—	—	肥前系	17世紀後半～ 18世紀前半	
30	4	AIK石04	磁器	皿	(12.2)	3.3	4.5	—	淡褐色	輪轆成形・ 砂目×2	透明釉	—	白磁	朝鮮系	16世紀代 軟質白磁 鉄質の可能性残る 側面?の厚みが異なる	
30	5	AIK石04	木製品	曲物底板	11.5	—	0.7	—	(木材) 榎白材	—	—	—	—	—	—	
30	6	AIK河道 灰色粘土	磁器	碗カ	—	—	(5.0)	—	灰白色	輪轆成形	透明釉	—	白磁	中国	白磁D群 14世紀後半～ 1440年	
30	7	AIK河道 灰色粘土	磁器	皿	(16.6)	4.6	9.0	—	灰白色	輪轆成形	青磁釉	—	青磁・印花	竜泉窯	15世紀代 高台 内縁/日輪割ぎ	
30	8	AIK河道 灰色粘土	土師質土 器	皿	—	—	—	—	淡黄色	組作り成形	—	—	—	—	12世紀代	
30	9	AIK河道 灰色粘土	土製品	土罐	0.9	4.5	0.9	1.1	灰白色	粘土巻きつ け後引抜く	—	—	—	—	(重量) 6.6g 穿孔径3～4mm	
30	10	AIK河道 水田床土	陶器	丸形碗	—	—	—	—	淡黄色	輪轆成形	透明釉	—	—	肥前系	17世紀後半～18 世紀前半代	
30	11	AIK河道 灰色粘土	陶器	壺or甕	—	—	—	—	灰に近い 黄褐色	輪轆成形	鉄釉	—	—	肥前系唐 津	—	
30	12	AIK包含層	陶器	丸形碗	—	—	—	—	灰色	輪轆成形	白化粧土・ 透明釉・呉 須	—	—	—	—	
30	13	AIK包含層	磁器	丸形碗	—	—	—	—	灰色	輪轆成形	透明釉・呉 須	—	—	—	—	
30	14	AIK包含層	石製品	スクレイパー	4.1	3.9	1.1	—	(石材) 黒曜石	押し割削	—	—	—	—	(重量) 16.6g	
30	15	AIK包含層	石製品	石臼 (下臼)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
31	1	EIK河道 灰色粘土	陶器	腰鉢	—	—	—	—	灰白色	組作り成形	—	—	—	備前系	瀬口6条単位 16世紀以前	
31	2	EIK河道 灰色粘土	磁器	碗カ	—	—	—	—	淡黄色	輪轆成形	透明釉	—	白磁	中国	—	
31	3	EIK河道 灰色粘土	磁器	皿	(12.4)	(2.3)	—	—	灰白色	輪轆成形	透明釉	—	白磁	中国	15～16世紀	
31	4	EIK河道 灰色粘土	磁器	皿	—	—	—	—	淡褐色	輪轆成形	透明釉	—	白磁	朝鮮系	30・4と同一個 体か	
31	5	EIK河道 灰色粘土	磁器	皿	—	—	—	—	淡黄色	輪轆成形	透明釉	—	白磁	—	—	
31	6	EIK河道 灰色粘土	磁器	皿	—	—	—	—	灰黄色	輪轆成形	透明釉	—	白磁	中国	15世紀後半～16 世紀代	
31	7	EIK河道 水田床土	陶器	鉢	—	—	—	—	浅黄色	輪轆成形	透明釉	—	—	肥前系唐 津	17世紀初頭	
31	8	EIK河道	陶器	腰折碗	—	—	—	—	灰色	輪轆成形	透明釉・白 化粧土	波状文	刷毛目	肥前系唐 津	18世紀前半	
31	9	EIK河道 水田床土	陶器	甕カ	—	—	—	—	灰黄褐色	組作り成形	灰釉	—	—	肥前系	—	
31	10	EIK河道 水田床土	磁器	丸形碗	—	—	(4.2)	—	淡黄色	輪轆成形	透明釉・呉 須	開線	染付	肥前系	見込み彫/日輪割 ぎ 18世紀前半代	
31	11	EIK包含層	陶器	鉢	—	—	(10.4)	—	期灰色	輪轆成形	緑・藍 緑・黄緑 土	—	刷毛目・三 彩	肥前系唐 津	17世紀後半～18 世紀前半 砂目× 1	
32	1	FKSD28	磁器	丸形皿	—	—	(7.8)	—	白色	輪轆成形	透明釉・呉 須	開線・山水 文カ	染付	肥前系	17世紀後半～18 世紀初頭	
32	2	FK石06	磁器	丸形碗	(9.2)	4.8	(3.4)	—	白色	輪轆成形	透明釉・呉 須	梅樹文	染付	肥前系	18世紀前半代	
32	3	FK石06	磁器	丸形碗	—	—	(5.6)	—	白色	輪轆成形	透明釉・呉 須	不明	染付	肥前系	18世紀代	
32	4	FK石06	磁器	丸形皿	(14.8)	3.5	(7.8)	—	白色	輪轆成形	透明釉・呉 須	—	—	肥前系	18世紀第4前半期 見込み彫/日輪割 ぎ	
32	5	FK石06	陶器	土壺	—	—	(9.0)	—	灰白色	輪轆成形	—	—	—	在地系	外面スス付着	
32	6	FK石06	石製品	臼(下臼)	(34.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瀬戸・大田市静間 城跡 茶臼の可能性	
32	7	FK河道 水田床土	石製品	鎌	1.3	2.1	0.3	—	(石材) 黒曜石	押し割削	—	—	—	—	(重量) 0.64g	
32	8	FK河道 灰色粘土	石製品	割片	2.0	2.5	0.6	—	(石材) 黒曜石	押し割削	—	—	—	—	(重量) 2.2g	
32	9	FK河道 灰色粘土	陶器	腰鉢	—	—	—	—	灰色	輪轆成形	—	—	—	北陸系又 は伊佐系	16世紀～17世紀	
32	10	FK河道 灰色粘土	磁器	碗	—	—	(4.2)	—	灰白色	輪轆成形	青磁釉	—	—	竜泉窯	黄D群 15世紀	
32	11	FK河道 灰色粘土	磁器	梅花皿	(12.0)	—	—	—	灰白色	輪轆成形	青磁釉	—	—	青磁・片青 の文様	中国	16世紀

標回番号	遺物番号	出土位置	類別	器種	法製				胎土	成形・調整	釉薬	文様	裝飾	産地	備考	
					a	b	c	d								
32	12	FK河通 灰色粘土	磁器	皿	—	—	(4.4)	—	白色	轆轤成形	透明釉・青 牡丹草 文	青花	漳州窯系	16世紀前半		
33	1	FK河通 灰色粘土	陶器	丸形碗	—	—	(5.0)	—	灰黄色	轆轤成形・ 切高台	鉄釉	—	—	肥前系徳 津	17世紀前半代	
33	2	FK河通 水田床土	陶器	鉢	—	—	(8.4)	—	にぶい 褐色	轆轤成形・ 切高台	透明釉	—	—	肥前系徳 津	員日×1 17世紀第3四半期	
33	3	FK河通 水田床土	陶器	鉢	—	—	—	—	にぶい 褐色	轆轤成形	灰釉・白化 釉土・透明 釉	—	刷毛目	肥前系徳 津	員日×1 17世紀後半～18 世紀前半	
33	4	FK河通 水田床土	陶器	徳利	—	—	—	—	灰色・ にぶい 赤褐色	轆轤成形	—	—	—	備前系	16世紀後半 遺の可能性が残る	
33	5	FK河通 水田床土	磁器	平形皿	—	—	(4.8)	—	白色	轆轤成形	透明釉	—	白磁	肥前系	見込み能ノ目軸割 ぎ 17世紀後半～18 世紀前半代	
33	6	FK石組6	鉄製品	刀子	1.8	(7.6)	0.5	—	—	鍛造カ	—	—	—	—	—	
33	7	FK水田 床土	金属製品	銭貨	0.2	—	0.1	—	(材料) 銅	鑄造	—	—	—	—	字「寛(永)(通) 寶」 (重量)1.28g	
33	8	FK水田 床土	金属製品	銭貨	2.4	—	0.1	—	(材料) 銅	鑄造	—	—	—	—	字「寛永通寶」 (重量)2.58g	
33	9	緑土	磁器	皿	—	—	—	—	灰黄色	轆轤成形	青磁釉	—	青磁	竜泉窯系	15～16世紀	
37	1	DK包含層	磁器	皿	—	—	(5.0)	—	白色	轆轤成形・ 物付	透明釉・青 釉	不明	—	中国	16世紀末～17世 紀初期	
37	2	DK包含層	磁器	平形皿	—	—	4.5	—	灰白色	轆轤成形	透明釉・呉 須	照耀	染付	肥前系	初瀬万里(17世 紀前半) 見込み能ノ目軸割 ぎ	
45	1	BR河路1 埋土	土師質土 器	皿	—	—	(7.4)	—	浅黄褐色	轆轤成形	—	—	—	—	—	
45	2	BR包含層	石製品	スクレイパー	4.1	3.3	0.5	—	(石材) 安山岩	押し割削	—	—	—	—	(重量)8.4g	
45	3	BR包含層	須恵器	坏蓋	—	—	—	—	灰白色	轆轤成形	—	—	—	—	—	
45	4	BR包含層	須恵器	高坏	—	—	—	—	灰色	轆轤成形	—	—	力半目	—	—	
45	5	BR包含層	土師質 土器	皿	—	—	(4.6)	—	—	褐色	轆轤成形	—	—	—	—	
45	6	BR包含層	土師質 土器	皿	—	—	—	—	にぶい 黄褐色	轆轤成形	—	—	—	—	—	
45	7	BR包含層	灰質土器	播鉢	—	—	—	—	灰白色	組作り成形	—	—	—	—	播目4条単位	
45	8	BR河路群	瓦質土器	風炉	(27.4)	(16.3)	—	(38.4)	灰白色	組作り成形	—	—	—	—	大室 14～15世紀	
45	9	BR包含層	鉄製品	小柄	(8.5)	(1.3)	(0.4)	—	—	—	—	—	—	—	(重量)24.6g	
45	10	BR包含層	陶器	天目形碗	(11.6)	—	—	—	灰白色	轆轤成形	鉄釉	—	—	肥前系徳 津	17世紀代	
45	11	BR包含層	磁器	碗	—	—	(6.4)	—	白色	轆轤成形	透明釉・青 釉	法螺貝	青花	景徳窯系	青花和D群 16世紀前半	
45	12	BR包含層	磁器	椀花皿	(13.0)	—	—	—	白色	轆轤成形	青磁釉	沈線×2	青磁	中国	16世紀前半	
46	1	BR包含層	陶器	丸形碗	—	—	—	—	灰白色	轆轤成形	透明釉	—	—	肥前系徳 津	18世紀前半代	
46	2	BR包含層	陶器	丸形碗	—	—	—	—	灰白色	轆轤成形	透明釉・呉 須	草花文	鉄蒔絵	肥前系徳 津	18世紀前半代 陶器染付	
46	3	BR包含層	陶器	碗	—	—	(5.3)	—	にぶい 黄褐色	轆轤成形	黒灰釉	—	—	肥前系徳 津	17世紀初葉	
46	4	BR包含層	陶器	皿	—	—	5.1	—	にぶい 赤褐色	轆轤成形	灰釉	—	—	肥前系徳 津	17世紀初葉	
46	5	BR包含層	陶器	碗	—	—	—	—	にぶい 黄褐色	轆轤成形	黒灰釉	—	—	肥前系徳 津	17世紀初葉	
46	6	BR包含層	陶器	片口鉢	—	—	—	—	灰色	轆轤成形	黒灰釉	—	—	肥前系徳 津	17世紀前半	
46	7	BR包含層	陶器	裏	—	—	—	—	暗赤褐色	落子目タタ キ	灰釉	—	—	肥前系徳 津	17世紀後半～18 世紀前半代	
46	8	BR包含層	磁器	丸形皿	—	—	(8.4)	—	白色	轆轤成形	透明釉・呉 須	草花文	染付	肥前系	18世紀中葉	
46	9	BR包含層	磁器	碗蓋	—	—	—	—	白色	轆轤成形	透明釉・呉 須	竹文	染付	肥前系	18世紀中葉	

第4表 榎坂窯跡出土遺物観察表

探検 番号	遺物 番号	出土位置	種類	器種	法測				胎土	成形・調飾	胎素	文様	装飾	産地	備考		
					a	b	c	d									
56	1	登窯内	土製品	羽口	(41.5)	9.6	—	—	褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。基部ケ ズリ。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	2	登窯内	土製品	羽口	43.5	9.0	2.5	—	褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。基部ケ ズリ。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	3	登窯周辺	土製品	羽口	—	8.2	2.5	—	褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。基部ケ ズリ。	—	—	—	—	—		
56	4	登窯周辺	土製品	羽口	—	10.0	—	—	褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。基部ケ ズリ。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	5	登窯周辺	土製品	羽口	40.2	10.7	2.4	—	褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。基部ケ ズリ。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	6	登窯周辺	土製品	羽口	—	8.7	—	—	褐色	基部ケズリ	—	—	—	—	—		
56	7	登窯周辺	土製品	羽口	—	—	2.7	—	暗褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。先端船 圧痕。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	8	登窯周辺	土製品	羽口	—	—	2.4	—	暗褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	9	物販	土製品	羽口	—	—	—	—	淡褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。外面タ タキ。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	10	登窯内	土製品	羽口	—	—	—	—	褐色	内面ケズリ	—	—	—	—	内面に黄青き状 の痕跡が残る		
56	11	登窯内	土製品	羽口	—	—	—	—	褐色	心 棒 に 巻 いた後引張 く。基部ケ ズリ。	—	—	—	—	内面にシワが残る		
56	12	登窯周辺	土製品	不明	4.0	—	2.1	—	にぶい 褐色	タタラ 作 り?	—	—	—	—	—		
56	13	登窯周辺	土製品	不明	(12.8)	(9.3)	2.0	—	にぶい 褐色	タタラ 作 り 粘土板の切 り廻し面あ り。	—	—	—	—	—		
61	1	SD01	陶器	鉢	—	—	—	—	灰オリーブ 色	輪縁成形	灰胎	—	—	—	—		
61	2	SB1	陶器	火鉢カ	31.2	13.7	30.4	—	淡褐色	板作り 粘土板の接 合部には別 み目を入れる	鉄胎	—	—	—	竹製のタガを 横した凸帯 を2条めく らす。	脚部の3方向に透 かし。全体は、竹 製のタガをはめた 木箱を組した作り となっている。	
61	3	SB1	陶器	花器	15.5	14.2	12.7	—	淡黄色	不明	鉄胎	—	—	—	竹根を横した 条縁	底面に刷書で「江 里製」の文字が刷 られる。左側の帯 に付属したとみら れる蓋が残る。蓋 下面に砂が付着す る。	
61	4	SB1北西隅	石製品	石臼	27.8	11.0	28.2	29.6	(石材) 流紋岩	—	—	—	—	—	磨り潰しは八分六 厘		
63	1	SB2	陶器	窪む鉢	—	—	—	—	灰色	輪縁成形	灰胎	—	—	—	石見焼	近代	
63	2	SB2	磁器	碗	—	—	—	—	白色	輪縁成形	透明釉・化 学コバルト	(外 側 面) 花文 (内面) 圓 縁	—	—	—	平紙刷	—
63	3	SB2	土製品	縁香立て	—	—	11.0	—	浅黄褐色	板作り	—	—	—	—	—	高台に平円形の切 り込みを入れる	
63	4	SB2	金属製品	銭貨	2.0	2.0	0.1	—	—	鑄造	—	菊御紋	—	—	—	表面に文字「大日 本」(大正九年) 裏面に文字「五 銭」	
72	1	表土	陶器	碗	11.4	5.4	5.6	—	オリーブ 黄色	輪縁成形	灰胎	—	—	—	—	杉形カ	
72	2	表土	陶器	鉢	18.2	9.3	9.2	—	灰黄色	輪 縁 成 形 臼跡×8	黒胎	—	—	—	—	—	
72	3	表土	陶器	鉢	—	—	—	—	灰オリーブ 色	輪縁成形	灰胎	—	—	—	—	—	
72	4	表土	陶器	鉢	—	—	—	—	浅黄色	輪縁成形	灰胎	—	—	—	—	—	
72	5	平坦面2	陶器	鉢	—	—	—	—	灰オリーブ 色	輪縁成形	灰胎	—	—	—	—	—	
72	6	平坦面2	陶器	鉢	—	—	10.0	—	浅黄色	輪 縁 成 形 削出し高台	灰胎	—	—	—	—	—	

標記番号	遺物番号	出土位置	種別	器種	法製				胎土	成形・調整	軸葉	文様	裝飾	産地	備考
					a	b	c	d							
72	7	SB1下方	陶器	甕	44.0	—	—	—	灰白色	組作り	素持軸	波状文・染織文	染織	—	—
72	8	包含層	陶器	甕	—	—	18.6	—	浅黄褐色	組作り 臼跡×7	素持軸	—	—	—	—
73	1	表土	陶器	徳利	—	—	—	—	浅黄褐色	轆轤成形	灰軸・鉄軸 (文字)	—	—	—	胴部に鉄軸による文字「牛」有り
73	2	表土	陶器	徳利	—	—	12.8	—	浅黄褐色	轆轤作り 高台削出し	灰軸・鉄軸 (文字)	—	—	—	胴部に鉄軸による文字「馬」有り
73	3	SB1下方	陶器	碗盤類	—	—	—	—	灰赤色	組作り	鉄軸	—	—	—	—
73	4	SB1下方	陶器	土罨	2.1	(5.2)	—	3.7	淡黄褐色	心棒に巻いた後引抜く	素持軸	—	—	—	—
73	5	SB1下方	陶器	不明	(14.8)	1.7	(14.3)	—	にぶい黄褐色	板作り	素持軸	—	—	—	—
73	6	SB1下方	陶器	不明	(18.4)	0.2	(18.2)	—	にぶい黄褐色	板作り	素持軸	—	—	—	—
74	1	表土	磁器	磁反形酒杯	7.4	2.8	3.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・色絵	磨松文	土輪付	瀬戸・多治見	—
74	2	表土	磁器	磁反形酒杯	(7.4)	3.3	2.6	—	白色	轆轤成形	透明軸・色絵	磨松文	土輪付	瀬戸・多治見	—
74	3	表土	磁器	磁反形酒杯	6.6	2.9	2.5	—	白色	轆轤成形	透明軸・コバルト・正四子	桜花文	型抜き取	瀬戸・多治見	昭和10年代
74	4	SB1下方	磁器	平形酒杯	(6.4)	3.5	(3.6)	—	白色	轆轤成形	透明軸・金漆障子	金彩	土輪付	瀬戸・多治見	兵庫産
74	5	表土	磁器	飯碗	9.8	4.8	4.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・色絵	唐文	土輪付	有田	—
74	6	表土	磁器	平形酒杯	—	—	(3.0)	—	白色	轆轤成形	透明軸・色絵	マーケ	土輪付	瀬戸・多治見	—
74	7	表土	磁器	陶丸碗	5.9	7.2	3.7	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	圓縁・鳳凰文・連続圓縁文	刷版刷	—	—
74	8	表土	磁器	陶丸碗	6.0	7.3	4.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	圓縁・鳳凰文・連続圓縁文	刷版刷	—	—
74	9	表土	磁器	陶丸碗	(7.4)	6.8	(4.2)	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト・刷版刷	草花文・圓縁	コバルト染付	—	—
74	10	表土	磁器	飯碗	(12.0)	5.4	(4.4)	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	扇に松文・器物に梅文	刷版刷・染付	有田系	高台内に銘文「風75-10」と意匠が共通
74	11	表土	磁器	飯碗	10.6	5.5	4.4	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	四角文・龍・花文	コバルト染付	瀬戸・多治見	—
74	12	表土	磁器	丸形碗	10.7	5.8	3.6	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	窓文×6・草花文・青海波文・圓縁	刷版刷	—	—
74	13	表土	磁器	丸形碗	(10.0)	5.3	4.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	四方・障文・理め詰め・五三の割文・菊花文	刷版刷	—	産地不明
74	14	表土	磁器	飯碗	11.3	5.2	3.8	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	松文	刷版刷	有田系	銘文「圓」か「青竹(草力)」か
74	15	表土	磁器	飯碗	11.6	5.4	5.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト・鉄軸	鳳凰文・四方障文	刷版刷・口蓋	瀬戸・多治見	—
74	16	SB1下方	磁器	磁反形碗	10.5	6.0	4.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	窓文・花文・圓縁	刷版刷	—	—
74	17	SB1下方	磁器	磁反形碗	10.2	5.9	4.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	幾何学文・圓縁	刷版刷	—	—
74	18	SB1下方	磁器	磁反形碗	10.0	6.0	4.0	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	花文・圓縁・唐文	刷版刷	—	—
74	19	表土	磁器	碗蓋	—	—	—	—	白色	轆轤成形	透明軸・呉須	草花文	染付	—	—
74	20	表土	磁器	丸形碗	10.1	3.1	4.1	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	窓・松山水文・2列の窓文	刷版刷	—	—
74	21	SB1下方	磁器	丸形碗	(11.4)	2.5	(3.6)	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	松文	刷版刷	—	—
74	22	SB1下方	磁器	丸形碗	10.8	2.2	6.4	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	家屋文	刷版刷	—	平家物語(知草編後)
75	1	表土	磁器	輪花皿	13.4	4.0	8.6	—	白色	轆轤型打成形	透明軸・化学コバルト	窓文・唐文・唐文	刷版刷	有田系	平家物語(知草編後)
75	2	表土	磁器	輪花皿	(13.4)	4.0	(8.6)	—	白色	轆轤型打成形	透明軸・化学コバルト	窓文・唐文・唐文	刷版刷	有田系	蛇ノ目四形高台チャップ
75	3	表土	磁器	輪花皿	13.8	4.0	8.2	—	白色	轆轤型打成形	透明軸・化学コバルト	窓文・唐文・唐文	刷版刷	有田系	蛇ノ目四形高台
75	4	表土	磁器	丸形鉢	(9.0)	6.3	10.5	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	松竹梅文・唐文	刷版刷	有田系	蛇ノ目四形高台チャップ
75	5	表土	磁器	段重	10.8	3.9	9.3	—	白色	轆轤成形	透明軸・化学コバルト	竹文	刷版刷	—	—

採掘 番号	遺物 番号	出土位置	種類	器種	法量				胎土	成形・調製	釉薬	文様	装飾	産地	備考
					a	b	c	d							
75	6	表土	磁器	彫形香炉	(6.0)	—	—	—	白色	輪耀成形	透明釉・色 絵	唐花文	上絵付	有田系	—
75	7	SBI下方	磁器	御神酒德利	1.6	—	—	—	白色	輪耀成形	透明釉・色 絵	若松	上絵付	有田系	—
75	8	表土	磁器	酒德利	—	—	7.2	—	白色	輪耀成形	透明釉・化 学コハルト	秋草文	コハルト染 付	有田系	昭和
75	9	SBI下方	磁器	丸形碗蓋	4.5	2.7	9.4	—	白色	輪耀成形	透明釉・化 学コハルト	山水文	コハルト染 付	有田系	昭和
75	10	表探	磁器	丸形碗蓋	4.0	3.1	10.2	—	白色	輪耀成形	透明釉・化 学コハルト	扇に松文・ 巻物に竹物 文・王印子	刷版刷	—	銘「松風」 昭和
75	11	SBI下方	磁器	丸形碗蓋	3.7	3.1	9.6	—	白色	輪耀成形	透明釉・化 学コハルト	砂綾形文・ 扇状松竹物 文・刷文	刷版刷	多治見	銘：二重角に 「綾」
75	12	SBI下方	磁器	丸形碗蓋	3.8	2.9	9.2	—	白色	輪耀成形	透明釉・化 学コハルト ・刷版刷	とんぼ文・ 秋草文	刷版刷	—	—
76	1	表土	瓦	軒枕瓦	30.4	—	1.4	—	褐色	タタラ作り	未待軸	唐草文刷し	押印	—	別個体が装着
76	2	表土	瓦	軒枕瓦	31.2	26.7	2.2	—	浅黄褐色	タタラ作り	未待軸	唐草文刷し	押印	—	釘穴×2 繋斗瓦が装着
76	3	表土	瓦	軒枕瓦	—	—	—	—	明黄褐色	タタラ作り	未待軸	唐草文刷し	—	—	
76	4	物原	瓦	軒枕瓦	(7.6)	(6.9)	1.8	—	浅黄褐色	タタラ作り	未待軸	三巴文	押印	—	軒枕瓦の小丸部分 釘穴×1
76	5	表探	瓦	左軸瓦	23.7	27.0	2.1	—	灰赤色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	
76	6	表探	瓦	軒軸瓦	25.0	26.7	2.0	—	にふい 褐色	タタラ作り	未待軸	唐草文刷し	押印	—	釘穴×2 ハセ、別個体軒 枕瓦が装着
76	7	表探	瓦	枕瓦	30.5	26.4	2.1	—	にふい 褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	窯道具が装着
76	8	表探	瓦	枕瓦	31.3	27.5	2.0	—	にふい 褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	—
77	1	表探	瓦	枕瓦	31.3	27.3	2.0	—	にふい 褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	窯詰め状態で 装着・枕瓦×5
77	2	表土	瓦	軒丸瓦	(29.4)	13.2	1.8	—	褐色	タタラ作り	未待軸	連続三巴文	押印	—	凸面に別個体の丸 瓦の装着痕
77	3	表土	瓦	軒丸瓦	—	13.0	2.0	—	淡黄色	タタラ作り	未待軸	連続三巴文	押印	—	—
77	4	表探	瓦	丸瓦	—	—	1.7	—	淡黄色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	別個体の丸瓦の 装着痕が 釘穴×2
77	5	表探	瓦	雁屋瓦	23.5	25.3	1.5	—	淡黄色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	釘穴×1 ハセが装着。重 ねられた雁屋瓦2 個体が離れた状 態で出土
77	6	表探	瓦	雁屋瓦	26.0	25.5	1.8	—	淡黄色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	釘穴×1 ハセが 装着
78	1	表土	瓦	繋斗瓦	19.4	21.3	2.1	—	にふい 褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	釘穴×1
78	2	表土	瓦	繋斗瓦	20.5	22.7	2.0	—	浅黄褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	釘穴(未貫通)×1
78	3	表探	瓦	繋斗瓦	18.9	21.5	1.6	—	淡黄色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	釘穴×1 ハセの装着痕
78	4	表土	瓦	繋斗瓦	18.9	21.8	1.6	—	明黄褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	釘穴×2 凹面中央に分割 線
78	5	表探	瓦	繋斗瓦 (平繋斗)	10.0	22.0	2.0	—	明褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	釘穴(未貫通)×1
78	6	表土	瓦	繋斗瓦	19.7	21.6	2.0	—	にふい 黄褐色	タタラ作り	未待軸	—	—	—	窯詰め状態で 装着・繋斗瓦×4
78	7	登室町辺	瓦	鳥伏間	—	12.8	2.3	—	にふい 褐色	タタラ作り	未待軸	連続三巴文	押印	—	—
78	8	表探	瓦	鳥伏間	—	12.5	2.0	—	褐色	タタラ作り	未待軸	連続三巴文	押印	—	—
78	9	SBI下方	瓦	鳥伏間	—	13.5	1.7	—	にふい 黄褐色	タタラ作り	未待軸	連続三巴文	押印	—	隣部との接合部に 懸斗状の条痕
78	10	表土	瓦	禰止瓦 (飯部)	—	—	2.8	—	浅黄褐色	タタラ作り	未待軸	三巴文	押印	—	—
78	11	表土	瓦	禰止瓦 (飯部)	—	18.8	3.2	—	浅黄褐色	タタラ作り	未待軸	三巴文	押印	—	雁屋瓦との接合 部に懸斗状の条痕
78	12	表土	瓦	禰止瓦 (飯部)	—	18.0	2.9	—	にふい 黄褐色	タタラ作り	未待軸	三巴文×2	押印	—	—
79	1	表探	窯道具	ハセ	2.0	5.0	1.0	—	にふい 褐色	手捏ね・ナ デ	—	—	—	—	瓦の圧痕多数
79	2	登室内	窯道具	ハセ	1.8	4.1	1.2	—	にふい 赤褐色	手捏ね・ナ デ	—	—	—	—	—
79	3	物原	窯道具	ハセ	—	—	0.8	—	灰白色	手捏ね・ナ デ	—	—	—	—	—
79	4	登室内	窯道具	ハセ (大型)	2.8	6.9	2.4	—	にふい 黄褐色	手捏ね	—	—	—	—	83-1-3のハセと 別個体とみられる モミツチの一種 か。ヨウカン]の 通称がある。
79	5	登室内	窯道具	モミツチ (大型)	6.2	23.3	4.1	—	褐色	タタラ作り	—	—	—	—	瓦4枚分の圧痕
79	6	表探	窯道具	モミツチ	3.5	26.4	3.6	—	浅黄褐色	タタラ作り	—	—	—	—	ハセ6個体分の圧 痕
79	7	登室内	窯道具	モミツチ	3.6	—	3.2	—	にふい 黄褐色	タタラ作り	—	—	—	—	—
79	8	表土	窯道具	火立て	29.7	28.2	3.2	—	浅黄色	タタラ作り	—	—	—	—	—

棟回 番号	遺物 番号	出土位置	種別	器種	法量				胎土	成形・調整	軸葉	文様	裝飾	産地	備考
					a	b	c	d							
79	9	表探	京道具	トガワラ	(19.4)	—	1.9	—	にぶい 赤褐色	板作り・削	—	—	—	—	径2.5cmの孔
79	10	SB1下方	京道具	土磁鉢	(30.0)	12.6	(15.0)	—	褐色	紐作り・回 転ナデ	—	—	—	—	—
79	11	表土	京道具	土磁鉢	(41.2)	9.1	(24.4)	—	褐色	紐作り・回 転ナデ	—	—	—	—	—
80	1	SB1下方	土製品	不明	(12.7)	(9.1)	(8.4)	—	にぶい 黄褐色	板作り・ナ デ	—	—	—	—	—
80	2	表土	土製品	不明	21.9	—	13.0	—	褐色	板作り・ナ デ	—	—	—	—	—
80	3	表土	ガラス 製品	瓶	2.6	29.3	8.0	—	(素材) ガラス (褐色)	—	—	—	—	—	底「カブトビー ル」
80	4	表土	ガラス 製品	瓶	2.4	23.0	6.6	—	(素材) ガラス (緑色)	—	—	「三ツ矢」 の商標	—	—	—
80	5	SK2	竹製品	不明	0.9	28.0	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—
80	6	SK2	竹製品	不明	2.4	24.5	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—

写真図版



蔵廻り遺跡遠景（北から）



蔵廻り遺跡遠景（南から）



蔵廻り遺跡 E・F区調査前



蔵廻り遺跡 A区調査前



蔵廻り遺跡 F 区北壁土層



蔵廻り遺跡 E 区北壁土層

写真図版 4 蔵廻り遺跡



蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション (F区東壁)



蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション (E区東壁)



蔵廻り遺跡中世河道跡横断セクション（E区南壁）



蔵廻り遺跡E区河道跡検出（北から）



蔵廻り遺跡 A 区河道跡検出（南から）



蔵廻り遺跡中世河道跡完掘（東から）



蔵廻り遺跡中世河道跡完掘（北西から）



蔵廻り遺跡中世河道跡完掘（南から）

写真図版 8 蔵廻り遺跡



蔵廻り遺跡中世河道跡
セクション
(第15図Cライン)



蔵廻り遺跡中世河道跡
セクション
(第15図Bライン)



蔵廻り遺跡石垣4
セクション
(第14図Aライン)

蔵廻り遺跡石垣 4
セクション



蔵廻り遺跡 A 区
石垣 4・根太列 4



蔵廻り遺跡 E 区
石垣 4・5





蔵廻り遺跡 E 区
石垣 4



蔵廻り遺跡 E 区
石垣 5



蔵廻り遺跡 E 区
根太列 1



蔵廻り遺跡 F 区根太列 3



蔵廻り遺跡 F 区石垣 10



蔵廻り遺跡 F 区西部杭列



蔵廻り遺跡 F 区石垣 9 (北から)



蔵廻り遺跡 F 区
石垣 9 北端



蔵廻り遺跡 F 区
石垣 7



蔵廻り遺跡 F 区
石垣 8

蔵廻り遺跡 F 区
石垣 6・根太列 2



蔵廻り遺跡 F 区
石垣 6



蔵廻り遺跡 F 区
根太列 2





蔵廻り遺跡 F 区石垣 6 南端



蔵廻り遺跡 F 区 SD24・27 完掘



蔵廻り遺跡 F 区 SD25 検出



蔵廻り遺跡 F 区 SD25 完掘

蔵廻り遺跡 E 区
近代の水田面



蔵廻り遺跡 E 区
石垣 1・2



蔵廻り遺跡 E 区
石垣 1





蔵廻り遺跡 E 区
石垣 2



蔵廻り遺跡 E 区
石垣 3



蔵廻り遺跡 F 区
ピット群検出



蔵廻り遺跡 A区ピット群検出 (南から)



蔵廻り遺跡 A区ピット群完掘 (南から)



蔵廻り遺跡D区調査前（西から）



蔵廻り遺跡D区完掘（西から）



蔵廻り遺跡 B 区調査前（北西から）



蔵廻り遺跡 B 区完掘（北西から）



蔵廻り遺跡 B 区
北壁土層 (1)



蔵廻り遺跡 B 区
北壁土層 (2)



蔵廻り遺跡 B 区
北壁土層 (3)

藏廻り遺跡 B 区
西壁土層 (1)



藏廻り遺跡 B 区
西壁土層 (2)



藏廻り遺跡 B 区
西壁土層 (3)





蔵廻り遺跡 B 区
西壁土層 (4)

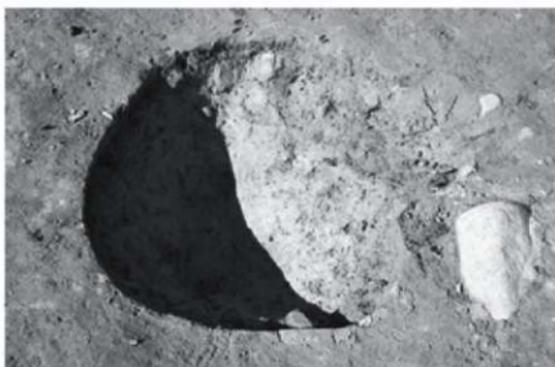


蔵廻り遺跡 B 区
SK1 セクション



蔵廻り遺跡 B 区
SK1 石出土状況

蔵廻り遺跡 B 区
SK1 完掘



蔵廻り遺跡 B 区
流路 1 セクション B
(南西から)



蔵廻り遺跡 B 区
流路 1 セクション A
(南西から)





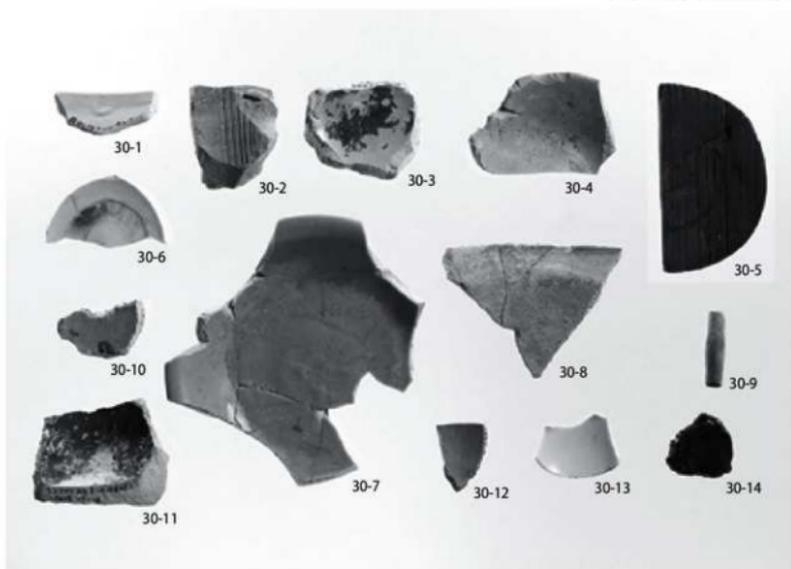
蔵廻り遺跡 B 区流路 1 完掘 (北から)



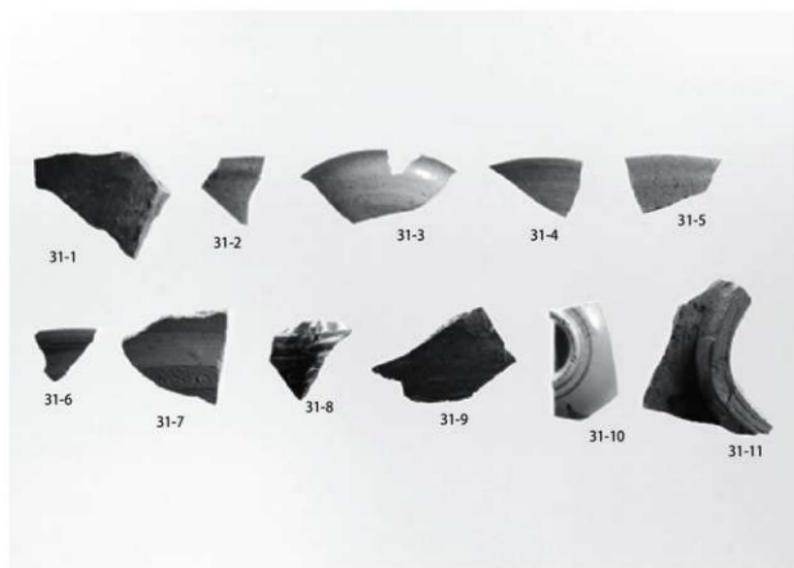
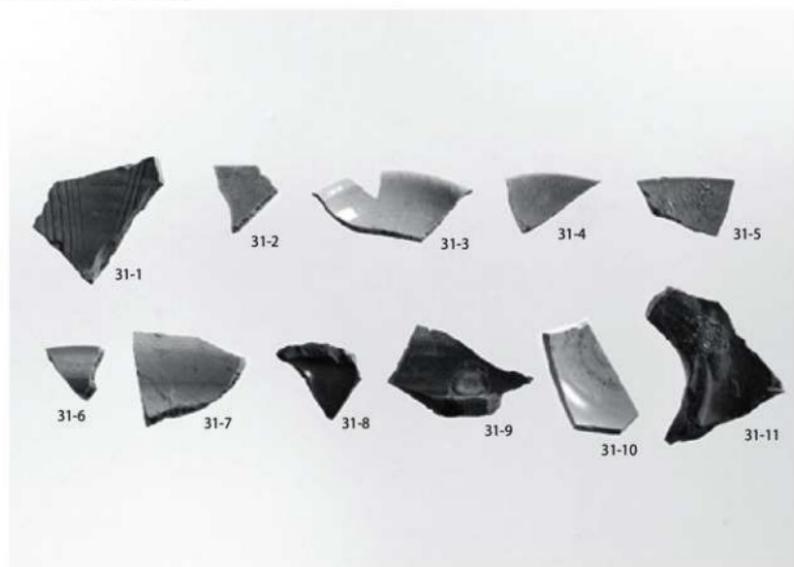
蔵廻り遺跡 B 区 SD1 検出 (西から)



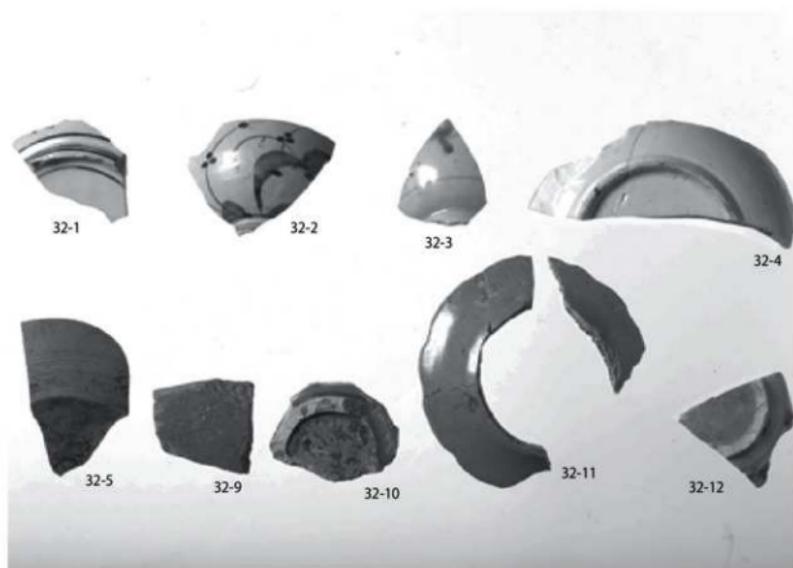
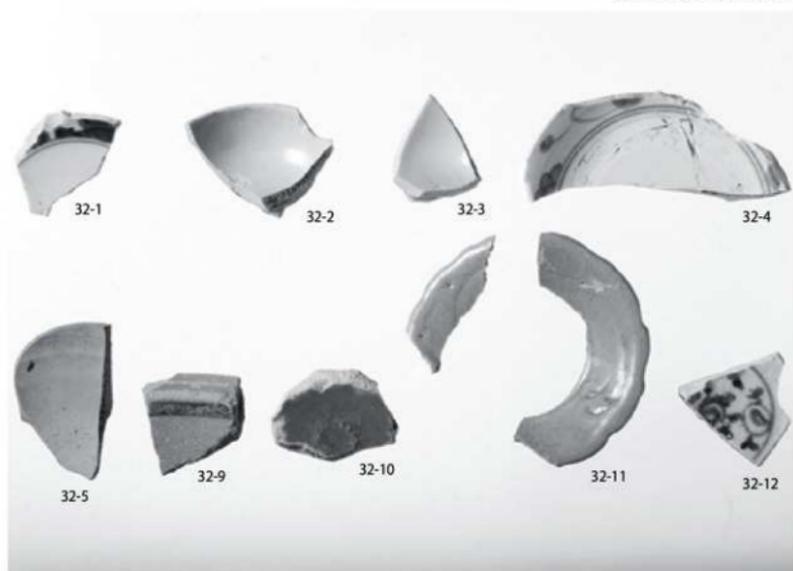
蔵廻り遺跡 B 区 SD1 完掘 (東から)



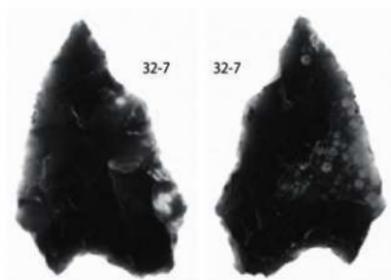
藏廻り遺跡 A 区出土遺物 (1)



藏廻り遺跡 E 区出土遺物 (1)

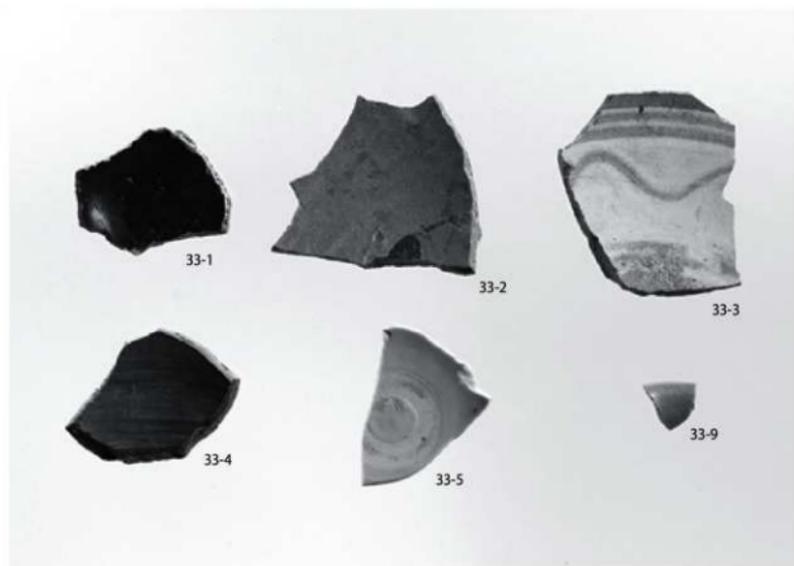


藏廻り遺跡 F 区出土遺物 (1)

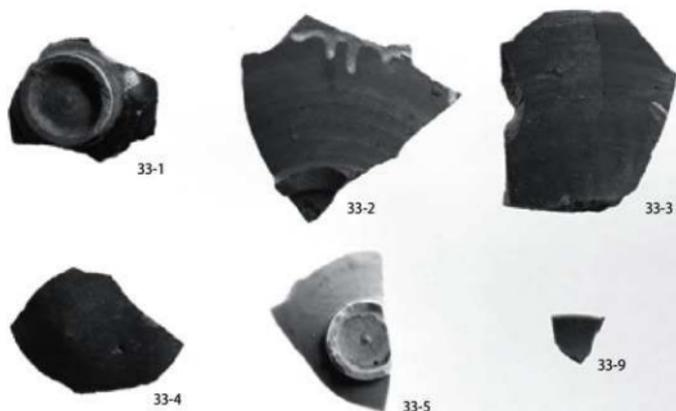


蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (2)

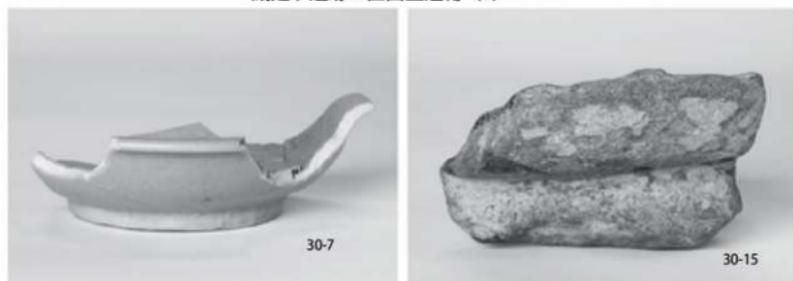
蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (2)



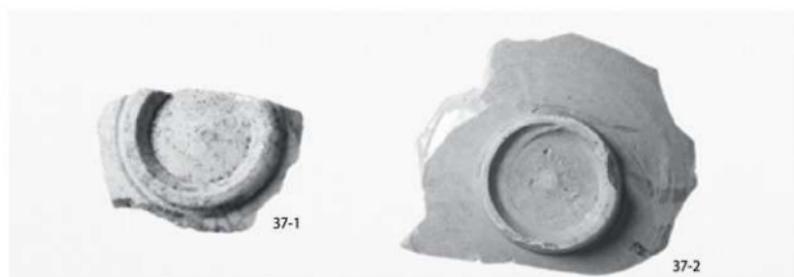
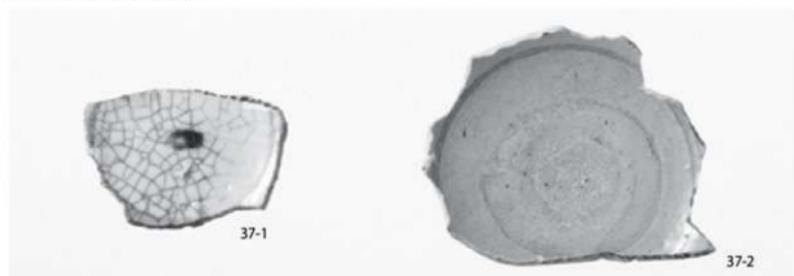
蔵廻り遺跡 F 区出土遺物 (3)



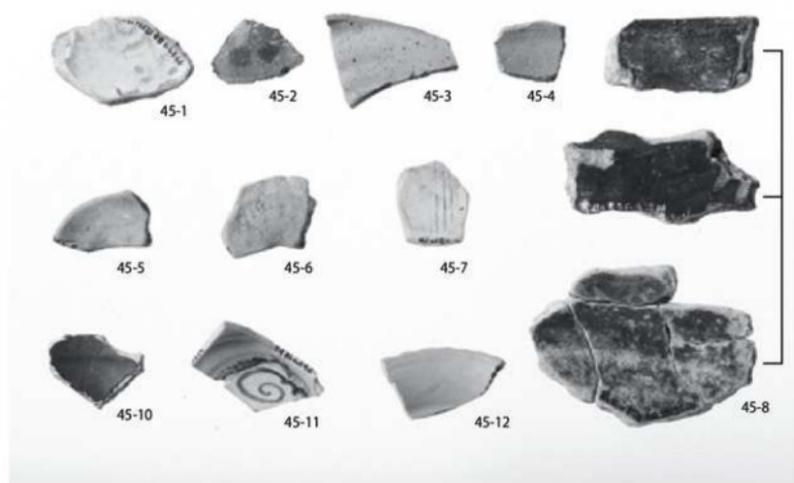
藏廻り遺跡 F 区出土遺物 (4)



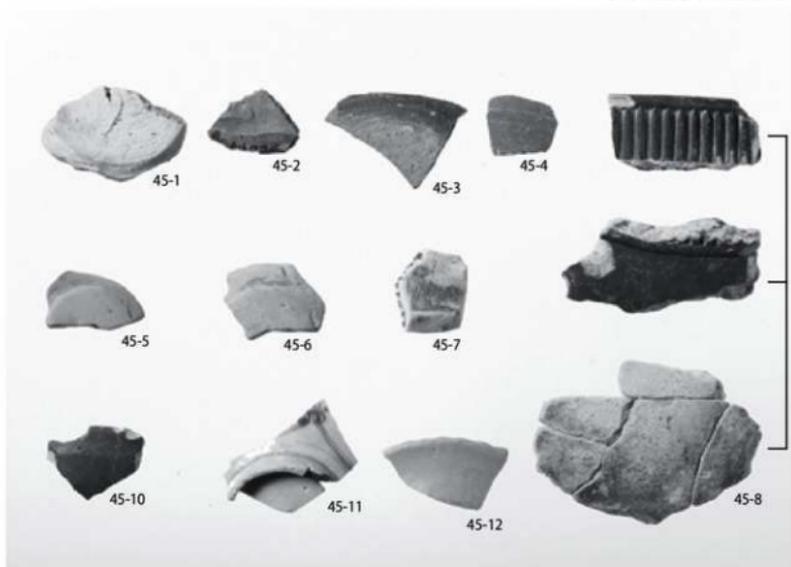
藏廻り遺跡 F 区出土遺物 (5) ・ A 区出土遺物 (2)



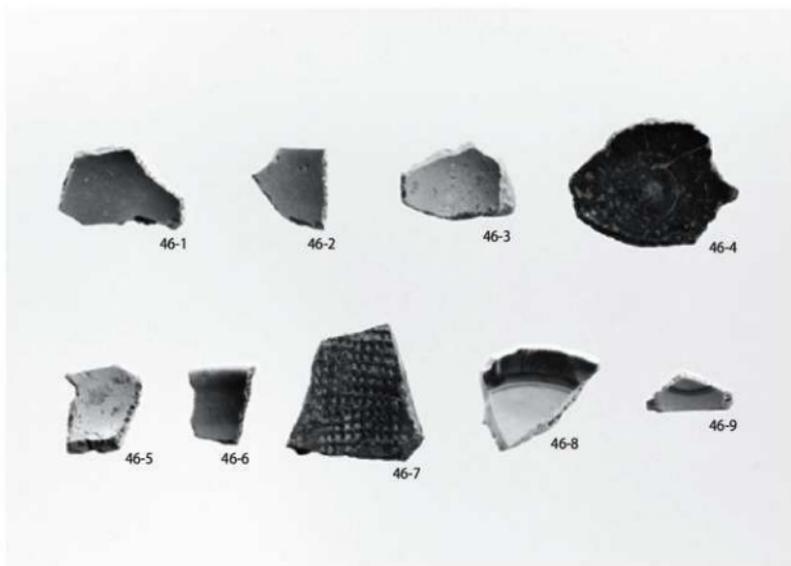
蔵廻り遺跡 D 区出土遺物



蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (1)



蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (2)



蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (3)



蔵廻り遺跡 B 区出土遺物 (4)



榎坂窯跡遠景



榎坂窯跡遠景
(東から)



榎坂窯跡調査前
(南西から)



榎坂窯跡
連房式登窯調査前



榎坂窯跡
平坦面 1 調査前



榎坂窯跡
粘土採掘坑跡調査前

榎坂窯跡
連房式登窯検出

榎坂窯跡
連房式登窯
トンバリ遺存状況

榎坂窯跡
連房式登窯
中央セクション



榎坂窯跡連房式登窯完掘



榎坂窯跡連房式登窯上部



榎坂窯跡連房式登窯断ち割りセクション (1)



榎坂窯跡連房式登窯断ち割りセクション (2)



榎坂窯跡連房式登窯第3室



榎坂窯跡連房式登窯第5室



榎坂窯跡連房式登窯煙道部 (1)



榎坂窯跡連房式登窯煙道部 (2)



榎坂窯跡連房式登窯煙道部 (3)



榎坂窯跡連房式登窯第3・4室作業テラス



榎坂窯跡連房式登窯第5室作業テラス



榎坂窯跡連房式登窯作業テラス断ち割りセクション



榎坂窯跡連房式登窯排水溝



榎坂窯跡連房式登窯
排水溝切り合い



榎坂窯跡連房式登窯
排水溝セクション



榎坂窯跡
連房式登窯
排水溝内モミツチ出土
状況

榎坂窯跡連房式登窯
煙道下部構造



榎坂窯跡連房式登窯
SK1 セクション



榎坂窯跡礎石建物群





榎坂窯跡 SB1 (北東から)



榎坂窯跡 SB1・SK1 (北東から)



榎坂窯跡 SB2 (南西から)



榎坂窯跡 SB2 (北東から)



榎坂窯跡 SB1 南辺石列



榎坂窯跡平坦面 1 セクション (第 57 図 C ライン)



榎坂窯跡 SB1 根石出土状況



榎坂窯跡 SK1 完掘



榎坂窯跡
粘土採掘坑



榎坂窯跡
粘土採掘坑
縦断セクション (1)



榎坂窯跡
粘土採掘坑
縦断セクション (2)

榎坂窯跡
粘土採掘坑
横断セクション (1)

榎坂窯跡
粘土採掘坑
横断セクション (2)

榎坂窯跡
SX1 (1)



榎坂窯跡 SX1 (2)



榎坂窯跡 SX1 (3)



榎坂窯跡 SX1 堆積土



榎坂窯跡平面 1 肩部



榎坂窯跡平坦面 2 瓦列



榎坂窯跡トレンチ7セクション (1)



榎坂窯跡トレンチ7セクション (2)



榎坂窯跡トレンチ8セクション



榎坂窯跡
物原セクション



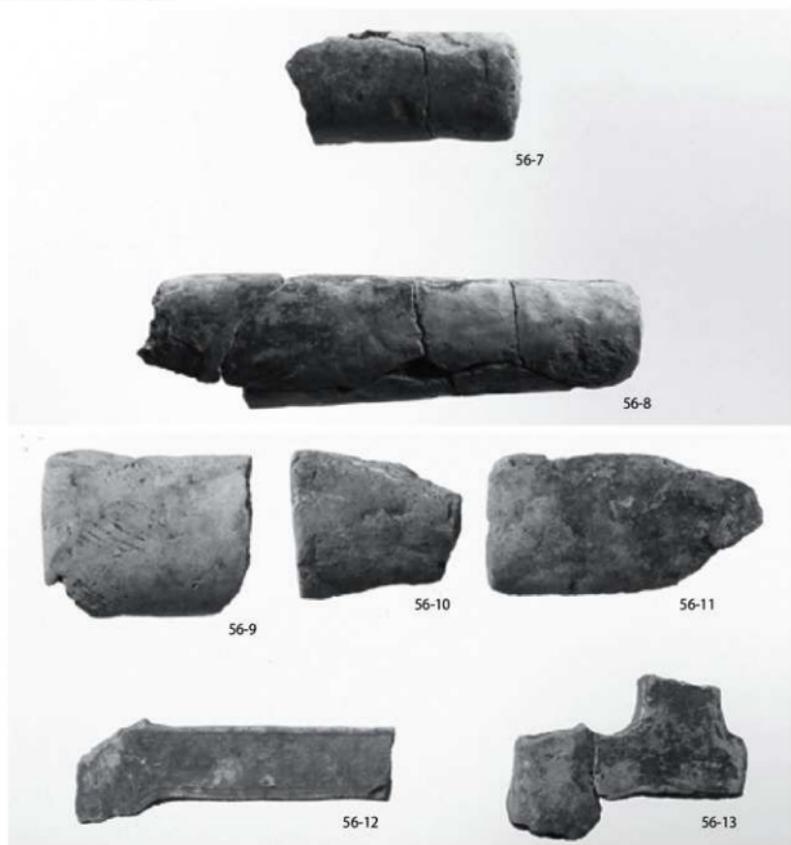
榎坂窯跡
トレンチ2セクション



榎坂窯跡
トレンチ3セクション



榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (1)



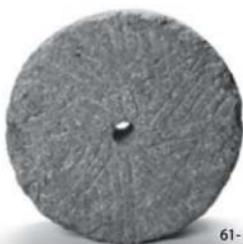
榎坂窯跡連房式登窯周辺出土土製品 (2)



榎坂窯跡 SB1・SD1 出土遺物 (1)



61-3



61-4

榎坂窯跡 SB1・SD1 出土遺物 (2)



63-1



63-2



63-3



63-4



63-4

榎坂窯跡 SB2・SD2 出土遺物



72-1



72-2

榎坂窯跡出土遺物 (1)



72-3



72-4



72-5



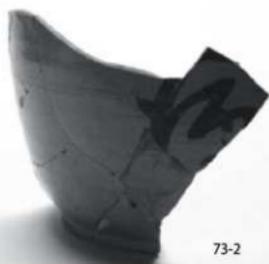
72-6



72-7



72-8



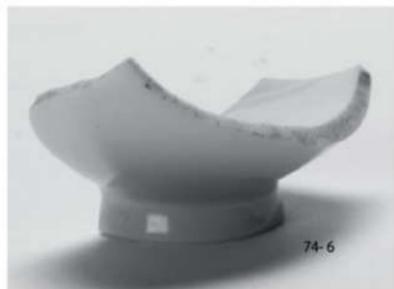
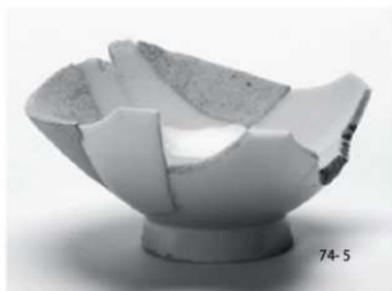
73-2



74-1



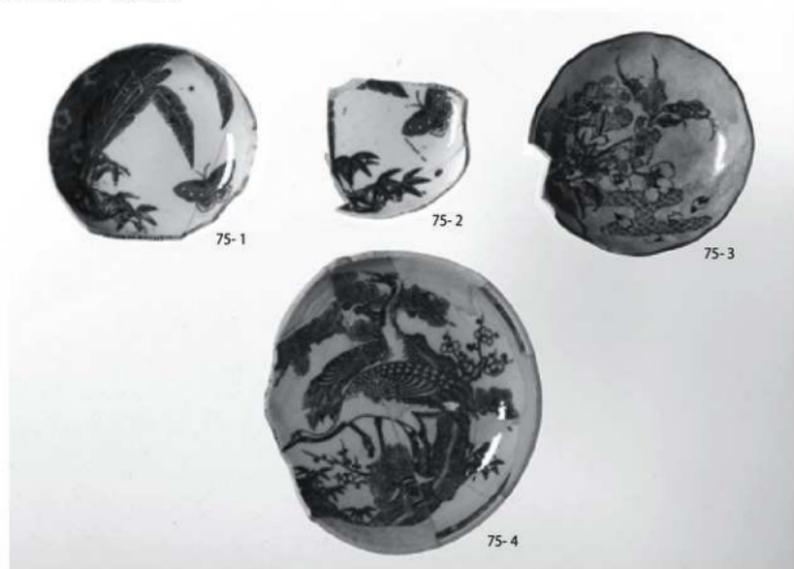
榎坂窯跡出土遺物 (3)



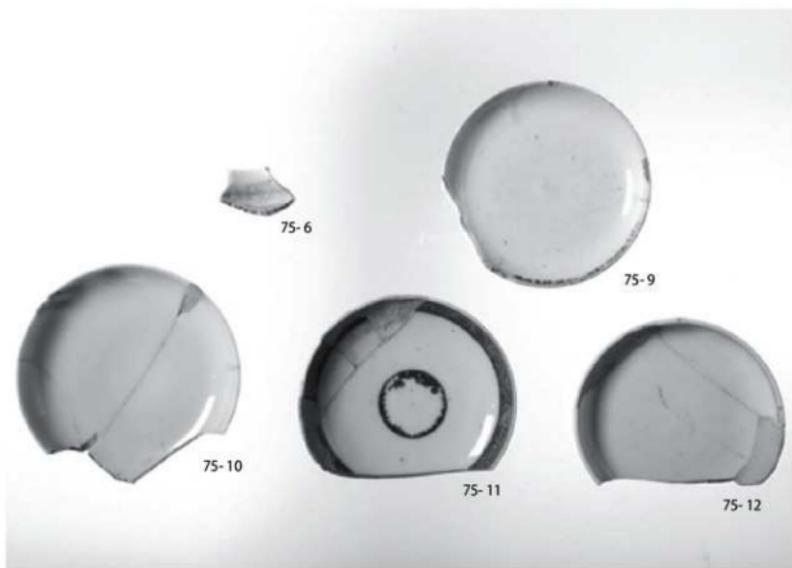
榎坂窯跡出土遺物 (4)



榎坂窯跡出土遺物 (5)



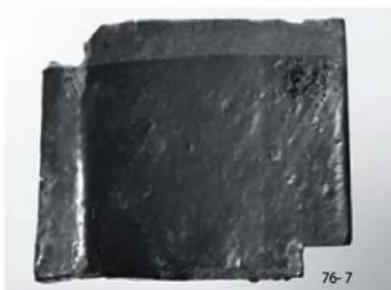
榎坂窯跡出土遺物 (6)



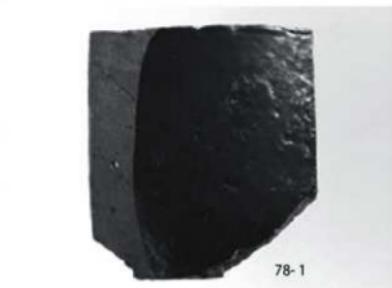
榎坂窯跡出土遺物 (7)

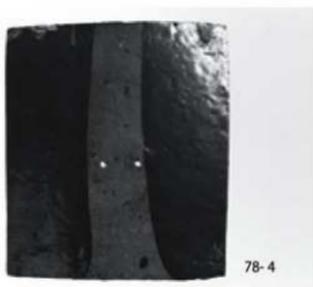


榎坂窯跡出土遺物 (8)



榎坂窯跡出土遺物 (9)





榎坂窯跡出土遺物 (11)



78-12



79-8



79-1



79-2



79-3



79-4



79-5



79-6



79-7



Pno.12 写真のみ



79-9



79-10



榎坂窯跡出土遺物 (13)



写真のみ掲載



写真のみ掲載

報告書抄録

フリガナ	グワマワライセキ エノキザカカマアト							
書名	蔵廻り遺跡 榎坂窯跡							
副書名								
シリーズ名	一般国道9号(三隅益田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	2							
編者名	久保田一郎、渡邊正巳							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL:0852-36-8608TEL:0852-36-8608 E-mail:maibun@pref.shimane.lg.jp							
発行年月日	2019年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くらまわいせき	しまねけん 島根県 ますだし 益田市	32204	Q356	34°	131°	20170908～ 20171220	3,100	一般国道9号 (三隅益田 道路)改築 工事
蔵廻り遺跡	にしひらほらちよう 西平原町			45°	52°	20180508～ 20180920		
えのきざかかまあと	しまねけん 島根県 ますだし 益田市	32204	Q354	34°	131°	20160524～ 20161115	1,800	一般国道9号 (三隅益田 道路)改築 工事
榎坂窯跡	つだちちよう 土田町			45°	54°			
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
蔵廻り遺跡		平安時代		河道跡				輸入陶磁器 の年代は、 15～16世紀 が中心
	集落遺跡	戦国時代		ピット		中世土師器、輸入陶磁器		
		江戸時代		土坑		肥前系磁器、石器		
榎坂窯跡		大正時代		連房式登窯				瓦の製作工 程全体に関 わる遺構を 検出
	窯業遺跡	昭和初期		礎石建物		瓦、窯道具、陶磁器		
要 約	<p>益田市東部に所在する2遺跡の報告書である。</p> <p>蔵廻り遺跡では戦国時代の河道跡及びピット、土坑群が確認された。河道跡からは輸入陶磁器が出土している。河道跡は、江戸時代初期に水流が途絶えた後は水田化され、水田に伴う石垣、根太列が確認された。ピット、土坑の一部は中世に遡ると推定される。</p> <p>榎坂窯跡では瓦を焼成した連房式登窯、工房と推定される礎石建物跡が確認された。遺物の刻書等から、操業者は江里安太郎氏、操業時期は大正時代から昭和初期と推定される。</p>							

印刷仕様

紙質	表紙	レザック四六判	175kg
	本文	上質紙A判	57.5kg
	写真図版	上質コート紙A判	70.5kg
DTP	Windows10		
	Adobe IndesignCC	PhotoshopCC	
	IllustratorCS5		
画像原稿	階調画像線数	175線（AMスクリーン）	

蔵廻り遺跡 榎坂窯跡

一般国道9号（三隅益田道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書2

発行 2019（令和元）年9月
発行者 国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所
島根県教育委員会
編集 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131 島根県松江市打出町33番地
電話 0852-36-8608
印刷 株式会社谷口印刷